

# 『言語学少女とバベルの塔』

seren arbazard



<目次>

言語学少女と図書館とふたつの嘘	……5
言語学部	……16
伝統的言語研究・比較言語学	……30
ソシュール・バベルの塔	……48
音韻論・音声学	……54
類型論	……69
形態論	……83
武道会	……103
統語論	……110
意味論・諸論	……125
認知言語学・機械翻訳・言葉と文化	……147
アンチバベル	……169
告解	……175
7月19日	……177
人工言語	……178
すれ違うふたつの同じ嘘	……192
あとがき	……194
参考文献	……202
索引	……205

「『走る』は英語では run。これは誰でも知ってる。

フランス語では courir。course（コース）などと同じ語源だ。

ドイツ語では rennen。英独は兄弟関係にあるから run に似ているよ。

イタリア語では correre。仏に似ているね。

スペイン語とポルトガル語では correr。伊とほとんど変わらない。

ラテン語では currere。仏伊西葡が似ているのは、どれも元がラテン語だからだ。

ギリシャ語では τ ρ ε χ ε ι ν。車のトラックの語源は車輪だが、この語まで遡れる。

ロシア語では б е ж а т ь。カタカナにするとビジャーチといったところかな。

アラビア語では رَكَنٌ。文字だと右から rakaDa と読むから注意だ。

フィンランド語では juosta。語幹は juoks だが、不定詞にすると juoks+ta が juosta になる。

韓国語では 달리다。日韓は文法は似ていると言われるが、固有語同士はそうでもない。

そして中国語では跑。もはや『走』という字ですらないんだ」

流れる水のように各国語を呟いた僕を見て、彼女は涼しげな顔で問い返した。

「——じゃあ、『走る』と『歩く』の違いは？」

<言語学少女と図書館とふたつの嘘>

高校の図書館。小雨降る6月の放課後。

僕は語学コーナーで気になった背表紙を手にとろうとした。

すると白く細い指が同時に背表紙に触れ、僕はとっさに左を見た。

そこにはふわふわした亜麻色の髪の子がいた。彼女は隣の言語学コーナーから手を伸ばしていた。

「あ、どうぞ」

とっさに手をどけると、彼女も同じタイミングで「どうぞ」と手をどけた。

それが面白かったのか、あるいは気まずさを紛らわせるためか、彼女はクスッと笑った。

僕が笑い返すと、彼女は猫のように丸い眼でこちらを見つめた。外国人の血が入っているのか、宝石みみたいな緑の瞳をしていた。そのまま飲み込まれそうな深い瞳だった。

思わず緊張した僕がとっさに目を逸らそうとすると、彼女はそっと呟いた。

「語学と言語学は近いようで遠い。

——貴方とわたしの距離は？」

「え……？」

それは小さな囁きだった。聞こえなかったことにすれば無かったことになる言葉。だけどそれは不思議と僕の胸に突き刺さった。

「語学が好きなんですか？」

肩より少し長い髪を掻き上げながら、「語学」と書かれた棚を見上げる彼女。

「うん、まあ」

正直、語学には自信がある。相当な知識があるといっても過言ではない。

「じゃあ『走る』をいくつかの言葉で言えますか」

彼女は試すかのように尋ねてきた。

だから僕は持ち前の語学の腕を活かして、冒頭のように述べた。

14ヶ国語も並べたてた僕は、尊敬の眼差しを得るものと期待していた。

だが彼女が返したのは「『走る』と『歩く』の違いは？」という問いだった。

僕はとっさのことで頭が真っ白になった。そんなこと、考えたこともない。

「歩く」が walk であるとか、中国語では「走」と書いて実は歩くという意味なのだから、そういうことならいくらでも知っている。

だが「走る」と「歩く」の違いなど考えたこともなかった。

混乱する僕を前に彼女は小さく微笑むと、「それが語学と言語学の違い」と言った。

「言語学……」

「語学と言語学は近くて遠い。

どちらも言葉を対象とするけど、言語学は言葉そのものを研究する。

本棚はいつも隣同士。よく同じ分野だと誤解される。だけど実は両者の距離は遠い」

物理的には近くとも実際はそうでない。まるで今の自分たちのようだった。

「じゃあわたし、行くね」

彼女は桃の香りを残して去っていった。

僕は思わずしゃがみこんでしまった。

自分は子供のころから語学が得意で、言葉に関しては何でも知っている気になっていた。

理系クラスにいるのに語学が好きで、文転しようか迷っているほど好きだった。

だが実際には、母語の単語の意味の違いも説明することができなかったのだ。

彼女は唐突に現れ、僕に新しい世界を見せて去っていった。

不思議な子だったな……。

ふと彼女の端整で愛らしい顔が思い出され、顔が赤くなる。まるで妖精のようだった。

立ち上がろうとした際、足元に何か落ちていたのに気付いた。

「学生証だ……」

定期入れの一番上に学生証が入っていた。彼女のものだろう。写真の顔が同じだ。

学生証には初月綺夢と書いてあった。「ショゲツキム？」と思ったが、ローマ字で Miyu Hazuki と書いてあるので「はづきみゆ」と読むのだろう。

「みゆ……か」

どうやら学年は自分と同じく3年らしい。ともに受験生だ。

学生証によると、クラスは文系特進科のようだ。理系の自分とは異なる。

届けたほうがいいよな……。

腰を上げ、図書館を出て昇降口へ降りる。外は小雨が降っていた。

翻って相手のクラスに行くべきか。いや、今はもう放課後だ。帰宅部なら帰っているだろうし、部活をやっているなら部室にいらろう。

明日にするかと思ったところで、見知った顔が歩いてきた。その顔はこちらに気付くと、顔の分際で手を振ってきた。頭は何でも体のパーツに命令できていいよな——などという考えがよぎった。

「よう」と気さくに声をかけられた。

クラスメート兼友人の大河原丈士だ。「おおがわら」と呼ばれるのを嫌う。正しくは「おおかわら」だそう。下の名前は「じょうじ」と読みたくなるが、そこは堪えて「たけし」。居そうで居ない、居なそうで居そうな名前だ。

「部活はどうした、丈士」

こいつは女にモテるためだけにテニス部に入ったような愚か者だが、いつも陽気でひょうひょうとしているせいか、どこか憎めないところがある。どちらかと言えば愚直なタイプの僕と性格が違うのに上手くやっていけるのは、こいつの人懐っこい性格によるものだろう。

「この雨じゃコートはびしょびしょ。体育館で基礎トレしかできん」と肩をすくめる。「で、帰宅部のお前さんは？」

「ああ、この子の学生証を拾ったので届けようと思うんだが……」定期入れを見せる。「居場所が分からなくてね」

「初月綺夢じゃないか」

「流石女のことには詳しいな」

「おいおい」驚いたような呆れたような顔になる。「学年首席の初月だぞ。お前、どこの学校の生徒だよ」

「そんなに有名なのか」

「容姿端麗、頭脳明晰、更に性格まで良いときた。いわゆる高嶺の花だな。ある意味誰も手を出せん」

ウチの学校は理系>文系という明白なカーストが存在する。文系クラスは理系の授業に着いていけない連中が落ちていくところというイメージがある。綺夢という子は文系クラスにもかかわらず、学年首席らしい。稀にそういう根っからの文系人間がいるものだ。

「ふうん」あまり関心のないふりをしておく。「で、その高嶺さんが何部か知ってるか」「ああ」一瞬言いよどむ。「図書館とコンピュータ部の間に小さめの教室があるだろ？　そこでなんちゃらかいマイナーな部活をやってるらしい。3年の6月なのにまだ引退しないそうだけ」

丈士に礼を言うと、僕はなんちゃら部に向かって歩いていった。思い出せないほどマイナーな部活というのは一体何なのだろうか。宗教？　オカルト？　ミステリー？　いかん、頭がぐるぐるしてきた。

はたして図書館とコンピュータ部の間には小さな教室があった。ふつうの教室には前後にドアが1枚ずつあるが、ここは狭いのでドアが1枚しかない。

唯一の入り口にはポスターが貼ってあった。ポスターの内容は何かの絵画だ。崩れた塔のように見える。これは一体何なのだろう。

ドアの上には印字された明朝体で「言語学部」と書かれたプレートが貼ってあった。「言語学部……」

少なくともオカルトの類でなくて良かった。

コンコンとノックすると、中から「はい」と声がした。

「すみません」と言って入ると、中はやはり通常の教室の半分ほどの広さだった。左手の本棚にはたくさんの本が並んでおり、奥には窓があり、右手にはホワイトボードがある。中央には四角いテーブルがあり、先ほどの少女がドアに相対して座っていた。椅子はパイプ椅子が2つしかない。他の椅子は折りたたんで窓辺に立てかけてある。

部屋の中には先ほどの綺夢という少女しかいなかった。まさか部員は彼女だけということはあるまいかと邪推する。

「あつ、さっきの」



彼女は少し驚いた風だった。僕としては「学生証が落ちてたので、帰りがてら寄ったままで。別に君を追ってきたわけじゃない。なに、礼には及ばない」などとスマートに告げて颯爽と立ち去りたかったのだが、そんな気風の良いことを知らない女子の前でさらっと言うてのけられるのは丈士くらいなものだ。

「あ……あの……が、がが、学生証……」

どんなどもりだ。いつから吃音を患った、自分。しかも小声とか。

「え？」

聞き取れなかったのか、彼女は立ち上がって近付いてきた。ふわっと桃の香りが漂い、僕は余計に困惑した。

「おち……落ちてた……から」ずいっと無愛想に定期入れを差し出す。もはやストーリーでないことを主張するので精一杯だった。

語学など、自分の得意な分野の知識をひけらかすときは口がよく回る。だが日常生活における日常会話を女の子とスムーズにできるほど僕は器用ではなかった。

「やだ、わたし、なくしちゃってたんだ」学生証を受け取ると嬉しそうに微笑む。「ありがとうございます」

「いや……別に」

微笑みかける彼女。目を背ける僕。

このまま沈黙が10秒。この10秒は長すぎる。あまりに気まずい。拷問といってもいい。

「……じ、じゃあ」

なぜ10秒間も黙っていたのか、僕には分からない。何かこれ以上のイベントを期待していたとでもいうのか。さっさと渡して10秒前に帰れば、せめて気持ちの悪い男でなく親切な人のままでいられたというのに。

「——答えは一緒に届けてくれないんですか」

気まずい沈黙に耐え切れなくなって部屋を出ようとした瞬間、彼女はそう呟いた。

「え……」

思わず振り向く。

「学生証、確かに受け取りました。でも、『走る』と『歩く』の違いの答えはまだです」

彼女は胸の前で定期入れをきゅつと握って僕を見つめていた。窓辺から差し込む西日が赤い。おかげさまで、多分僕の顔が赤いのはバレていない。

「ここ……部活なの？」おそるおそる問う。

「はい」無邪気に微笑む。「言語学部です。わたしは部長の初月綺夢。貴方は？」

自己紹介をすると、彼女は「せっかく届けてくれたんだから、お茶くらい飲んでいってください」と言ってパイプ椅子を引いた。

僕は言われるままに座った。彼女はお茶を淹れる。

本棚を眺める。新書から専門書まで様々だ。小さいものだと岩波新書の金田一春彦『日本語』上下巻。大きいものだと三省堂の亀井孝『言語学大辞典第6巻術語編』。大きさも格調も異なる様々な本が所狭しと詰め込まれていた。

本は一応ちゃんと並べられていたが、サイズやジャンルごとに整理されているようには見えなかった。ただきちんと収まっているだけで、分類された形跡がない。本当に読んでいるのだろうかと疑いたくなる。買うだけ買って読まない人間の本棚というのは得てしてこういうものだ。

「これは……ずいぶんな量だけど、全部読んだの？」

「はい」お茶をテーブルに置きながら、彼女は僕の前に座る。

「それにしてはジャンル分けとかがされていないような」

「全部覚えてますから」ケロッとやってのけた。「どの本の内容も、どこに何が置いてあるかも」

見かけによらず大口を叩くものだ。お茶を一口含んで気持ちがりラックスしてきたのもあって、ちょっとからかってやりたい気持ちになった。

「本当に？　じゃあ後ろを向いて。ええと、影山太郎『日英対照動詞の意味と構文』はどこにある？」

「左から2番目の棚の上から3段目のところにあると思います。シリーズ物ですよ。青い表紙の形容詞・副詞編は左から4番目の棚に、緑の表紙の名詞編は同じ棚のひとつ下の段にあります」

調べてみるとまさに言われたとおりだった。学年首席だけあって凄まじい性能の記憶力を持っているようだ。物事を整理できない人は頭が悪いとよく言うが、頭が良すぎると整理する必要すらなくなるのかもしれない。

ということは、ここにある本を全部読んだということも恐らく本当なのだろう。思わず嘆息した。

「あの……」彼女は戸惑うように口ごもった。「同じ学年ですよ。丁寧語を止めてもいいですか？」

「あ、うん。遠慮なく。てゆうか、ふつうにそうして」

そのほうがこちらも緊張してどもったりしないで済む。

「よかった」にこりとする彼女。「わたしあまり丁寧語って得意じゃなくて。なんだか距離を感じるから」

それは僕との間に距離を感じたくないということだろうか。また顔が熱くなる。

「初月さんは……」と言いかけたところで、「綺夢でいいよ」と言われた。ずいぶん親しげだなと思った。これはもしや僕に気があるのではと思ったところで、「みんなそう呼ぶから。初月さんっていう言い方には慣れてないの」と言われて、ちょっとがっかりした。

「じゃあ綺夢……は、一人でこの部活をやってるの？」

「ううん」彼女もお茶を飲みながら首を振る。「もう一人いるよ。今日は生徒会があるから来てないけど」

ああなるほど、それでパイプ椅子が2つ置かれていたのか。しかし2人しかいない部活というのはどうなのだろう。よくそれで部活として成立するものだな。

「ところで『走る』と『歩く』の違いについて考えてみたんだが、『歩くより速い移動が走る』で、『走るよりゆっくりな移動が歩く』と言えばいいんじゃないか」

「ううん……」綺夢は口ごもった。「それには問題が2つあるね。『走る』と『歩く』の説明の中で『歩く』や『走る』などという言葉を使うのは循環定義といって、あまり良くないこととされているの」

「循環定義？」

「例えば辞書で『大きい』を引いたとき『小さくない』と書いてあって、『小さい』を引いたとき『大きくない』と書いてあったら？」

「使えない辞書だと思う」

「——よね。循環定義っていうのはそういうこと」

「実際にそんな馬鹿げたことがあるのか」

「流石にそこまで露骨なのはないけれど、辞書——とりわけ古い辞書には循環定義がよく見られるよ」

「僕の説明の問題点のひとつは分かった。循環定義だね。ではあともうひとつは？」

学問の話になると僕は総じて口が回る。彼女のような美少女を前にしても怖気づかずにいられる。学問は僕を守ってくれる精神的な鎧だ。

「もう一つの問題点は、そもそも貴方の定義が間違っているという点」

「言ってくれるじゃないか。だって『走る』は『歩く』より速い移動だろう？」

「ゆっくり走るのと競歩並みに速く歩くのでは、後者のほうが速いよね」

「そうかな。それでも走るほうが速そうだけど」

「じゃあその場走りと歩行を比べてみたらどう？ 歩くほうが速いでしょ」

「確かに……」

「それにその場走りが走るの定義に入るのなら、走るの定義から『移動』という言葉も除かなければならない」

「そりゃそうだ」言われて納得する。「単なる国語の言葉遊びかと思ったが、案外論理学に近い厳密さがあるんだな」

「言語学は論理的な科学だから」彼女は謎めいた笑みを浮かべた。

「さて、それじゃあどう定義したものか」

「貴方の定義は日常的な直感においては間違っていない。ふつう走るほうが歩くより速いからね。だけど厳密な定義としては通らない」

「その場走りが許されるならその場歩きも許されるよな。両者の間の違いはなんだろう」お茶を啜る。「その場走りのほうがその場歩きより手足が動くのが速い。つまり、手足を速く動かすのが『走る』だ」

「そんな曖昧な定義だと『泳ぐ』も入ってきちゃうよ。それに、さっさかその場歩きをしたら、ゆっくりその場走りするより手足は速く動くと思うな」

「むう……」手詰まり感が出てきた。

「実際にその場走りとその場歩きをやってみれば、違いがわかるかもね」

綺夢に言われて立ち上がり、実際にやってみた。放課後のマイナーな部室で僕は一体何をしているのだろう。

だがやっているうちに、ふとあることに気付いた。

「うん？　そういえば歩いているときは常に両足のどちらかが床に着いているけど、走っているときは両足が宙に浮く瞬間があるな」

すると綺夢はばあつと顔を明るくした。「そう、そこなの！」

僕は再び椅子に座る。何か掴めた気がした。

「つまりこういうことか。『走る』と『歩く』の違いは速さにあるわけではなく、両足が宙に浮く瞬間があるかないかの違いにあると？」

満足気に頷く綺夢。彼女は「明察！」と言って手を打った。

「ふう、これで一件落着か。単語の意味をひとつ定義するのもえらく考察がいるんだな」「でもわたし、貴方はセンスがあると思う。言語学をやったことがない人は、すぐにこんな答えが出せないから」

素直に褒めてくる綺夢に僕は照れ、目を逸らした。目線の逃げ場所は本棚だ。ここには国語辞典が何冊も並んでいる。これらの辞典に刻まれた一語一語の定義もこんな問答の末に定められたものなのかと思うと何だか胸が熱くなった。

「そうか……そうだよな。ここにある辞典はどれも何万語という単位で言葉が載っている。そのひとつひとつがこういう考察を経て作られているのか」

綺夢はそれを聞くと嬉しそうな顔をした。まるで自分が褒められているかのような表情だった。

「まあここまで細かい考察は基本語にこそ見られるものだけだね。ただ、そう読み取れる感受性があるっていうのはすごいことだと思うな」

「いや、別に……」

「ううん、本当にそう思う。辞書のありがたみなんてみんな分かってないし、それどころか引くことすら面倒臭がるでしょう？　でも辞書っていうのは編集者のほか、言語学や語学の専門家たちが練りに練って編み出した考察の集積なの。いわば考察でできた塔よ。なんでもない単語の定義の中に、ものすごく深い言語学的考察が含まれているんだよ」

「そう思うと辞書って凄いな。今日初めて思った」僕は改めて綺夢を見た。「いや、辞書が凄っていうことは語学好きの僕はもちろん分かっていた。でも語学屋の僕からすれば、

辞書はあくまで外国語を読み解くツールでしかなかったんだ。それを作っている裏方の苦労なんて考えてこなかった」

「それが分かってもらえたら嬉しい」

両拳の上にあごをちょこんと乗っけて、綺夢は微笑んだ。その仕草があまりに愛らしくて、僕はまた目のやりどころに困った。

「ふうん、なるほどね。これが言語学部の活動か。普段からこうして単語の意味の定義をしているの？」

「そういうことをするときもあるね。だけど言語学の分野は広いから、それだけじゃない。単語の意味を定義するだけだったら辞書部って呼んだほうがいいでしょ。今わたしたちがやったのは、言語学的にはそうだなあ……語彙論とか辞書学みたいなものかな」

「語彙論……なんだか分からんが、色々あるんだな」

湯のみを見ると空になっていた。

「そろそろお暇するよ。お茶もごちそうになったし、学生証のほかに『答え』も届けられたようだからね」

ついにようやく口がまともに回るようになって良かった。だがそれも学問という共通の話題があつてこそ。日常会話のレベルになると急激にだもってしまうのは火を見るより明らかだった。今のうちに撤退したほうが身のためだ。

まあ自分の人生の中で学年首席の美少女などという小説めいたキャラクターと話すことなど、後にも先にももうないだろう。今日が特別。非現実には足を踏み入れた特別な日。明日からまたふつうの日々が戻る。ふつうの受験生としての気だるく憂鬱な……。

立ち上がってドアノブに手をかけると、彼女は寂しそうな声で呟いた。

「今日はありがとう。学生証も、楽しい会話も……」

……楽しい？ 今楽しいって言ったか。あれが彼女にとっては楽しい会話だったのか。そもそも楽しかったというなら、なぜ声がそんなに寂しげなのだ。

——彼女は僕が去ることを望んでいない……？

心臓の鼓動が少し早くなった。

僕はドアノブを握った。握ったまま、数十秒が過ぎた。1分にも満たないのに、途方もなく長く感じた。

僕はなぜ部屋を出ない？僕はなぜドアノブを握ったままにいる？僕は綺夢に何を期待している？綺夢は僕に何を期待している？

刹那、かさつと紙を広げる音がした。

「ねえ……」

その声に振り返ると、綺夢は彼女の肌のように白い紙を広げて立っていた。

「『広い国』って言えるよね？」

「え？」突拍子もない質問に戸惑う。「あ、ああ……そうだな」

「『広い公園』とも言えるよね」

「い、言えるな」

だからなんだと言うんだ。

「なんで国や公園は広いと言えるの？」

「そりゃ面積が大きいからだろ」

すると綺夢は大きな紙を広げて見せた。

「——じゃあ、どうしてこれは『広い紙』と言えないの？」

その言葉は僕の胸に深く突き刺さった。

僕はしばらく黙ったままドアノブを握っていた。

やがて口を開こうとした瞬間、綺夢は悪戯げに微笑んで呟いた。

「『答え』のお届け日は明日以降でお願いします」

それはつまり明日も僕に来いという——。

僕は黙ったまま下を向くと、小さく頷いてドアを開けた。

## <言語学部>

翌日は晴れていた。梅雨だというのに傘がいらないほどに。

だが僕の頭は曇っていた。謎の少女、初月綺夢。不可解な部活動、言語学部。ひよんなことから彼女に出会った僕は、この非日常にどう対処すればよいのか考えめぐねていた。

正直自分の進路のことで頭がいっぱいなのに、これ以上余計な悩みを抱えたくなかった。僕は理系クラスだが、語学が好きだ。大学では語学を専攻したいと思っている。

だがそうすると文転せざるをえない。しかしこの学校で文転といえばそれはイコール脱落ということの意味する。よって教師はそう簡単に文転を認めようとしな

い。それに将来の就職のことを考えても文系は理系に比べて選択の幅が狭いとか、底辺の大学だと営業ばかりだとか、あまり良い話を聞かない。正直僕みたいな内向的な人間に営業が務まるはずもない。

できれば大学に残って研究を続けたいが、今の世の中講師にすらなれないのが常と聞く。教授など夢のまた夢だ。研究だけで食べていくのは難しいだろう。

大人しく理系のまま進めばどこか適当な企業の研究室や開発部に潜り込めるかもしれない。少なくとも営業よりはずっと自分に向いているし、教授になるよりは遥かに敷居が低い。

もし文転するのだとしたら通訳や翻訳という道もある。語学好きの僕にはピッタリだ。あるいは語学系の出版社という道もあろう。だが通訳や翻訳は基本的に女性の職場だそうだし、男性の職業として見ると生涯賃金は低めだし、収入も不安定だ。語学系の出版社も語学書自体が売れないので悪戦苦闘しているらしい。

そんなわけで将来のことを考えるならこのまま大人しく理系で大学に進学するのが良いのだが、さしたる興味もないのにただ「よりマシなだけ」という理由で将来を決めてしまっているものだろうか。

こここのころそれですずっと悩んでいる。もう3年の6月だ。今更根本的な進路を決めるには遅いといってもいい。

そこにきてあの初月綺夢の登場だ。「走る」と「歩く」の違いなどという問題を出し、今度は「広い紙」はなぜ言えないかという問題を出してきた。彼女に関わる何とだか面倒なことが起こりそうだ。



だが、昨日の議論は面白かった。ああいう考察は嫌いじゃない。言語学とか言っていたが、あれはあれでなかなか面白い体験だった。

放課後。僕は言語学部に行くか行かないか悩んでいた。はっきりまた来いと言われたわけではない。来てもらいたがっているというのは僕の勝手な思い込みかもしれない。勘違い君にはなりたくなかった。

だが、なんとなくあの問題の答えが気になる。昨日あれから一晩考えてみて、自分なりの答えは出せた。これが合っているのか確認したい。

……いや、本当にそれだけか？

綺夢の姿が思い起こされる。155cm くらいしかない小柄な体。中学生と見紛うような華奢な体躯。幼い人形のような彼女はどこか寂しげだった。

僕は本当は彼女にまた会いたいのではないか……？

結局悩んだ末にまたあの部室へ来てしまった。

崩れた塔のポスターの前でしばらく突っ立っていた。

どうしよう。入ろうか。入るまいか。

そう考えた末、やっぱり入らないことにした。あんな問題なんかを真に受けてまたすごすごやってきた惨めな男という印象を持たれたくなかった。

踵を返したとき、ふいにドアが開いて、僕の心臓は飛び出しそうになった。

「あら、お客さん？」

ハッと振り向くと、そこには黒髪ロングの少女がいた。綺夢ではない。

「あ、いや……僕は……」

すると部屋の奥から「あ、昨日の」という声があった。綺夢だ。昨日と同じ位置に座っていた。

彼女は立ち上がると、とてとてと寄ってきた。思わず後ずさりしてしまう。

黒髪の少女は僕を見ると、「ああ、この方がみゆちゃんが言っていた方ね」と頷いた。「言語学部に遊びにいらしたの？」

やけに上品な喋り方をする子だ。雰囲気もお嬢様っぽいし、なんとなくしっくりくる。

「いや、そういうわけじゃ……。ただちょっと昨日の問題が気になって……」

声が急速にデクレッシェンドする。フェードアウトと言ってもいい。僕の声はBGMの終りの部分か？

「え？」

案の定、彼女は聞き取れなかった。

「いや、だからその……。てゆうか、君こそどこに行くところだったんだ」

「手を洗いに」少女は中を見て、「みゆちゃん、ひとつ椅子を出してあげてくださいな」と言うと、僕に「さ、どうぞ」と言った。

僕は困惑しながら中に入った。綺夢が椅子を新しく用意してくれたが、あまりにテンパっていたので昨日の席に座ってしまう。座面が暖かい。今まで黒髪の少女が座っていたのだろう。

「昨日の答え、持ってきてくれたの？」

期待に満ちた純粋な目で綺夢が僕を覗きこむ。

「ま、まあ……。いや、答えかどうかは分からないけど」

再び声がデクレッシェンド。綺夢は首を傾げる。

そうこうしているうちに黒髪の少女が戻ってきた。彼女は自分の椅子が取られたのを気にする風でもなく、僕の右手側に用意された椅子に腰掛けた。目の前が綺夢、右手が黒髪の少女という構図だ。

「あ、紹介するね。昨日言った、生徒会をやってる部員の折口乙女。わたしの友達。同じ3年だよ。文系クラスだから知らないかな」

「おりぐち……おとめ？」

変わった名前だ。娘に乙女と名付ける親の顔が見てみたい。娘が年を取ったときのことは考えなかったのだろうか。

僕は乙女を横見する。背は綺夢より高かった。体格は細身だが、綺夢と違って子供っぽくはない。綺麗な女の子といった感じだ。黒髪はストレートで、滝のように美しい。綺夢とはまた違った美しさがある。

「乙女は生徒会で書記をやってるの。生徒会がある日はこっちに来れないんだけど、普段はいるよ」

「そうなんだ？」

「それで、昨日の答えは出た？」

「『広い紙』と言えない理由だったね。僕が思うに、広いという形容詞は面積が大きいものにはしか使えない。国や公園のようにね。紙は大きかろうとしよせん数平方 cm しか面積がない。だから『広い紙』とは言えないんだよ」

乙女は話を聞きながらお茶を淹れに立った。綺夢はふんふんと面白そうに聞いていた。

「じゃあ、もし公園の面積と同じ大きさの紙を用意したら、広い紙と言えるの？」

「それは……どうだろう」僕は迷った。どれだけ大きくても「広い紙」と言えそうには感じられなかった。「言えない気がするが、そもそもそんな大きな紙を作るという前提がナンセンスだ。そんなの不可能だし、想像だにできない」

すると乙女がお茶をテーブルに置きながら、「私の心の限界が私の世界の限界である」と言った。

「え？」

僕が首を傾げると、「ヴィトゲンシュタインの言葉です」と返した。

「言語学者か？」

「ルートヴィヒ＝ヴィトゲンシュタイン。20 世紀の哲学者ですわ。『論理哲学論考』や『哲学探究』で知られています。

哲学書ですが、どちらも『言葉とは何か』、『意味とは何か』という問いを投げかけています」

「ともあれ今この場面においては、僕が想像できる紙の大きさが僕の世界の限界だという意味に応用したいわけだな」

言ってくれる。大人しそうな顔をしてなかなか人を喰った発言をする子だ。

「いいだろう。仮に 10m 四方の紙を作って屋上から吊り下げたとして。それでも『広い紙』とは言えない。『大きい紙』とは言えるがな」

「となると、貴方が言った『広いは面積の大きさを示す』という定義は偽になるね。だってその紙の面積は十分に大きいと考えられるもの」

「あ……」

そうだった。なに墓穴を掘っているんだ、自分は。

「むう……手詰まりだな。『広い』という言葉はどう考えても面積が関与していると思ったのだが」

「それ自体は間違っていないと思うよ。ただ——」人差し指をピンと立てる。「他に条件が足りない」

「条件……？」

「公園や国と紙の違いは？」

「違いと言われてもな……」

「コロケーションで考えてみようか」

コロケーションというのは単語と単語の組み合わせのことだ。例えば「傘を差す」とは言えるが「傘を開始する」とは言わない。「傘」は「差す」とは一緒に使われるが、「開始する」とは一緒に使われない。なお、一緒に使われることを「共起する」ともいう。

コロケーションは言語によって異なる。「傘を差す」は英語では open an umbrella という。英語では傘は開くものなのだ。このように、単語は他のある単語と組み合わさって使われる。そしてその組み合わせのことをコロケーションという。

英語にするとより分かりやすくなる。コロケーションは collocation と書くが、これは co（共に）-location（位置）が語源だ。まさに共起という原義を持っている。

さて国や公園と紙のコロケーションの違いだが、綺夢は僕に何を言わせたいのだろうか。しばし考えてみた。今までは「広い国」のように形容詞と名詞のコロケーションで考えてきたが、今度は視点を変えて名詞と動詞のコロケーションで考えてみよう。

「そうだな……例えば『公園にいる』とは言えるが、『紙にいる』とは言えない」

すると綺夢の顔が華やいだ。感情がすぐ表に出る子だ。どうやらこの方針で良いらしい。

「『いる』という動詞と共起できないのはどうして？」

綺夢の言葉に促され、「『紙』は『場所』ではないから……？」と答えた。

「明察！」

綺夢はパンと手を打った。どうやらこの「明察」というのは彼女の口癖らしい。昨日も同じことを言っていた。

「そう、公園と紙の違いは場所性の有無」

「場所性？」

「場所としての性質を持っているかということだよ。国も公園も場所だけど、紙は場所じゃない」

「つまり『広い』は『場所性を帯びたものの面積が甚大であること』を意味するというわけか」

「そう。それが『広い』の中心的な語義」

「中心的な語義？」

「ひとつの単語にはいくつか語義がありますわよね」乙女が注射を入れてくる。「『広い』には『顔が広い』のように比喩的な語義もあります。今定義されたのはあくまで『広い』が持つ中心的・本来的な語義にすぎません」

「単語というのは中心的語義を根幹として、様々な語義に広がっていくものなの」

「『顔が広い』は比喩的な語義なのか？」

「だって、その人の頭部が物理的に大きいわけじゃないでしょう？」

「確かに」

僕は腕を組んで天井を見上げた。

ふむ、面白い……。

「言葉というのは数学などに比べて曖昧な存在だと思ってたけど、だいぶ論理学のように厳密に定義することができるんだね」

「そうでもないよ。言語は数式に比べて遥かに扱いづらい。厳密に定義しても、すぐ例外が出てくる」

「例えば？」

「『広い』の中心的語義を『場所性を帯びたものの面積が甚大であること』と定義するのはひとつの解だけど、それだと『狭い』は『場所性を帯びたものの面積が甚大でないこと』と定義できるよね」

「ああ」

「そしたらなぜ『猫の額のように狭い』と言えるかという問題が生じる。猫の額は場所？」

「——じゃないな」

「でも『狭い』と言える。不思議だね。手は広いと言えないか言いつらいのに、額はなぜか広いといえる」

「なあ、実際の辞書では『狭い』はどう定義されてるんだ？」

本棚に目をやると、乙女が麗しい仕草で「どうぞご自由に」と手を差し出した。  
棚から三省堂『デイリーコンサイス国語辞典』を取り出すと、そこにはこうあった。

- (1) 幅や面積が小さい。
- (2) 心や行動が限られている

「……場所性については言及されていないな。僕が最初に出した解と同じくらいいい加減な定義だ」

続いて「広い」を調べるが、「面積(範囲)が大きい」としか書いていなかった。ずいぶんずさんな定義だと思いつつ本を閉じる。まあ小型の辞典はこんなものか。

次に小学館『大辞泉』で「広い」を調べる。第一義は「面積が大きい。空間に余裕がある」となっていた。これも場所性については触れていない。額が広いと言えることについて解決できそうな手がかりはなかった。

「なあ、人体で広いといえるのは額だけなのかな」

「背中なんてどう？」即答する綺夢。

確かに「広い背中」は言えそうだ。「大きい背中」とも言えるが。

「額や背中に場所性はないが、これらはどちらも平面的だ。手なんかと違って面とみなすことができる。だから『広い』と言えるのだと思う」

「じゃあ『広い』の定義から場所性を外す？」悪戯げに微笑む綺夢。

「いやだめだ。場所性を外すと今度は『広い紙』と言えない理由を説明できなくなる」

「そうだね」満足気に頷く。

「『広い』という言葉が『場所性を帯びたものの面積が甚大であること』を示すというのは問題ないと思う。それがあくまで中心的語義だ。」

場所性がないもののうち、額や背中は『広い』と言えるが、紙は『広い』と言えない。どちらも平面なのにだ。違いは……あ、人体か否かか？」

ピンと来た。しかし乙女は苦笑する。

「残念ですわ。画面は人体ではないけど、背中と同じく『広い画面』と言えますわよね？」

「そうか、確かに。場所性を定義に入れると『広い画面』や『広い背中』と言えることが説明つかず、場所性を定義から外すと『広い紙』と言えないことが説明つかない」

なんだかよほど数学より難しく感じられた。誰だ、文系が理系のドロップアウト先だなんて言った奴は。

「ちょっとまとめてみよう」

広いと言えるものと、言えないかもしくは不自然なものを分けてみた。

○国、公園、額、背中、机、画面、キャンバス、画板

×紙、生地、布、手

「なあ、思うに机は何かを行うところという意味において場所性を帯びているんじゃないか？」

「そうだね」

「じゃあ描画をするところという意味で、画面やキャンバスや画板も場所性を帯びているといえるんじゃないか」

「なら紙だって描画を行うところだから場所性を帯びているといえるんじゃない？」

「う……」確かに。「いや待てよ、画面やキャンバスは枠で区切られてる。背中は横腹などによって区切られ、額は頭や頬などによって区切られている。一方、紙や生地は画面やキャンバスにある枠のような区切りがない」

「限りある平面、言い換えれば有界な平面には『広い』という言葉が使える——と言いたいのかな？」

確認するような口調の綺夢。

「ああ。そしてその有界な平面の面積が基準より広い場合に、な」

僕の主張を綺夢は面白そうに頷いて聞いていた。

「ただ、その定義でも例外が出ないかどうかは分からないんだよなあ。

結局のところ、数学と違って単語の定義は例外がひとつも出ないようにするのは難しいということだな。

ふむ、ある意味言語学というのは数学より難しいものかもしれないな。なにせ扱う対象が言語というあやふやなものだから。数字のように定義がしっかりしていない」

「数字は定義がしっかりしてるの？」

学年首席がわざとらしく問う。

「1は最小の自然数だし、2は最小の素数だ。この定義に洩れはないし、例外もない。1を最小の自然数と定義したら3が最小の自然数として候補に上がるというような例外は起きない」

「そうだね」

「数学は言語学に比べて明確な定義ができる。でも言語学はそうじゃない。対象があやふやすぎて明確な定義ができない」

「うん」

綺夢は特に否定しなかった。

もう少しほかの辞典に当たってみたいところだ。僕は『広辞苑』の第六版に手を伸ばす。そこには第一義に「面積が大きい。場所のゆとりがある」、第二義に「広がって大きい。頻繁である」とあった。

場所とあるので、場所性については言及している。また、第二義を使えば背中や画面が広いこともどうにか言えそうだ。しかし広い紙がダメな理由は分からない。

「一番大きい広辞苑でも大して定義は変わらないんだな」

「日本語で一番大きいのは『日本国語大辞典』だよ」綺夢が訂正する。「百科事典みたいに分冊になってるの。そこにあるよ」

本当だ。広辞苑の何倍も量がある。僕はそれで「広い」を調べてみた。

第一義に「空間・面積が大きい。幅・奥行きが狭くない」とあった。場所性については言及していないし、「狭い」を使っているので若干循環定義を感じる。

その後には「広い」の用例が実際の文献からたくさん列挙されていた。OED(Oxford English Dictionary)みたいなもので、言葉の歴史に詳しい辞書なんだなと思った。大きいからといって必ず定義が細かいわけではないようだ。

なお、第二義は「豊かである。充実している」とあるので、中心的語義からは離れてしまっている。



『新明解』の第七版に当たると、「何かをするのに十分過ぎるほどの空間があると認められる状態だ」、「比較の状態とする状態に比べ、幅などが大きい様子だ」とある。これだと場所性に関しても言及できそうだし、画面や背中が広いという説明もできそうだ。

『明鏡』の第二版に当たると、「面積が大きい。特に、活用できる面積が大きい」、「仕切られた両端の幅が大きい」とあり、後者の用例には「画面が広い」や「額が広い」が載っていた。第二義については先ほど僕が挙げた定義に近い。この定義なら「広い紙」が言えないことを説明できそうだ。紙は画面や額と違って仕切られたものではないから。

次に講談社『カラー版日本語大辞典第二版』というのに当たってみた。そこには「面積・幅がその中のものや活動に必要な程度、また基準より大きく余裕がある」という定義があった。

これは一風変わった定義だった。ひとつの定義で場所性に関しても言えそうだし、画面や背中が広いと言えることも説明つきそうだ。でも「広い紙」が言えない理由についてはよく説明できそうにない。

「語学と言語学ってだいぶ異なるんだな。語学では『広い』の定義を考えたり、『走る』と『歩く』の違いを考えたりはしない」

「言語そのものの仕組みについて考察するのが言語学だからね」

「正直、言語学者っていうのは僕みたいに色々な言語をやっている人間のことだと思ってたよ」

「言語学者は必ずしも語学に精通してないよ。最悪母語しかできなくても言語学者になることはできる。まあその場合、どちらかというと国語学者だけど」

「ただ言語学者は言語を扱う関係上、一般的に言って比較的多くの言語を習得しがちですわね」乙女が付け加える。

「なるほどね。語学と言語学が似て非なるものってことはよく分かったよ。語学は learn するものだけど、言語学は study するものという印象だな。習得と研究の違いだ」

綺夢は不安げな表情になると、「やっぱり語学畑の人には面白くないかなあ……？」と言った。

「いや、正直面白いよ。今まで言語学のことをろくに知らずに語学ばかりやってきた。僕は常に言語と向き合っているような気でいたが、言語の仕組みそのものを見つめる言語学

の視座は持っていなかったから、実はきちんと言語と向き合っていなかったんだなということが分かった。正直、開眼的だ」

「よかった……」

ほっとする綺夢。

「ところで部活はどこに入ってらして？」

乙女の質問に、「帰宅部だよ。3年間ずっとそうだった」と返す。

「じゃあ——」と言う乙女の言葉を遮り、綺夢は「あ、今日はありがとうね」と言った。

「みゆちゃん……」乙女は声をひそめる。「でもこのままじゃ私たち……」

「いいの。こういうのは自分の意思の問題だから」

何かを話し合っているようだが、こちらには事情が飲み込めない。

「あのさ、折口さん……」

話しかけると、彼女にはこっとして「乙女でいいですね。そのほうが呼ばれ慣れておりますので」と返してきた。

「じゃあ……乙女……さん」

「『さん』も結構です」

まあどうせ脳内では呼び捨てにしているわけだし、そのほうがこちらにも都合か。

「……乙女」

だが少し照れがある。

「はいな」

機嫌良さそうに返事する。それを見ていると、そのうち呼び捨てにも慣れるだろうという気になった。

彼女は柔らかな笑みをたたえながら僕を見てくる。彼女も魅力的だなあと、ついドキドキしてしまう。おかげで訊こうとしていたことを忘れてしまった。

「まあいいや、じゃあそろそろ僕はこれで」

立ち上がると綺夢は気を使ったような笑みを浮かべ、「うん、本当にありがとうね。来てくれて嬉しかった」と言った。僕は鼻をかきながら部室を後にした。

廊下に出て階段を降り、昇降口へ向かう。ロッカーで靴を出すと、後ろから「よう、今帰りか」と声をかけられた。振り向くと丈士だった。

「ああ。お前も部活帰りか」

「まあな。それにしても帰宅部のお前さんがこんな時間までうろついてるなんて珍しいな」

「ちょっと言語学部とやらに行ってみただよ」

「言語学部……」小首を傾げる。「ああ、初月のやってるよくわからんアレか。思い出した、確かそんな名前だったな。そういや初月って言語学少女って呼ばれてたな」

「そうなのか？」

「ああ、確かそんなあだ名だった。え、てゆうか、お前入部すんの？」

「3年のこの時期からするわけないだろ。ちょっと気になる問題を出されたんで解いてきただけだ」

「男子に問題を出した？ ふうん、あの恥ずかしがり屋の初月がねえ」首をひねる。

「え、そうなのか？」

「あの容姿と性格の持ち主なのに、男関係の浮いた話は一切聞かん。高嶺の花っていうのも理由のひとつだが、単に恥ずかしがり屋で男と話すのが苦手っていうのもあるらしい」

ではなぜ僕とはふつうに話せたのだ。……ああそうか。僕と同じ理由だ。彼女も自分の興味のある話題になると口が回るタイプなのだろう。ふいになぜか綺夢のことが少し可愛く思えた。

「確か言語学部っていやあ、哲学乙女もいたよな」

顎をぼりぼりと搔く丈士。

「てつがくおとめ？」

「あ、いや、折口乙女っていう子なんだが、これまた初月と違ったタイプの美少女でな」

「ああその子ならさっき会ったよ。お嬢様って感じの子だった。で、哲学乙女ってのはなんなんだ」

「あの子、哲学専攻なんだよ」

高校生のくせに専攻があるのか。そういうのは大学に入ってからだとばかり思っていた。

「哲学じゃ彼女の右に出る者がないって話でさ。で、あの子、苗字が折口だろ。折口って縦に書くと哲学の『哲』って字になるじゃん？ だからあだ名が哲学乙女」

「なるほどね」

上手いことを言う奴がいるものだ。そういえばヴィトゲンシュタインがどうのこうのと  
言っていたな。

「彼女も有名なのか？」

「かなり。成績も優秀だし、あの上品な美しさも評判だ。ただ初月のことを妹のように可  
愛がってて、男たちには目もくれないらしい」

そういえばだいふ綺夢と親しげだったように思う。

「……にしても凄い雨だな」

昇降口から外を見つつ、丈士が呟く。

「え？」

さっきまで晴れていたのに、窓の向こうは強い雨が降っていた。梅雨はこれだから困る。

「降ってたんだな」

「だから俺もいつもより早く部活を上がってきたわけよ」

「丈士、傘はあるのか？」

僕はロッカーから紺色の折りたたみ傘を出した。

「大丈夫。お前と相合い傘になる不幸は背負わない」

憎まれ口を叩きながら丈士もロッカーから折りたたみ傘を出す。

「じゃあ俺行くわ。ダッシュしねえと電車間に合わねーから」

「あ、話し込んでしまって悪かったな」

「いいって、いいって」

丈士は愛想よく笑いながら雨の中を走っていった。ああいう爽やかな奴だから、女子に  
も人気があるのだろうかと思った。

僕は一息ついてから昇降口を出た。すると軒の下で女の子が一人呆然と雨を眺めていた。  
どうやら朝から晴れていたのを傘を持ってこなかったらしい。突然の大雨に身動きが取れ  
ないようだ。

茶色いショートカットの髪で、背丈はやや高い。綺夢や乙女に劣らぬ美少女だ。

僕は傘を開くと一歩外へ出たが、何となく後ろ髪を引かれる思いに駆られ、くるっと振  
り返った。そして彼女の前まで歩いていくと、「これ……」と言って傘を差し出した。

「え？」

女の子は驚いたような顔をした。

「傘ないんだろ。使いなよ」

「いっ、いいです、いいです。だって一本しかないんでしょう？」

慌てる女の子。

だからって知らない子に相合い傘を提案できるほど僕はナンパじゃない。

かといってこのままだと受け取りそうもない。こういうときコミュニケーション障害のある自分としては参ってしまう。素直に「ありがとうございます」と言って受け取ってくれればどんなに気が楽か。

押し問答になるのも嫌なので、僕は傘を開いたままタイルの上に置いた。

「いいから。このままだとこの傘、誰にも拾ってもらえないぞ」

丈士なら上手く女の子を言いくるめられるだろう。だが僕にはそんな器用なこととはできない。押し付けがましく文字通り傘を押し付けることしかできないのだ。

そして彼女の顔も見ずに僕は雨の中を走りだした。彼女は「あの！」と声をかけてきたが、振り向かずにそのまま走り抜けた。

その夜、僕は差し出がましいことをしたということと、よく考えれば自分の行為は善人ぶったウザいだけの迷惑だったのではないかという思いでいっぱいだった。

自己嫌悪に陥りまくった僕はベッドの中で枕を濡らした。

ああ、絶対ウザい奴とか、キモい奴とか、カッコつけてる奴とか思われたらうなあ。死にたい……。

翌日の放課後。

いつもの日常に帰った僕が昇降口に降りると、そこには昨日のショートカットの女の子がいた。

彼女は僕に気付くと、「あのっ！」と声をかけてきた。

「あ……どうも。お、お疲れ様です……」

気まずいところで上司に会ってしまったサラリーマンのような反応をしてしまった。なんで僕はまともに女の子と会話ができないのだろう。

女の子は僕に近付くと、「これ、ありがとうございます」と言って傘を差し出してきた。どうやらちゃんと使ってくれたようだ。

「ありがとう。わざわざ返さなくてもいいのに」

「いえ、そういうわけにはいきませんからっ」

ハキハキして元気の良い女の子だ。そして丁寧で感じが良い。

「僕の名前やクラスだって知らないのに……」ハツとする。「……もしかして、ずっとここで待ってた？」

「はいっ、待っていればいずれ会えると思ひまして」

「もし僕が部活とかやってて忙しかったら何時間も立ちっぱなしになるって思わなかったの？」

「そしたら何時間でも待つつもりでしたっ」

ずいぶん情熱的な子だな。スポーツでもやっているのだろうか。

脚をチラ見する。スカートを少し短めに穿いている。脚は細く長く綺麗だ。スポーツをやっているとされても理解できる。

「あの……何年の方ですか？」

「3年だけど」

「あたしは1年の佐藤こずえっていいいます」

こちらも自己紹介すると、「よろしく願ひします、先輩」と言われた。よろしくと言われても特に今後接点もなさそうだし、どう答えていいか分からない。

「ともあれ、わざわざ傘を返してもらって悪かったね。佐藤さんも帰り？」

「こずえって呼んでください、先輩。あたし、周りからそう呼ばれてるんです」  
何だかここ最近ファーストネームで呼ばれるよう求められる機会が多いが、いつから日本人はそんなにファーストネームを使うようになったのだろう。

「じゃあ……こずえちゃん……は、もう帰り？」

「いえっ、図書館に本を返しに」

ザザッと勢いよく本をカバンから取り出す。やはり元気な子だ。

そして図書館と聞いて自分も今日までの期限の本があったことを思い出した。

「いけね、僕も返さなきゃいけない本があったんだ」

「じゃあ先輩、一緒に行きましょう！」

くいつと袖を引っ張られる。ずいぶん積極的な子だな。

階段を上って図書館へ向かう。

「先輩は理系クラスなんですか」

「ああ。こずえちゃんは？」

「私もです。英語が苦手です」

数学ができないから文系に落ちる人間は多いが、英語ができなくて理系に避難してくる人間というのも実は多い。彼女もその一人のようだ。

「女の子で理系のほうが得意って珍しいね」

「そんなこと……」少し照れた様子。「先輩はどの科目が得意ですか」

「僕は英語かな」

「英語？ え、理系クラスですよ？」

「クラスは理系だけど、本当に好きなのは語学なんだよ。君と反対だね」

「あっ、いえっ！」彼女は急に慌てたようになった。「でもあたし、英語も頑張ってみようって思ったところだったんです！」

「ん？ あ、ああ、そうなんだ……？」

図書館に着いて本を返す。手続きを済ませる間、少し待っていた。

「先輩は語学が好きなんですね」

「ああ。でもここ数日別のことにも興味が湧いていてね」

「別のこと？」

「言語学……なんだけど」

なぜだか綺夢の顔がチラついて顔が緋くなる。

「語学と言語学って何か違うんですか？」

やっぱりふつうはそう思うよな。僕も綺夢に会うまではこうだった。

「僕は英語やらフランス語やら色々な言語を勉強してる。これは語学ね。一方、言語学は『走る』と『歩く』の違いを定義したり、『広い』の意味を定義したりして、言語そのものの性質や仕組みについて調べる——らしい」

「らしい？」

「いや、僕も受け売りなんだ」

「誰のです？」

「言語学部っていう部活があって、そこの人たちから習ったばかりなんだよ」

「へえ、そんな部活があるんですね！ 知りませんでしたっ」

「いや、実はこの隣の部屋なんだけどね」

「えええっ!？」

驚いた声を上げる。司書さんがチラとこちらを見ると、こずえちゃんは慌てて手で口を塞いだ。

「そんな近くにあるとは思ってもありませんでした。」

ん……？」

ふと何かを思い出したように、手をこまねく。

「あの……もしかして崩れた塔みたいなポスターが貼ってある部屋のことですか？」

「そうそう、それ」

「それなら見覚えがあります。あれ、部活動だったんですね……」

呆れたような感心したような声だった。

「こずえちゃんは部活は何を？」

「あたしは色んなところを仮入部してみたんですけど、まだどれがいいか分からなくて迷ってるんです」

「え、でももう6月だよ？」

見かけによらず優柔不断なところがあるようだ。

「そうなんですよ……。先輩は？」



「僕は万年帰宅部」

それを聞いたこずえちゃんはポンと手を打って、「そういえば私、言語学部には仮入部したことはありませんでした」と言った。

「まあ、超マイナーらしいし、部員も2人しかいないみたいだし、しょうがないんじゃないかな」

「先輩も帰宅部で暇なんですよ」

別に暇と言った覚えはないが。

「じゃあ一緒にその言語学部を見学してみませんか」

「いや、僕はもう行ったから」

「じゃああたしが見学するのに付き合ってもらえませんか」

「別にいいけど……なんで？ 英語は苦手だったんじゃないかな」

「えと……あの……。語学、もとい英語もできないといけないかなって思っていて。それには言語学って役に立ちそうだなって思ったんです。それに先輩もその言語学っていうのに興味を持っているんでしょ？」

「まあそうだけど」

結局こずえちゃんに押し切られる形で、僕は再び言語学部のドアをノックした。

「どうぞ」という声を待ってドアを開けると、中には綺夢と乙女がいた。

椅子はなぜか3つある。そして昨日僕が座っていた位置には誰も座っていなかった。綺夢も乙女も昨日と同じ席にいた。

乙女は僕を見てから綺夢に目をやり、「ね？」と言った。すると綺夢は急に顔を赤らめて下を向いた。

何が「ね？」なんだろう。女子の考えることはよく分からない。

「でも予想より一人多かったですわね」乙女はパイプ椅子をひとつ広げ、昨日僕が座っていた椅子の左手側に置いた。「おかけになって」

言われるままに僕は昨日の席に着く。こずえちゃんは僕の左手側に座った。これで四角いテーブルを囲む4つの椅子は満員になった。

「あの……あたし、1年の佐藤こずえって言います。言葉の勉強は正直苦手なんですけど、英語の成績もあげなきゃいけないし、色々あってやってみたいになって思ってきました」

ガバッと大きく一礼する。

続いて綺夢と乙女が自己紹介をする。

「じゃあこずえちゃんは言語学と語学については何も知らないんだね？」

「はい、むしろ苦手なほうです。こんな私でも付いていけるか不安なんですけど……」

「入部を希望しているの？」

「いえ……その……付いていけそうだったら入らせてもらいたいなっくらいで。かえって迷惑になるんじゃないかって不安なくらいで……」

3人もの上級生に囲まれ、カチコチになっているようだ。

「あ、でも言語学と語学の違いについてはさっき先輩から聞きました」

チラと僕を見てくる綺夢。僕は無言で頷いた。さっきの説明は受け売りだが、言われたとおりに伝えたので問題ないと思う。

「それで早速いくつか質問があるんですが、よろしいでしょうか」

「ふふふ、そんな固くならなくてもいいんですよ、こずえちゃん」

「はい。あの、言語学っていったい何なんですか。先輩から説明を受けてもまだよく分からなくて。語学と違うものだってことは分かったんですが」

綺夢はリスのように小さな体をちょこまかと動かして本棚から『ブリタニカ国際大百科事典』を取り出した。

「言語学とは事典曰く、『言語を科学的に研究する学問。複雑な言語現象のなかに共通にみられる社会習慣的特徴を分析的に研究し、究極的には言語現象そのものを解明することを目指している』」

「ええと……」

苦笑を浮かべるこずえちゃん。「日本語で説明してください」とでも言わんばかりの表情だ。

「要するに、人間の言葉を客観的に記述・説明する学問だよ。

例えば日本語にはいくつの母音がある？」

「あいうえお——の5個ですよ」

「うん。日本語の母音が5個だっていう説明は客観的なもので、この記述もまた言語学のひとつ」

「え、それだけで言語学したことになるんですか？」

「そうだよ。今みたいな単純な説明でも、十分言語学したことになる。

もつとも、言語学といっても下位の分野がたくさんあって、今のは音韻論という分野で扱われる内容なんだけど」

「ともあれ、人間の言葉を客観的に記述・説明するのが言語学なんですね」

「うん、基本的にはその理解でいいよ」綺夢は微笑んだ。

乙女がお茶を淹れてくれた。

「今日はピーチティーにしたんですの」

「昨日は緑茶だったな」

「ふだんはフレーバーティーのほうが多いんですよ。特にピーチティーはみゆちちゃんのお気に入りです」

ああ、だからこないだ綺夢から桃の香りがしたのか。

「ところで言語学の定義だが——」僕は本棚を指さした。「今は百科事典で確認したようだが、どうせならその『言語学大辞典』っていうのを使ったらどうだ？」

すると綺夢は立ち上がって六巻の術語編の「言語学」の項目を見せてくれた。ところがあまりに一項目が長すぎて、言語学とは何かと端的には書いていなかった。最初の「序言」ですら言語学とは何かの端的な定義を行なっていない。

「なるほど。詳しくすぎて、かえって端的に言語学とは何かを分からせるには不向きということか」

「でもこれは良い本だよ。日本における最大の言語学の辞典でもあるし」と綺夢は付け加えた。「ついでに言えば、本当はこれ、図書館の蔵書なんだ」

「いわゆる借りパクですわね」

乙女が顔に似合わない言葉を使って微笑む。

「だって一冊5万円もするんだもん。ウチの部費じゃ……」ごによごによ言う綺夢。

そんな高い本があるのか……。

「それはそうと、言語学には色んな分野があるんですね」こずえちゃんは紅茶をひとすすり。「そもそも言語学っていつ頃できたんですか？」

「伝統的言語研究についてお話ししましょうか。最古の言語研究としては、古代ギリシャの哲学者プラトンの対話集『クラテュロス』がありますわ。そのほかに、古代インドの文法家パーニニによるサンスクリットの記述があります」

「あ、プラトンっていうのは中学のとき先生の先生が言ってました。あと、確か高校に入って倫理の授業で聞いたような……。でもパーニニっていう人は知りません」

「パーニニが長い間西洋世界で知られなかったのに対し、プラトンはアリストテレス、ストア学派に受け継がれたので、知名度はプラトンらのほうが高いかもしれませんわね」

「プラトンやアリストテレスって言語学的に何をしたんですか？」

「品詞という概念が確立したのはこの頃ですわ。品詞というのは名詞や動詞などのことで、国語で習いましたね。

また、様々な文法用語が作られたのもこの頃です。西洋の伝統文法の基礎が作られた時代ですわ」

「それはギリシャ語の文法ですか」

「ええ。この頃はローマよりギリシャのほうが力がありましたから。

その後、このギリシャ文法を規範として作られたのがローマのラテン文法と、中世以降の各国の規範文法です。

私たちが習っている学校文法もこの規範文法から大きな影響を受けています」

「あの、折口先輩」

「乙女でいいですわ。先輩もいません」

「あ、わたしも綺夢で」

「じゃあ乙女さんと綺夢さん、非常に基礎的なことなんですわ、古代ギリシャってどれくらい前なんですわ」

乙女は呆れた様子も見せず、親切に答えた。

「プラトンは紀元前427年から紀元前347年に生きたとされています。今から2400年ほど前の方ですわ」

その言葉にこずえちゃんだけでなく僕まで目を丸くした。流石は哲学乙女。哲学者の生没年まで暗記しているのか。綺夢は彼女の芸当に慣れているのか、まったくした顔でピーチティーをすすっていた。

「2400年も前に最古の言語学の文献があったんですね……。それから言語学は日々着々と進歩してきたんですね」

「着々というよりは散発的な発展をしてきたといったほうがよさそうです。言語学にはいくつかの転換点があるんです。最大の転換点はスイスの言語学者フェルディナン＝ド＝ソシュールが作りました」

「ソシュール？」 オウム返しに問うこずえちゃん。

その名前は僕も初耳だった。

「彼は近代言語学の父と呼ばれ、多くの言語学者に影響を与えました。イェルムスレウ、ヤーコブソン、レヴィ＝ストロース、メルロ＝ポンティなどといったそうそうたるメンバーに」

「そのソシュールさんは何をしたんですか？」

「言語学を通時言語学と共時言語学に分けたのが大きな特徴です。それまでの言語学は比較言語学ばかりをしていたんです」

「比較言語学？ つまり英語と日本語はどっちが優れているとか、そういう比較ですか」  
「ううん、違うよ」 綺夢が口を挟む。「言語学はどの言語がどの言語より優れているとかいったことは言わないの。まあ、昔は言ってただけだね。いずれにせよ、現代言語学ではそういう差別的な発言はしないことになってるの」

「じゃあ何を比較するんですか」

「言語同士を比べることで、それらの親縁関係や同系性を調べるんだよ」

「??」

「簡単にいえば、フランス語とスペイン語を比べて、これらが親戚かどうか調べましょーってような学問。こずえちゃんはフランス語とスペイン語はどういう関係にあると思う？」

「え……。あの、あたし、英語ですらサツパリなので……」

「じゃあ貴方は？」

矛先が僕に回ってきたが、ここは語学屋の得意分野だ。

「フランス語とスペイン語はいわば兄弟さ。同じラテン語という親から生まれてる」

「そう。そういう親子関係とか兄弟関係を調べるのが比較言語学。決して言語同士の優劣を比べる学問じゃないの」

「言語同士の親戚関係を調べてどうするんですか？」

「言語の親戚関係を調べていけば、親の親の親といった風に言語の家系図を得ることができよね？」

「人間の家系図と同じですね」

「そう。で、できるだけ遡った言語のことを祖語というの。英語もドイツ語もフランス語もスペイン語も印欧語族というグループに分類されるんだけど、そういうグループが存在するのを発見したのも比較言語学の成果だよ」

「いんおうごぞく？」

「インド＝ヨーロッパ語族とも言うよ。インドの印とヨーロッパの欧からできた術語」

「ああ」一瞬納得したような顔になったが、すぐ首を傾げる。「インドからヨーロッパつてだいたい広いですよ。なのにひとつの同じ語族というグループに入るんですか？」

ここは僕の出番だ。

「こずえちゃん、サンスクリットってどこの言葉か知ってる？」

「インドですよ。……。仏教と一緒に日本に入ってきたっていう」

「そう、インドだね。ちなみにサンスクリットは梵語とも呼ばれる。実はサンスクリットも英語と同じ家族の一員なんだ」

「え、インドとイギリスですか？ だいたい離れているようにも思えますが……」

「ああ、だからこそ長い間両者が同じ家族だと気付かれなかったんだ」

「そうなんですか……サンスクリットと英語は元を正せばひとつの言葉だったんですね。そしてこれらは印欧語族という同じ家族に分類されるんですね」

「こずえちゃんは今良いことを言ったね」綺夢が手を合わせる。「元を正せばひとつの言葉。そう、じゃあ英語やサンスクリットの元を辿っていくと、何語になると思う？」

「えっと……」

「それを印欧祖語というの。インド＝ヨーロッパ祖語ともいうよ。

印欧祖語は文献上には残ってなくて、比較言語学が推論した理論上の言語なの」

「その言語はいつ頃どこで話されていたんですか」

「諸説あるんだけど、クルガン仮説によればおよそ 6000 年前にロシア南部で、アナトリア説によればおよそ 9000 年前にアナトリア高原で話されていたとされているよ」

「そんな昔っ！ プラトンでさえ2400年も前なのに……」

「印欧祖語は文字を持たなかったの。だから文献を使って遡れないのよね。印欧祖語は現存する娘言語をもとに『おそらくこういう仕組みの言語だったのだろう』という風に再建されたものにすぎないの」

「娘言語……ですか？」

矢継ぎ早の質問に綺夢は少しも嫌がる様子がなく、むしろ嬉しそうに本棚に向かっていった。手に持ってきたのは『オックスフォード言語学辞典』。その「娘」の項を読み上げる。

「先代の単一の言語から別々に発達した後代の言語についていう。例えばフランス語やスペイン語は、ラテン語との関係において『娘言語(daughter language)』である。『祖言語』とは反対」

「フランス語とスペイン語がラテン語の娘なら、フランス語とスペイン語は姉妹ということになりますね」

再確認するように問うた。

「そうだね」

「ええと、つまり比較言語学は言語同士の親族関係を調べたり、共通の祖語を見つけたりする学問なんですね。

でも、いったいどうやって言語間の親族関係を確認するんですか？」

「例えば音韻対応という方法があるよ」

「おん……いん？」

「あ、ごめん。最初から説明するね。

印欧祖語から分化した言語はいくつもあるんだけど、その中のひとつにゲルマン祖語っていうのがあるの。ゲルマン語派に分類される英語やドイツ語やオランダ語はこのゲルマン祖語の子孫なの。これらの言語は互いに姉妹言語(sister language)というよ。

ねえ、ところで英語とドイツ語とオランダ語で、『2』、『12』、『20』、『枝』、『舌』ってなんていうか知ってる？」

ふいに僕に水を向けてきたので、ルーズリーフを出してサラサラと書いてみせた。

英語	ドイツ語	オランダ語
two	zwei	twee
twelve	zwölf	twaalf
twenty	zwanzig	twintig
twig	Zweig	twijg
tongue	Zunge	tong

綺夢はそれを見ると満足気に「流石だね」と言った。こずえちゃんは「すごい……」と言って表と僕を交互に見つめた。

やがて彼女は表に見入ると、「姉妹言語というだけあって、恐ろしく似ていますね」と率直な感想を述べた。

「これを見れば、ある言語がこれら3つの言語に分化したということが考えられるよね。更にドイツ語に注目すれば、語頭のtがzに変化している。このように規則的に音が現れることを音韻対応というの」

「語頭のtが規則的にzに。これが音韻対応……」

「同じ祖語から出た姉妹言語の間には何らかの音韻対応があるの」

「——ということは」閃いたようなこずえちゃん。「逆に言えば、音韻対応がある言語同士は親族関係にあるといえる、ということですね？」

「明察！」手をパンと打つ。「音韻対応は同系を確定するための強力な決め手だよ。ほかに文法などにも類似性が認められれば、よりいっそう同系だということは確実になるの」

「そうやって比較言語学は言語間の親族関係を確認するんですね。比較言語学を用いれば英語とドイツ語はおろか、英語とサンスクリットの関係まで調べることができる。なんだか凄いです。壮大です！」

ひとしきり感心したこずえちゃんはふと我に返ると、左手の指を唇に当てて「うーん」と考えこんだ。

「それにしてもよくサンスクリットみたいな遠くの言葉が英語とかと同じ家族だって気がきましたね」

「最初に気付いたのは……」乙女に目をやる綺夢。



「イギリスの言語学者ウィリアム＝ジョーンズですわ。彼はインドで裁判官として働いていました。1786年に『On the Hindu's』で、サンスクリット語が古典ギリシャ語やラテン語と共通の起源を持つ可能性について言及しましたの。この気付きが比較言語学を生み出した」

「っていうと、今から200年以上前ですね。プラトンたちが2400年も前に伝統文法の基礎を築いたのに、そこから比較言語学が生まれるまで2200年間もかかったんですか！」

こずえちゃんは相当驚いたようだ。

「ウィリアム＝ジョーンズの比較言語学は言語学の転換点のひとつと言えますわ」

乙女の発言に僕は黙って頷いた。

「サンスクリットと英語が印欧語族に入るなら、日本語はどこの語族に入るんでしょう？」

右頬に人差し指を当てるこずえちゃん。そういえば日本語の起源なんて考えたこともなかったな。綺夢をチラ見する。

「日本語や韓国語は言語学的には系統不明なの。諸説あるけどどれも決定的でなく、これからも系統不明のままだろうね。ただ科学が進歩すれば、言語学以外の視点から日本語の起源が明らかになる可能性はあるよ」

「今のところどんな説があるんですか？」

「アルタイ語族の一員だという説。韓国語と同系だという説。オーストロネシア語族の一員だという説。ドラヴィダ語族のタミル語と関連があるという説などかな」

「綺夢さんはどの説を支持してるんですか？」

「わたしは日本語はアルタイ語族とオーストロネシア語族などが混合したものだと思うけど、確証はないね」

「そうなんですか……」こずえちゃんはがっかりしたようだった。「比較言語学が発展しても、あたしたちの言葉がどこから来たのかさえ分からないんですね」

確かにかつて凄まじい経済発展を遂げた大国の言語がどこから来たのかさえ分からないというのは不思議な話だった。

「ところで、どうして比較言語学の話になったんですか？」

「言語学における最大の転換点であるソシユールに話を戻しますわね」

「ああ、そうでした。ソシュール。彼が現れるまで、言語学は比較言語学ばかりをやっていたんですからね」

「ええ。ジョーンズ卿の登場からしばらくの間、言語学の主な関心は言語と言語の親族関係や共通の祖語の再建にありました。

ソシュールは1857年の生まれで、ちょうど比較言語学が隆盛していた頃の人でしたから、当然のごとく彼も比較言語学を取り扱っていました。

彼は1878年に『印欧語族における母音の原始的体系に関する覚え書き』を発表しました。ヨーロッパの色々な言葉を観察し、印欧祖語の母音がどのような体系をしていたのかを推測しようとしたのですわ」

「彼も時代のパラダイムに飲まれていたんですね」

こずえちゃんがパラダイムという言葉を知っていたことに乙女は少し驚いたようだった。

「パラダイムというのは哲学者クーンによって提唱された概念ですが、こずえちゃんほどのような意味で使ってらっしゃるの？」

「え……時代の潮流……的な」言葉が尻すぼみになる。

「日常生活ではそのような意味で使われることが多いですね。実際クーンが提唱した概念とは異なるのですけど。まあいいでしょう。パラダイムという言葉をそういう意味で使うとするなら、ええ、ソシュールもまた時代のパラダイムに飲まれていました」

「だけど彼は言語学を通時言語学と共時言語学に分け、従来の比較言語学を前者に押し込めたのです」

「オックスフォード言語学辞典の通時によれば……」綺夢が付け加えてきた。「『言語の通時的説明は、その歴史を扱い、通時的理論は、歴史的変化一般の性質を扱う』——とあるね。

共時はその反対。『現在あるいは過去のある特定のときの、構造の説明であり、その歴史からは分離して考えられる』——とあるよ」

要するに通時は歴史的な見方をして、共時はある特定の時点における見方をするということだろう。

例えば日本語が奈良時代から現在に至るまでどのような変化をしてきたのかを考えるのが通時的な見方で、ある特定の時代の日本語について考察するのが共時的な見方ということだ。

「あの、それで、言語学を通時言語学と共時言語学に分けたことの何が転換点なんですか……？」

もっともな質問だった。

「それまで言語学はずっと比較言語学をしていました。つまり通時言語学——歴史言語学——ばかりをしていたわけですね。そうやって歴史的推移を問題にするのもいいけれど、そればかりが言語学じゃないって彼は言ったんですね。

ある時点における言語の内的な構造をも対象にすることで、全般的に言語を理解することになるとソシュールは考えたんです。つまり通時言語学という潮流からの脱却をするとともに、共時言語学という無視されてきた分野に光を当てたのです」

となると、「走る」と「歩く」の違いや、「広い」の意味の分析などは共時言語学ということになるな。なるほど、ああいう議論はソシュールが共時言語学を提唱したからこそできたものなのか。

考えてみれば、言語と言語の親族関係やもう既に存在しない祖語の再建ばかりやっても、ちっとも今現在自分たちが使っている言語と向き合っていることにならないものな。今自分たちが使っている言語がどんな仕組みになっているのかを調べるのが共時言語学なのだ。

ソシュールはそこに光を当てた。通時だけでなく共時もやることで、言語に関する全般的な理解が得られると説いたわけか。確かにそう考えれば大きな転換点といえるだろう。今現在の自分たちについて知ろうという機運を高めたわけだから。

あ、今現在の自分たちと限定するのはまずいか。共時言語学は過去のある時点について調べてもいいわけだから。

ともあれ自己を知るきっかけを作ったという意味では、人間性の回復をしたルネッサンスに近いものを感じる。そうか、ある意味でソシュールがもたらした転換点とは言語学のルネッサンス、すなわち再生・新生だったのか。

こずえちゃんは不思議そうな顔をした。

「言語学を通時言語学と共時言語学に分類しただけで言語学最大の転換点とまで言うのはなんだか褒め過ぎな気がします」

慌てて綺夢がフォローに入る。

「もちろんソシュールが評価を受けているのはそれだけが理由じゃないよ。ラングやパロールといった概念の提案や、シーニュ（記号）をシニフィアンとシニフィエに分けたことなども大きく評価されているの」

「ラング……シニフィアン……??」

「うん、ごめんごめん。今そんなこと言っても混乱させちゃうだけだよ。だからソシュールについては今はとりあえず言語学を通時言語学と共時言語学に分類した人っていう理解でいいよ」

「まとめると、印欧祖語が存在したのが9000年前か6000年前。諸説あるけど大昔。プラトンやアリストテレスらが伝統文法の基礎を作ったのが2400年前で、だいぶ昔。だけどウィリアム＝ジョーンズが比較言語学を作ったのが1786年で、ちょっと前。そしてソシュールが言語学を通時と共時に分けたのが1900年頃で、ついこないだ。それから今に至るまで、たった100数十年しか経っていないんですね」

「そう」綺夢のピーチティーはすっかり空になっていた。

「2400年も前に伝統文法の基礎ができていたのに、言語学の転換点があったのが1786年と1900年頃で、わずか100～200年前のこと。言語学の進歩は一次関数的な均一な変化ではなかったということですね」

こずえちゃんのまとめは理系らしい表現で、僕には分かりやすかった。首席の綺夢も容易に理解したようだ。

確かに話を聞き限り、言語学の進歩は二次関数的、いや、指数関数的に見える。20世紀のIT業界の発展に通ずるものがあるな。

そのとき、コンコンとドアがノックされた。

「はい」と言って綺夢が立ち上がると、一人の少女が入ってきた。肩くらいの長さの髪で、メガネをかけている。真面目そうでちやきちやきした女の子という印象だ。

「蛍ちゃん……」

綺夢はちょっと困ったような顔になった。

僕は乙女に近付くと、小声で「誰?」と訊いた。すると乙女は耳元で「村上蛍さん。3年で、生徒会の会計をやっています。図書委員でもあります」と答えた。

蛍は綺夢を上から見下ろすと、淡々とした声で告げた。

「綺夢さん、金田一春彦の『日本語』上下巻、図書館のものと言語学部のものが間違っ  
て書架に入っていましたよ。交換しにきました」

「あ、そうなんだ。わざわざごめんね」

綺夢は『日本語』を取り出すと、蛍に渡そうとする。蛍は「もう、困るんですよ、こ  
ういうの」と言いながらずっと手を伸ばす。ところが渡そうとした瞬間、綺夢は小さく  
口を開け、「あのこれ、2冊ずつあるからこずえちゃんたちに貸してあげてもいいかな?」  
と訊いた。

蛍は僕とこずえちゃんをチラッと見ると、「いいですけど、ちゃんとカードで貸し出し  
の手続きをしてくださいね」と言った。

僕たちはぞろぞろと隣の図書館に行き、貸し出しの手続きをした。

「なあ綺夢。この本、そんなにオススメなのか?」

「わたしが最初に読んだ言語学の本なの。正確には国語学だけど。わたし、これを読んで  
言語学に興味を持ったんだよ。特に上巻がオススメ」

「そっか。じゃあ読んでみるよ。基本的な知識も身につくそうだしな」

「私も頑張って読みますね、先輩!」

張り切る僕らをよそに、蛍はため息混じりに綺夢に告げた。

「まあこれでどうにか4人集められたようで、良かったですね」

——なんの話だ?

綺夢は慌てて「ううん、違うよ。彼らは部員じゃないの。お客さん」と言った。

「客? そんな呑気なことを言っていていいんですか」メガネをチャッとかけ直す。「言  
ったはずですよ。言語学部はたった2人しか部員がいない。そんな集団を部活動として  
認め、教室を貸与し、部費を割くわけにはいかないと」

「……はい」しゅんとする綺夢。

「生徒会会計として緊縮財政を行なっている今、1学期が終わるまでに部員4名という最  
低基準を満たさなければ、言語学部は部活として認めません。即刻廃部になります」

「はい……分かってます」

えっ、どういうことだ！？ そんな話、綺夢は一言もしていなかったぞ。  
「分かっているならせっかくやってきた獲物をなぜ引き込まないのか、私には理解しかねますね」

「獲物なんて、そんな言い方……」

綺夢は終始うなだれたままだった。

すすご部室に戻ると、僕はまた席に着いた。

「綺夢さん、言語学部が廃部ってどういうことですか」

「えへへ……あんまり人気がないものだから、生徒会としてはお荷物に感じてみたいだね。もともとわたしが好きで始めた部活だったんだけど、部員が全然集まらなかったの」といふか勧誘活動を全然してこなかったのが問題じゃないのか。ああ、綺夢は言語学以外では内向的な子だから、ガツガツ食らいについて人材を確保するような活動ができなかったのか。

乙女もどちらかというとお嬢様タイプだから、人を引っ張ってくるようなキャラじゃない。それに乙女は綺夢がお気に入りだから、2人きりでも構わなかったのだろう。

「なあ、それならなぜ僕たちを勧誘しなかったんだ？」

「だって……言語学部なんてマイナーだし、数学と同じで言語学ができたからといって将来お金持ちになれるわけでもないし。誘ったら迷惑かなって思って……。それに受験のこともあるし……」

「別に迷惑とか思わないけどさ……」

ようやく理解した。昨日乙女が綺夢に言い出そうとしていたのは、僕を勧誘したらどうかということだったのか。だが綺夢はあくまで僕が自分の意思で入ろうと言わない限りは勧誘しない方針だったようだ。

「わたしはただ貴方と言語学の話をするのが楽しかっただけなの。部員集めのことは正直忘れてた」

「——とにかく、夏までに部員を4名集めれば、とりあえず廃部は免れるんだな」

「そしたらわたしたちが卒業しても来年部員が0人にならないかぎり、当面の間は存続していいって、螢ちゃんが言った」

「そうか。じゃあ僕は仮入部をしよう」

「仮入部……？」

「ああ。ちょうど言語学にも興味が湧いてきたところだ。夏まで仮入部という形でここに出入りさせてもらう。それで最終的に部員になるか決める。もちろんその間に僕以外の部員を確保できればそれに越したことはないが」

「あのっ こずえちゃんが『日本語』をぎゅっと握って話します。「あたしもそうさせてもらっていいでしょうか。先輩と一緒に夏までこの部活に仮入部させていただきたいと思います」

「それは……嬉しいけど、本当にいいの……？」

正直僕は自分の行動が不可解だった。なぜ自分はこんな申し出をしたのか。本当にそこまで言語学に興味を持ったのか。単に綺夢の境遇に同情したのか。あるいは綺夢と一緒にいるのが……。

ふいに耳が熱くなる。僕は思わず首を小刻みに振った。

ともあれ、こうして僕とこずえちゃんは言語学部に仮入部することになった。

<ソシユール・バベルの塔>

「ソシユールの続きを話そうか」

綺夢が口を開いた。

翌日の放課後。僕ら4人は言語学部の机を囲んでいた。

「言語学を通時言語学と共時言語学に分けた人ですよ？」

こずえちゃんか確認する。

「うん。ソシユールはほかにもラングやパロールといった概念を導入したことで有名なもの。

ラングというのは人々に共通する慣習としての言語体系のように、制度化され抽象化されたもの。簡単にいえば、言語の知識みたいなものだよ」

「じゃあ、あたしたちの頭の中には日本語のラングが入っているんですか」

「そう。一方パロールはラングを基盤とし、それを具体化した言語活動のこと。要するにお喋りのことだね」

「頭の中にある言語の知識がラングで、それを実際に使ったものがパロールなんです」

「簡単にいえばそうだね。

パロールは実際の発話のことだから、言い間違いも含むし、中断なんかも含む。だから体系化するのが難しい。

一方ラングはそんなことないから、体系化しやすい。つまり学問の研究対象として安定していて扱いやすい。

言語学は基本的にラングを研究するものなの」

「あと何かありませんでしたっけ。シーニュとかなんとか……」

「シーニュは記号のことだよ。例えば信号機の赤は『止まれ』を意味する記号だよ。

ソシユールは言語も記号体系のひとつと考えたの」

「とても大きな記号体系ですね」

「記号シーニュはシニフィアンとシニフィエからできてるの。例えば木という物質があるよね。日本語ではこの物質を何という記号、つまり単語で表す？」

「『木』です」



「一方、同じ物質を英語では tree というよね。記号で表されるほうをシニフィエというの。木という物質がここではシニフィエだね」

「じゃあ記号で表すほうがシニフィアンですか。つまり『木』や tree といった単語が」

「そう。tree という音や文字がシニフィアンで、木という物質や概念がシニフィエ。そしてその2つの対をシーニュ（記号）という」

「シーニュ、シニフィアン、シニフィエ……。名前が似すぎていて訳が分かりません」

「語源から考えたらどうかね」

僕が口を挟む。

「これらはどれもフランス語なんだよ。シーニュ(signe)は英語のサイン(sign)に当たるもので、記号のこと。

一方シニフィアンとシニフィエはどちらも signifier（意味する）という動詞から来ている。この動詞の語源も signe——正確にはラテン語の signum (signe)と facio (faire)から——だから、シーニュとシニフィアンとシニフィエはどれも似て聞こえて当然なんだ。

シニフィアン(signifiant)は現在分詞で『意味しているもの』『表しているもの』を指し、シニフィエ(signifié)は過去分詞で『意味されているもの』『表されているもの』を指す」

「同じ動詞を現在分詞と過去分詞に分けて、別々の意味を持った別々の術語に分けてしまったんですね。日本語には分詞がないから、こういう命名をされると戸惑いますね」

「そうかもしれないね。ただ僕はこういう術語を見るたび、英仏には分詞があって便利だなと感じるよ」

もっとも、そう感じる僕みたいな語学屋のほうがふつうではないのだろうな。

「ここで大事なのは、言語の恣意性」綺夢が仕切りなおす。

「しいせい……ですか？」

「恣意的とは必然性がないこと。

例えば猫という動物を日本語では『ねこ』と呼ぶけど、英語では cat と呼ぶよね。猫という動物は絶対に『ねこ』と呼ばなければいけないってわけじゃない。cat と呼んだって一向にかまわない。

ある概念をどう名付けるかは自由で、決まった呼び方をしなければならぬ決まりはない。これが言語の恣意性」

「なるほど。……でも、それがあから面倒なんですよ」こずえちゃんは頭を抱える。  
「言語に恣意性がなければ、どの言語でも同じ概念を同じ単語で呼ぶことになる。そして  
らあたしたちはわざわざ外国語の勉強なんかしなくてもいいじゃないですか。ああ、恣意  
性なんて面倒くさい。概念に元々名前が決まれば便利なのに」

そうしたら語学なんてものはこの世から消えるな。言語間の違いなどせいぜい文法的な  
差異しか生まれなくなる。語学好きの僕にとっては、そんな世の中は少しも面白くない。  
「例えば貴女の両親は貴女を『こずえ』と名付けたけど、別に貴女は本質的に『こずえ』  
という名を付けられるべくして生まれてきたわけじゃない。『ゆき』という名前だった可  
可能性もある。このように固有名詞には恣意性があるけど、それと同じくあらゆる概念にも  
恣意性があるの」

すると、こずえちゃんは「なるほど」と頷いた。

「ところで言語は記号体系の一種なんですよ。ケータイの絵文字集なんかも記号体系で  
すよね」

「うん。家紋なんかも記号体系だし、校章や国旗も記号体系だね。たとえば白地に赤丸と  
いう国旗があれば、それは日本という国を表す。

同様に、『ねこ』というシニフィアンがあれば、四足でもこもこして犬とは違う可愛い  
生き物というシニフィエがある。言語も記号体系で、記号体系の中で言語は最も複雑だと  
いえるね」

「言語とその他の記号体系は何か違うんでしょうか」

「一番の違いは線条性や二重分節性かな」

綺夢は一息入れた。

「まずは線条性。言語は音声を用いるでしょ。人間は同時に2つの音を出せないから、喋  
り言葉はどうしても連続した音の集まりになる。これを線条性というの」

「書き言葉もふつうは横か縦に1文字ずつ書くから、線条性がありますね」

「次に二重分節。外国語を聞いたとき、どこからどこまでがひとまとまりか分からないこ  
とってない？」

「あります、あります。英語なんかどこで区切れてるのか分からなくて」

困った顔のこずえちゃん。リスニングのテストなんかは必死なんだろうなあ。

「外国人にとって、『korewanekodesu（これはねこです）』という文は未分化な連続した音に聞こえる。だけど『arewainudesu（あれはいぬです）』などと比べることで、前者の音声がかoreやnekoなどといった単語の集まりに分節されることが分かるよね」

「はい、文は単語の集まりに分節できますね」

「……まあ本当は単語じゃなくて形態素なんだけど」ぼそっと呟く綺夢。

「え？」

「ううん、なんでもない。で、koreやnekoといった単語は更にk,o,r,eやn,e,k,oという音の単位に分節することができる」

「あ、二重に分節してますね」ピンと来たようだ。「だから二重分節っていうんですか」

「そう、まず第一次分節で語に分節し、第二分節で音に分節する。これが二重分節」

「で、線条性と二重分節が言語という記号体系の特色なんですね」

「こずえちゃんは飲み込みがいいですね」

グレープフルーツティーを淹れながら乙女が上機嫌に言う。

「あ、いえ。そんなこと……」

「ところで言語学って人間が使う言語について研究する学問ですよ」

「主にはね。ただ、動物の言語というものもあるにはあるよ。

よく知られているのはミツバチのダンス。踊り方でエサの方角や距離を仲間に伝えるの」  
綺夢の説明に僕は首を傾げた。

「なあ、それは伝達手段であって、言語ではないだろう。ただの本能だし、叙述的でもない。何より二重分節みたいな特徴がないじゃないか」

「そうだね。だから動物の言語というのはあくまで比喩的な表現でしかなく、人間の言葉とは異なるものなの」

「言語を操るのは人間の特権だな」

僕は偉そうに言った。ニンゲン様が偉くとも、僕が偉いわけではないのに。

グレープフルーツティーを一口飲むと、乙女がふと気付いたように口を開いた。

「そういえば皆さんはお昼はどうされているんですか。私とみゆちゃんはお弁当ですけど」

「僕は学食だよ」

「あたしはお弁当です。綺夢さんたちって自分でお弁当作ってるんですか？」

「え？ うん、わたしは自分で。あ、でも乙女はお手伝いさんがいるから」

うわ、来たよ、メイド！ やはり乙女は見た目通りのお嬢様か。

「お手伝いさんがいるんですか！ 凄いですね」目を丸くするこずえちゃん。

乙女は「そんな」と言って気恥ずかしそうにしていた。

「あたしは普段お母さんに作ってもらってます。綺夢さん、偉いなあ」

「へたっぴだけだね」

「謙遜しないでくださいよ」

綺夢の手料理か……。気になるな。

「ところで先輩、学食って美味しいんですか？」

「行ったことない？ 味はそこそただけど安いよ。場所も広いし、ゆったりできる」

「じゃあ明日のお昼は皆で学食で食べませんか？」

「いいよ。じゃあ昼休みに学食に集合な。明日は何を話してくれるんだ？」

「えっと、明日は音韻論と音声学について話したいと思います」

ニコツとして綺夢が答えた。難しそうな言葉だが、綺夢の口の乗ると何でも可愛く聞こえてしまうから不思議だ。

僕たちは明日の約束をすると、こぞって部室を出た。

綺夢が部室に鍵をかけたところで、こずえちゃんが「あっ」と声を上げる。

「どうしたの？」

「いえ、このポスターなんですけど、ずっと気になってて」

「ああ……」というと、綺夢はまた鍵を開けて中に入った。そして本棚から一冊の本を持って出てきた。「これのこと？」

手にしていたのはジョージ＝ユール『現代言語学 20 章』という本だった。表紙に同じ崩れた塔の絵が描いてある。

「あ、これです、これ。なんなんです、この絵画？」

「これはバベルの塔だよ。神話だから乙女のほうが詳しいかな。——乙女」

「はいな。バベルの塔というのは、旧約聖書の『創世記』に登場する大きな塔のことです。

神話の中では、人類は元々ひとつの同じ言葉を話していたとされています。あるとき人々は、天にも届く塔を作ろうとしました。ところが神様はこの塔が完成してほしくないと考えたんですね。そこで建設作業が上手くいかなくなるよう、たったひとつしかなかつ

た言語をバラバラにしてしまったのです。おかげで人々は意思疎通が取れなくなり、バベルの塔の建設は失敗に終わりました」

「人類が天にも届く塔を作って神に挑戦しようとしたので、神様は塔を崩したんですね」  
「——という解釈が一般的になされていますわね。もっとも、『創世記』の中で明確に神様が塔を崩したという記述はありませんけれど」

「つまり」僕は果然とこの絵を見た。「崩壊したバベルの塔が象徴するのは、人間の言語の多様性か……」

「明察！」パンと手を打つ綺夢。「もし神話の内容が本当で、しかもバベルの塔が崩れないまま人類がひとつの言語しか話さなかったら、語学は確実になかったし、もしかしたら言語学もなかったかもしれない」

「だろうな。自己というのは他者との比較で分析できるものだ。世の中に言語がひとつしかないれば言語そのものの仕組みを解明しようなどと思う動機がない」

「それでバベルの塔は言語学部の象徴として貼ってあるんだよ」

「なるほど！」こずえちゃんは積年の疑問が氷解したかのように頷いた。「じゃああたしたちは言語学部でバベってたんですねっ！」

「バベる？」一同が一斉にこずえちゃんを見る。

「はい！ あたしたちって言語学や語学の話ばかりしてるじゃないですか。『言語学する』とか『語学する』って言いにくいし長いから、言語学や語学に関してあれこれ話すことを『バベる』と呼んでみましたっ」

「あはは」綺夢が口元を手で押さえて笑う。「それイイね。バベるか。『だべる』に音も近いし、良いんじゃない？ わたしたち、いつも言語学と語学についてだべっているもんね」

こずえちゃんは面白いことを考えるなあ。流石最近の女子高生。——などと最近の男子高生が思ってみた。

「じゃあ明日もバベろうね！」と言って綺夢は去っていった。

<音韻論・音声学>

「今日は音韻論と音声学でしたっけ」

昼休みの学食。僕ら4人は円卓に座ってランチを食べていた。僕は焼肉丼を、綺夢はそばを、乙女はサンドイッチを、こずえちゃんはおにぎりセットを頼んだ。

ウチの学食は食券制で、食券を買ってカウンターのおばちゃんに渡すとその場でよそつてくれるというシステムだ。飲み物は水か自販機の飲み物。綺夢はお茶を飲んでいて。僕はコーラだ。

「そう、音韻論と音声学」

こずえちゃんの確認を肯う綺夢。

「なんだかどっちも似てますよね。語学と言語学以上に区別が付きにくいです」

「それにはまず音素と音声の違いを知る必要があるね」

とそのとき、学食の外を白い猫が通った。窓の向こうで猫は止まると、毛づくろいを始めた。

「あつ、猫だ。かわいいー！」綺夢が突然はしゃぎだす。興奮しているといってもいい。

「猫、好きなのか？」

「大好きっ！ わたしの来世、猫でもいい！」

じゃあ前世が猫だった可能性も考えないとな。

「飼ってるのか？」

「うん、3匹いるよ。サピアとウォーフと……あと、池上！」

思わず米を吹き出した。

「なんだよ、『池上』って！」

「え、言語学者の池上嘉彦からだけど？」

「なんで猫の名前が苗字なんだよっ!？」

綺夢は一瞬考えて、「サピアとウォーフも苗字だけど？」と言った。

あ、言われてみれば……。ええい、外人の名前は何か苗字で何が名前か分からないからどうでもいいのだ。

「ヘンな名前」

「ええ～、池上、かわいいよお……？」

ぐずる綺夢。親指同士をこちよこちよと擦り合わせて所在なさげだ。

「知るか」

「みゆ〜……」

「自分のことは名前で呼ばせるくせに、サビアや池上は苗字かよ」

「だって論文読んでると、参考文献の紹介が『池上(1981)』みたいに書いてあるんだもん。

下の名前なんか論文じゃ使わないからね」

「『池上(1981)』ってどういう意味だ？ 論文名になってないじゃないか」

「こういう場合は巻末か章末に参考文献が上がってるよ。そこを見ると『池上嘉彦(1981)

『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店』みたいに参考文献の名前がちやんと書いてあるんだよ。

でも毎回こうやって引用するたび本文の中で書名や出版社名を出すのは面倒でしょう？ だから本文中では『池上(1981)』みたいに略記するんだよ」

「ふうん」

猫は毛づくろいに忙しい。色んな体勢を見せてくれる。

「さて、昨日『猫』という語を n, e, k, o という音に分割できるという話はしたよね」

「はい、言語の二重分節ですね」

「ここで得られた n, e, k, o という音を更に細かくすることはできる？」

「……できません。『ね』だったら n と e に分割できますが、n や e のような子音や母音をこれ以上細かくすることはできないと思います」

「ということは n や e はその言語における最小の音の単位だよね。その最小の単位のことを音素(phoneme)というの」

「その言語における……ですか？ じゃあ音素の内容は言語によって異なるんですか」

「そう。例えば日本語にはサ行とザ行の区別があるから、s と z の音素は日本語に存在するといえるよね。

でも英語の thank you や think に見られる th の音は日本語にない。th の音は日本語の音素じゃない」

「日本語に音素がない場合、どうやってその音を表すんですか」

「日本人が似ていると思う音を無理やり当てはめるの。thank you はサンキューと音訳されるから、th はサ行すなわち s という音素で捉えられているということが分かるね」

「え、でもそれって s と th を区別したいときに困りませんか」

「だよな。だからどんな言語であろうと関係なく、人が発声器官を通じて発する音そのものを表現したい場合が出てくる。人が発声器官を通じて発する音そのもののことを、音素に対して音声というの」

「つまり、こういうことですね」

乙女はルーズリーフに表を書いた。

音声表記

人類が発するあらゆる言語音

言語音をありのままに記述する

[ ]の中に入れて書く

音素表記

ある言語の話者が認識している言語音

言語音をその言語の中で使われる音の範囲に区切る

//の中に入れて書く

「うう……難しいです」

こずえちゃんが早くもギブアップする。僕がフォローを入れる。

「例えばパンとバンは違う語だと思う？」

「はい、それはもちろん」

「ところが中国人や韓国人はどちらも同じものだと考える。彼らは少なくとも語頭においては清音と濁音の違いが分からないんだよ。もちろん、訓練すれば個人的には区別できるようになるけどね」

「え、p と b の違いがないんですか？」

「その代わり、息を強く吐いた p と、息を弱く吐いた p の区別をする。僕らは逆にこれがふつう区別できないね」

「はい」

「つまり日本人にとって [p] と [b] という音声は /p/ と /b/ という音素に感じられるけど、中国人や韓国人にとって [p] と [b] という音声はひとつの音素にしか感じられないんだ」

「そうなんですか」

「think などに使われる th の音声は [θ] という記号で記されるんだけど」

「シータですか？ シータっていうと、私には角度しか思い浮かばないんですか」

三角関数か。まあ理系にとっては当然だな。にしても 1 年の 6 月なのにもう三角関数を知ってるのか。だいぶ先まで予習しているみたいだな。



「そうだね、シータでthの[θ]という音声を示す。英語はこの[θ]という音声を/θ/という音素で捉える。また、[s]という音声を/s/という音素で捉える。

ところが日本語には/θ/という音素がない。[θ]と[s]はともに/s/という音素に分類される」「つまり音素がいい加減な表記法で、音声が正確な表記法ってことですか？」

ずいぶん乱暴な言い方だな。

「……まあ、音を正確に表記しているという意味では音声のほうが正確といえるかもしれないね」

「じゃあ音素ってなんのためにあるんですか。いい加減な表記なんか必要ないんじゃないや」

「そんなことないよ。例えばこずえちゃんは『判子』の『ん』と『運』の『ん』と『簡単』の『ん』と『緩慢』の『ん』はどれも同じだと思う？」

「はい。だってどれも『ん』ですもの」

「だよな。日本語の音素で書けばどれも/n/で問題ない。

だけど音声にすると実はこれらの『ん』はすべて異なっている」

サラサラと表を書く。

単語	判子	運	簡単	緩慢
単語の音声	[han̩kɔ̃]	[uN]	[kantaN]	[kammaN]
「ん」の音声	[ŋ]	[N]	[n]	[m]
「ん」の音素	/n/	/n/	/n/	/n/

「どう？ 音素ではどれも/n/だけど、音声はそれぞれ異なっているでしょ」

「はい」

「平仮名という文字は音声と音素のどちらを表しているといえる？」

「音素ですね。『ん』という文字はすべて/n/という音素を表しています」

「もし日本語の文字が音素じゃなく音声を表すとしたら、同じ『ん』なのに単語によって色んな『ん』を書き分けなければならない」

「それってすごく面倒ですね。音声が多少違ったってあたしたちの耳には少なくとも『ん』は『ん』でしかありませんから、いちいち厳密に音声で表記する必要はないと思います」

「だよな。少なくとも僕らの視点でいえば音素で音を表記したほうが便利だ。このように、音素というのは音の描写に関しては正確性を欠くが、言語を運用する際にはその曖昧性によりかえって便利ということがある」

「あ、そうか、なるほど。先輩すごいです、よくこんなことをご存知ですね！」

素直に褒めてくる。僕は鼻を掻きながら、「いやまあ、語学をやっていると音声や音素の違いは必然的に知ることになるからね」と返した。

「こずえちゃんはまだ音素と音声の違いが分かったみたいだね。音韻論っていうのは主に音素を扱うの。そして音声学っていうのは主に音声を扱うの。それが違い」

「なるほど」

「ちなみに音声学は主に3つの分野に分かれるよ。音が自分の口を出るまでの段階と、音波が空気中を伝わっていく段階と、音が相手の耳に入るまでの段階の3つ。

まず最初の、どのように音を発声するかという段階が調音音声学。音声学というと通常これを指すよ。

次に、音がどのように伝播するかを調べるのが音響音声学。音波としての音声を取り扱うから、物理学の分野とかぶる。

最後に、相手の耳に音が入り、どのように音が処理され認知されるかを研究するのが聴覚音声学」

「色々あるんですね。音素は言語によって異なるから、音韻論は日本語音韻論とか英語音韻論のように、言語の数だけ存在するんですか？」

「そうだよ」

「じゃあ音声は人の発声できる音すべてをあまねく扱うものだから、音声学は言語ごとに存在しないのですか？」

「まあそういう考え方も分かるよ。音声は人間の言語音一般に共通するものだから、これを研究する分野は一般音声学というの。ただ日本語や英語といった特定の言語に使われる音声だけを調べたい場合もあるでしょ？」

「あるんですか？」

「例えば英語学者は英語で使用される音声を知りたいわけで、ナワトル語で使われる音声には興味がない。だから英語で使用される音声だけに注目する。その結果、英語音声学という分野が生まれる。同様にして日本語音声学という分野も生まれる」

「なるほどです」

こずえちゃんはおにぎりセットを食べ終わると、パックのジュースを飲みだした。

「そういえば先程 think の th の音声を[e]と書いてましたけど、この記号って世界で通用する共通のものなんですか」僕を見てくる。

「音声を表記する手段はいくつもある。だけど最も国際的に用いられているのは IPA という音声表記方法だ」

「あいびーえー？」

「International Phonetic Alphabet の頭文字を取って IPA。頭文字からできた単語のことを頭字語(acronym)という。IPA を漢字にすると、国際音声字母。まあ普段は IPA というよね。これは音声だから必ず[]の中に入れて使ってほしい」

「IPA にはどれくらいの音声が載っているんですか？」

「ええと」乙女が困った顔をする。「『言語学大辞典第6巻術語編』などの裏表紙に表が載ってるんですけど、ここは学食ですし……」

すると綺夢が「ちょっと貸してね」と言ってルーズリーフを1枚取った。そしてスラスラと IPA の表を綺麗な文字で作ってしまった。

「おいおい、こいつ IPA を全部覚えてるっていうのかよ。化物だな……。言語学者でもこんな芸当そうそうできないんじゃないのか？」

綺夢は子音、母音、その他の記号をすべて再現した。

【国際音声字母】

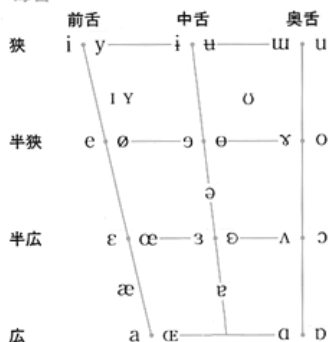
(一九九三年改訂版より抜粋)

子音 <肺気流>

	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部 歯茎音	そり 舌音	硬口 蓋音	軟口 蓋音	口蓋 垂音	咽頭音	声門音
破裂音	p b			t d		ʈ ɖ	c ɟ	k ɡ	q ɢ		ʔ
鼻音	m	ɱ		n		ɳ	ɲ	ŋ	ɴ		
ふるえ音	β			ɾ					ʀ		
弾き音				ɽ		ɽ					
摩擦音	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ʂ ʐ	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	ħ ʕ	h ɦ
側面摩擦音				ɬ ɮ							
接近音		ɸ		ɹ		ɻ	j	ɥ			
側面接近音				ɻ		ɻ	ɻ	ɻ			

記号が対になっているところは、右側のものが有声音を表す。影を付けた部分は、発音が不可能であると考えられることを示す。

母音



記号が対になっているところは、右側のものが円唇母音を表す。

その他の記号

- ʌ 無声(両)唇・軟口蓋摩擦音
- w 有声(両)唇・軟口蓋接近音
- ɥ 有声(両)唇・硬口蓋接近音
- ɕ ɟ 歯茎・硬口蓋摩擦音

破裂音および二重調音は、必要ならば2つの記号をタイで結んだものによって表すことができる。

kp ts

補助記号

- 。 無声 ɰ ɖ
- h 有気 tʰ dʰ
- ˘ 中舌母音化 ɛ̘
- ˙ 音節副音的 ɛ̣
- w 唇音化 tʷ dʷ
- j (硬)口蓋化 tʲ dʲ
- ˆ 鼻音化 ẽ

補助記号は、場合によっては上に付けてもよい。例: ɰ̣

出典: <http://dajirin.dual-d.net/extra/nihongoon.html>

「子音は横軸が調音点、縦軸が調音法でできてるの。調音点っていうのは口の中のどの位置でその音声を作るかっていう意味ね。例えば[p]は両唇音(bilabial)とって、上唇と下唇を使って調音するの」

「ああ、確かに[p]を発音するとき、一旦口を閉じてからパッと開きますもんね」

「調音法というのは、どのように音を調音するかという意味。例えば閉鎖音(plosive)は破裂音ともいうんだけど、一旦口の中に息を溜めて、一気に放出することで得られる音声のこと。こずえちゃん、[p]って発音してみて」

彼女は言われたとおり、ぷっという可愛い音を立てて唇を突き出した。

「[p]を調音する際、両唇がふさがっているの、ほっぺたが膨らむくらい息が口の中に溜まるでしょ。つまり口の中に閉鎖状態がある。それが一気に解放されて出る音だから閉鎖音。音がポンッと破裂したように聞こえることから、破裂音ともいうよ」

「じゃあ他の列にある摩擦音(fricative)は音が擦れているんですか」

「そう。[s]や[z]などの摩擦音は舌と口蓋(口の中の屋根)などの間に狭い空間を作り、その狭い空間を息が通るときにできる音なの。狭い空間を通る際に摩擦が起こるから摩擦音」

「へえ、ちゃんと意味があるんですね。鼻音(nasal)の[m]や[n]は息が鼻を抜けるから鼻音ですか」

「明察」にこりとする。

「子音は調音点と調音法から表が作られるんですね。ところで[s]の欄には[z]も入っているんですが、これは？ よく見ると[t]の欄にも[d]が入ってますね」

「同じ欄に2つの音声がある場合、左側が無声音で、右側が有声音だよ。[t]や[k]のような清音は無声音で、[d]や[g]のような濁音は有声音というの。ちなみに[m]や[n]や母音などは有声音だよ」

「どうやって無声音と有声音を区別するんですか」

「喉に手を当てて子音を発音してみて。[s]などの無声音では声帯が震えないけど、[z]や[m]などの有声音では声帯が震えるでしょ。声帯が震えるほうを有声音というの」

するとこずえちゃんは何度か実験してみて「なるほど」と言った。

続いて母音(vowel)の表に目をやると、こずえちゃんは僕に語りかけてきた。

「母音は調音点とか調音法で表が作られているわけじゃないみたいですね」

「ああ、母音の場合は横軸が舌の前後の位置を意味している。左にある[i]は舌が一番前になる。右にある[u]は舌が一番後ろに引っ込んでいる。

縦軸の上下はそのまま舌の高さを示す。[i]を発音するときは舌が高くなり、[a]を発音するときは舌が低くなる。

[u]と[u]のように、同じ箇所を書いてある母音同士の場合、右に書いてあるほうが唇を丸めて調音する母音だ」

こずえちゃんは「あーうーいーあー」などと発音を繰り返し、舌の位置を確認していた。何度か実験した後、「あ、本当だ。母音って音によって舌の位置が違いますね」と言った。「母音の表は子音の表より簡単だ。口の中を横から見たときの舌の位置がそのまま表になっているからね」

「確かに」

「ちなみに母音の表は▽な形をしているだろ。だからこれを母音三角形などといったりすることがある」

「へえ！」

「音声と音韻の違いが分かったところで、弁別素性と音声素性について説明するね」

代わって綺夢が説明を始める。

「べんべつそせい……おんせいそせい」

「例えば『髪』はkami/で、『波』はnami/で、これらはk/とm/の違いしかないよね。どちらも子音だから、k/やm/は[+子音]と表すことができる。

ちなみにkami/とnami/は音素がひとつしか違わないけど、こういうペアのことを最小対語というよ。ミニマルペアともいうね」

「なるほど。ではk/やm/は[-母音]と書いてもいいんですか」

「うん、同じことだね。k/は閉鎖音だから[+閉鎖性]と書ける。このカッコでくくった特徴のことを音声素性というの。m/は[-閉鎖性、+鼻音性]などといった音声素性を持つ」

「音声素性同士を比べることで、k/とm/の違いが分かるということですね」

「そう。違いが分かるというのを『弁別できる』というよ。

『髪』(kami/)と『釜』(kama/)の違いはi/とa/だけなんだけど、i/は舌が高いところで調音され、a/は舌が低いところで調音されるよね。この場合、調音点が高いかどうかでi/とa/が区別され、『高い』が弁別素性になる」

「弁別素性、音声素性、音素、音声……」

確認するように呟くこずえちゃん。

「あと異音(allophone)についても説明しておこうか」

「いおん？」僕は首をひねる。

「IPA で書くと日本語の『う』は[u]に近いの。これは唇を丸めずに発音する『う』だよ。一方、フランス語なんかで使われる唇を丸めて突き出したかのような『う』は[u]と書くの」「ああ。同じ『う』でも数種類の音声があるよな」

「だよな。ということは同じ/w という音素でも[u]や[u]といった音声があるってこと。日本語では[u]を[u]と発音しても構わない。この場合、[u]や[u]のことを/wの異音と呼ぶことができる」

「音声の代替品みたいなものだな」

綺夢は「そうだね」と言って頷いた。

「ねえ、音節という術語は今まできちんと説明してこなかったけど、分かってる？」と僕を見てくる綺夢。

「syllable のことだろ、シラブル。母音の前後に子音を伴った音素の集まりのことだ。例えば星座を意味する constellation は con-stel-la-tion と分綴できる。音声にすると[kʌnstələʃən] だが、このうち[kʌn]などが音節だ。

ちなみに con-は『ともに』という意味だからここでは『集まった』というような意味で、stell は『星のある』という意味だ。イタリア語で星のことを stella というが、あれと同じだよ」

「そうだね。ところで、ほかに星に関する面白い語学ネタはある？」

「えーと、例えばギリシャ語で星は  $\alpha \sigma \tau \eta \rho$  (アステール) というんだが、その一方で『\*』印のことを米印と呼ぶ人がいるだろ。あの記号はアスタリスクというが、あれはこのアステールと同じ語源だ。語源的には米印ではなく星印なんだよ」

すると綺夢は満足気に頷いた。

「なお、子音は consonant といい、通常 C で表すよ。一方、母音は vowel で、通常 V で表すの。」

日本語の音節は『ん』や『っ』や『ー』などを除いて基本的に CV でできてる。例えば『か』は/ka/という CV の音節でできている」

「ふむ。ただ、ア行は CV の C の部分がないな。『あ』は/a/だから」

「頭に空の子音が付いているとも考えられるね」

「なるほど、理系的な考え方だな」

「ただ、もちろんア行の場合は V という音節だと考えることもできるけど」

「日本語の音節は CV だけなのか？」

「『ん』で終わる単語があるから、CVC もあるよ。『缶』は/kan/だから CVC でしょ。」

日本語は比較的音節構造が単純なの。『ん』で終わるものや『ちゃ』とかの拗音を除いて、基本的に単純な CV という構造をしていることが多いから」

「それに比べると英語の音節構造は複雑だな。strength（強さ）なんかは CCCVCCC という構造をしてる。子音、多すぎだろ」

「音楽の場合、1 個の音符に 1 音節を宛がうのが基本だから、英語の歌の場合、a みたいな短い音節も 1 音符で歌われるし、strength みたいな長い音節も 1 音符で歌われることになるね。ひとつの音符に対して集まる音素の数が一定でなさすぎる」

「だから英語の歌って歌いにくいし聞き取りにくいんだよな。逆に日本語は歌いやすい。あれは音節構造が単純だからだったのか」

「ちなみに、CV みたいに母音で終わっている音節のことを開音節といい、CVC のように子音で終わっている音節のことを閉音節というよ」

「音節には開閉があるんだな」

「音節については知ってたみたいだけど、モーラは分かる？」

「それは知らないな」

「モーラとは、音韻論上、一定の時間的長さをもった音の分節単位のこと。日本語の音韻論でよく登場するよ。日本語では音節よりモーラのほうがしばしば重要になるからね。」

「ねえ、こういう遊びを知ってる？ じゃんけんで勝った手の数だけ歩数を進めるっていう遊び。グーで勝つとグリコって言いながら 3 歩歩ける」

「ああ、子供のころやったな、学校帰りの階段とかで。チョコだとチョコレートで、パーだとパイナップルだったっけ」

「あれ、チョコのときとパーのとき、何て言いながら階段を上ってた？」



「ええと、正確にはチョコレートじゃなくて『チ・ヨ・コ・レ・イ・ト』と言ってたな。『チョ・コ・レ・イ・ト』とする場合もあったけど。パイナップルの場合は『パ・イ・ナ・ツ・プ・ル』か『パ・イ・ナ・ツ・プ・ル』のどちらかだったな」

「伸ばし棒の『ー』は長音といい、ちっちゃい『つ』は促音といい、『ん』は撥音というのが。日本語音韻論だと通常/R/,/Q/,/N/で示されることが多いよ。日本語ではこれらはすべて『あ』とか『か』と同じようにひとつの拍を持つよね」

「ああ、『パ・イ・ナ・ツ・プ・ル』の『ツ』みたいにな」

「その拍のことをモーラというの。『ねこ』は2モーラ、『ラッパ』は3モーラ、『てんぷら』は4モーラ。」

「長音と撥音と促音が連続する珍しい単語もあるよ。『ウィーンつ子』みたいにね。これで5モーラ」

「ふうむ。となると和歌や短歌なんかは基本的にそのモーラっていうので構成されているわけか。五七五の中で『ラッパ』は三とカウントされるもんな」

「そうだね」

綺夢は一拍置くと、話題を変えた。

「ところで貴方は金田一春彦の『日本語』を読んでいるけど、高低アクセントや強弱アクセントについてはもう読んだ？」

「ああ、日本語は『橋』と『箸』みたいに音の高い低いで単語にアクセントを付けるんだよな。『箸』だと最初の『は』が高くなる。」

「一方英語の absent について、『欠席の』という形容詞では ab の部分が強く読まれるが、『欠席する』という動詞では sent の部分が強く読まれる」

「そう、アクセントには高低式のものと同強弱式のものがある。英語やドイツ語など、ヨーロッパの言語には強弱アクセントが多いけど、世界的に見ると強弱アクセントはほかにアフリカ東部・北部などに見られる程度で、全体的には少ないの」

「あと、アクセントとはちょっと違うけど、中国語には声調ってものがあるよな」

「声調ってなんですか、先輩？」

「音節内で音の高さを上げ下げすることで単語の意味を変える手法のことだよ。中国語には四声というのがあって、同じ『マー』という音でも4種類あるんだ。」

例えば『マー』という音を高く平たく発音すると『母』という意味になる。これを中国語では一声というんだ。

下から上へ上げるように『マー?』と発音すると『麻』という字になる。これが二声。一旦下げてから少し持ち上げるように発音すると『馬』という意味になる。これが三声。高いところから落とすように発音すると『叱る』という意味になる。これが四声。ちなみに声調のない軽声というものもあるよ」

「え、『マー』だけでそんなにたくさんの意味があるんですか？」

「そう、だから『妈妈骂马(Māma mà mǎ)』と言うと、マー マー マーで、『お母さんは馬を叱る』という意味になるんだ」

「あは」こずえちゃんは両手を口の前で合わせた。「面白いですね、それ。言葉遊びみたい」

「ちなみに、わたしたちの言葉は分節音素の集合でできているよね」綺夢が思い出したように述べる。「例えば『これはねこです』は korewanekodesu という分節音素の集合。だけどわたしたちはこれを平坦には読まない。アクセントやイントネーションを付けて読む。そういったものを超分節音素というの。声調や音調（イントネーション）は超分節音素の仲間だよ」

「日本語は『橋』と『箸』をアクセントの違いで呼び分けますけど、どんな言語にもアクセントってあるんですか」

僕はコーラを飲み、「色々だよ」と答えた。

「例えばアクセントは一般に固定アクセントと自由アクセントに分かれる。固定アクセントってというのは単語のどこにアクセントが置かれるか決まっている言語のことだ。

フィンランド語は外来語を除いて単語の最初の音節にアクセントが置かれる。単語ごとにアクセントを覚える必要がない分学習は簡単だけど、『橋』と『箸』のような便利な使い分けはできない」

「へえ……」

「こずえちゃんはサルミアツキっていう餡を知ってる？」

聞いた瞬間、綺夢が顔をしかめる。

「綺夢は知ってるようだね」

「多分……世界一まずい餡ではないかと……」

「はは……まあ否定はしない。ちなみにグミもあるがな。で、salmiakki はどこを強く読むと思う？」綺夢に目を向ける。

「カタカナ語の感覚だと『ア』の部分が強いよね」

「フィンランド人がsalmiakki を発音しているのを聞いたことは？」

綺夢は口ごもる。乙女が代わりに「私はありませんわね」と答えた。

「最初の『サ』の部分を強く読むんだ。実際に聞いてみると違和感があるよ。それなりに長い単語なのに、一番はじめにアクセントが来るから」

あの味を思い出し、ちょっと胃が気持ち悪くなる。

「さて、フィンランド語は固定アクセントだが、知ってる通り日本語や英語は自由アクセントだ。

しかし世界には無アクセントという簡素な言語もある。特にどこを強く読むか決まっていな言語のことだね。韓国語のソウル方言やフランス語がこれに当たる」

「え、意外なラインナップですね。もっと聞いたこともないような遠くの言葉かと思ってました。フランス語と韓国語ってわりと馴染みのあるほうじゃないですか……。なのにアクセント、ないんですね」

「それと——」と言いかけたとき、後ろから「ちょっとアンタたち」という声がかかった。振り向くと学食のおばちゃんが呆れた顔で立っていた。

「はい……？」

「もうとっくに昼休み終わってるよ」

「えっ!？」

ガバッと時計を見る4人。

……本当だ。辺りを見回すが、もう僕らのほかに誰もいない。

やばい。授業がもう始まっている。

額を汗が伝う。

それにしてもいつの間にこんなに時間が経っていたんだ。

慌てて僕らが走り去ったのは言うまでもない。

結局その日の放課後は乙女が生徒会だということ、こずえちゃんがバイト（接客業らしい。どうりでハキハキしているわけだ）だということ、バベルのはまた明日ということになった。

<類型論>

「わあ、風が気持ちいいですねっ！」

こずえちゃんがスカートを押さえながら言う。

翌日の放課後、僕らは気分を変えようという理由で屋上に来ていた。

フェンスの向こうには街並みが見える。目下には校庭を歩く生徒の姿。帰り支度をする者もあれば、部活動に勤しむ者もいた。

綺夢は猫のようなくりくりした目を少し細めて見ていた。

「目、悪いのか？」

「ううん、視力は良いよ」

綺夢の顔をしげしげと見つめる。まつ毛がカールしている。きっと風のあるところだと埃が目に入りやすいのだろう。それで目を細めているのか。

亜麻色の髪といい緑の目といい、やはり親は外国人なのだろうか。

「なあ、綺夢ってハーフ？」

しかし彼女は「ハーフっていうか……」と言ったまま黙ってしまった。見かねた乙女が「色々な血が混ざっているので何人とも言えないんですよ」と教えてくれた。

「乙女さん、ほらほら、気球ですよ！ 珍しいですね！」

こずえちゃんが乙女の手を引いてフェンスに寄っていく。綺夢と僕は取り残された。

綺夢は少し寂しげな表情で屋上のドアに背を預けた。

「僕、ヘンなこと聞いちゃったかな？」

「あ……ううん、気にしないで」

「でも、ハーフっていうか混血児ってことを訊かれたことを気にしてるようにみえたから……」

綺夢は少し黙った後、「ねえ、笑わないでくれる？」と呟いた。

「何？」

「わたしって、男の子と話すのが苦手なの。ううん、女の子とも。そもそも人と話すのがあまり得意じゃない。仲の良い相手だったら平気なんだけど……」

「僕もそうだ」

「ふふ……。貴方はなんだか話しやすかったな」

「多分趣味の話が合ったからだろ」

「そうかなあ。……それだけじゃないかも」

「え？」

「……なんでもない」と俯く。

「あのね……。わたし、小さい頃……いじめられてたの」

「……」

それがどの程度のものなのか分からず、また何と反応しているのかも分からず、僕は何もフォローを入れられなかった。丈士ならきっと気の利いたセリフをいうのだろう。

相変わらず学問に関係ないこととなると急に口下手になる。いい加減コレどうにかならないものですかね。

「多分この見た目のせいだと思う。わたし、ヘンな見た目だから」

「ヘンというか……」

美少女なだけなんじゃないか？

「子供のころから外人外人って指さされていじめられて……。それで一時期ヨーロッパに行ったこともあるんだけど、東洋人の血が入ってるからやっぱり向こうでも外人扱いされちゃったんだよね」

「そうなのか……」

「そのときわたし思ったんだ。ああ、この世界のどこにも自分の居場所はないんだって」

「……」

「わたしみたいな雑種の混血児はどこに行っても外人扱い。どこにも母国がない。宙に浮いた存在。それがすごく嫌だった」

「そっか……」

相槌を打つので精一杯だった。容姿端麗・頭脳明晰な綺夢にそんな暗い過去があったなんて、想像だにできなかった。

「色々な国の言葉で罵倒されたよ。そうこうしているうちに自分って一体何者なのかなくて考えるようになった。わたし、マルチリンガルだから母語すら何かよく分からないし。語学——言葉においてすらアイデンティティがないんだって知って愕然としたの」

綺夢はきゅっとスカートの裾を握る。

「子供のころから色々な言語に触れてきたから、言語って一体何なんだろうって思ったのね。それで言語学に興味を持った。それがはじまり。

そんなとき、たまたま金田一春彦の『日本語』に出会ったの。そしたら思いのほか面白くて、どんどん言葉の学問にハマっていつちゃった。

友達もロクにいなかったし、することもなかったから、気付いたら周りから言語学少女なんて呼ばれるようになってた」

ふいに部室の映像が脳裏によぎった。

言語学少女とバベルの塔……か。

「高校に入ったら流石に分かりやすいいじめはなくなったけど、それでも周りの人との間にすごく壁を感じたの。差別しないで接してくれたのは乙女だけだった」

僕は遠くにいる乙女に目をやった。確かに彼女は分け隔てなく優しい。それに綺夢のことを妹のように可愛がっている。綺夢が信頼を寄せるのも理解できる。

乙女は長い黒髪をpushさえながら、こずえちゃんと気球を見ていた。その髪をpushさえる仕草がなんとなく艶かしかった。

綺夢は落ち込んだ表情のまま俯いていた。

どうして僕にこんな話をしたのだろう。

ただ聞いてほしかっただけなのか、僕が出自について尋ねたからか。

何と返せばいいのだろう。まったく気の利いたセリフが出てこない。

……いや、別に気の利いたセリフなんていらんじゃあないか。素直に感じたままに僕の気持ちを伝えればいいじゃないか。それで嫌われたらそれはそれまでだ。何も言わずにあのときこう言っておけば良かったかもしれないなんて後悔はしたくない。

「あの、さ」

こほんと空咳を決め込む。

「自分って一体何者なのかって言ってたけど、僕が思うに、綺夢は綺夢なんじゃないかな」

「え……？」

「いや、僕も僕でしかないし、乙女も乙女でしかない。日本人に見えたって見えなくなつて、浮いてたって浮いてなくなつて、人はそれぞれ異なる。一人ひとりがそれぞれの人間だ。

互いに似てるか似てないか。仮に似てたって、同一人物ってことはない。乙女もこずえちゃんも日本人だから、そういうくくりでは二人は似てるけど、でもやっぱり乙女は乙女でしかないし、こずえちゃんはこずえちゃんではない。

同じように、綺夢も綺夢でしかないし、綺夢だけが綺夢でありえるんじゃないか」

「わたしだけが、わたしでありえる……」

「——と、僕は、こう考えるのだが」

「ふふ」くすつと笑う。

「なんだよ」

「今、鈴木孝夫の『私は、こう考えるのだが。』を思い出したの」

「それも言語学者か」

「そう。大御所だよ？ 覚えておいたほうがいい。

わたしは何者か。わたしは綺夢である。それ以上でも以下でもない。つまりありのままの自分でいいってことだね」

「——と解釈してくれると助かる」

頬を掻きながら呟いた。

「ありがと。なんか少し元気出たよ」

そう言うとき綺夢は乙女たちのところへ駆け寄っていった。

「気球見物は堪能したかい？」

僕がこずえちゃんに歩み寄って訊くと、「はいっ！ あんなのが飛んでるなんてすごいですよね」と元気よく言った。

彼女は遠くの街並みを見下ろすと、「これだけたくさん家があっても、そこに住んでいる人たちはまず間違いなく日本語を話してるんですよね」と言った。

「幸運なことにね」

「幸運なんですか？」

「公用語がひとつということは、とても幸せなことなんだ」

「語学好きの先輩のセリフとは思えません。もっとたくさん公用語がある国がお好きかと」

「だってそれは日本という国が日本語だけで生きていけるってことを表しているからね。外国に征服されていたらその国の言葉を公用語にしなければならない。公文書から紙幣か



ら教科書から看板まで複数の言語で書かれるようになる。日常生活のことを考えると面倒でたまらない」

「それは……確かに」

「日本人は英語ができないことで有名だが、それはある意味幸せなことなんだよ。日本人だって英語ができなければご飯が食べられない状況になれば、とりわけ子供世代はすぐ適応するようになる。

世界には英語なんて好きでもないけど商売のために、生きるために嫌々英語を学んでいる人が何千万という。

多くの発展途上国では大学があっても自国語で講義をすることができない。学問上の語彙がその言語に欠けていたり、人材が欠けていたりするんだ。結局英語やフランス語で講義をするということが多々ある」

「語彙って何ですか」

「ある言語が持つ全ての単語の集まりのことだよ。『単語』という言葉のカッコいい版ではないから注意してほしい」

「はい」

「ともあれ日本人は日本語で生まれ、日本語で育ち、日本語で大学教育まで受けられ、日本語で働き、日本語で死ぬことができる。それはとても幸せなことなんだよ。

日本はみんなが思っている以上に凄い国だし、無理に英語に尻尾を振る必要もないと僕は思う。今の日本人は失ってみないと自らの幸運に気付かないのかもしれないけどね」

「意外でした……。語学ができる人って色々な語学の中に埋もれて生きていたいのだばかり」

「学問上はね。でも日常生活は日本語だけで生活できる現状を幸せに思っているよ。やがて日本もそういなくなる日が来るかもしれない。そのとき、過去の自分たちは幸せだったと気付くかもしれない」

「そう……ですか」

「ねえ先輩」こずえちゃんは遠くを指さす。「このままどこまでもまっすぐ行ったら、海に着きますかね」

「着くさ。日本は島国だからね。どの方角に行こうと周りには海だ」

「海の向こうでは外国語が使われている……。先輩、世界にはいったいどれくらいの言語があるんでしょうね」

それは言語学畑でない僕でも知ってる。

「学者によってまちまちだそうだよ。4000 だという人もいれば 5000 だという人もいる。学者によってはもっと少ない数を挙げたり、逆にもっと多い数を挙げることもある」

「なんで言語の数は分かってないんですか？ 現地調査——フィールドワークでしたっけ、それを世界各地で徹底できてないからですか」

「いや、最大の理由は言語学が言語と方言の境界線を定義できないからだよ」

「えっ！？」心底驚いた表情。「言語学って何が言語かすら定義できないんですかっ！？」

それはもっともな驚きだろう。音声学が音声とは何かを定義できなかったらお笑い種、噴飯物だ。しかし言語学では言語と方言の境界を引くことができないのだ。

話を聞いた綺夢が残念そうな顔で頷く。

「そうなの。学者によってある言葉を言語とみなすか方言とみなすか意見が一致しないの。

アメリカ英語とイギリス英語は国が違うのに同じく英語という扱いでしょ。これを分けるべきって考える人がいてもおかしくないよね。

日本語なんて青森と沖縄じゃほとんど意思疎通できないくらいなのに、日常的にはどちらも同じ日本語の方言とされている。もっとも、琉球語は日本と同系の別言語だと考える人もいるようだけど。

逆にスウェーデン語とノルウェー語は互いに意思疎通ができるほど似ているのに、別の言語としてカウントされる。

ある言葉が言語か方言かは慣習による取り決めが多いの。だけど細かい部分で学者の間で一致をみないから、世界の言語の数を正確に数えるのは、どれだけフィールドワークを行なっても無理なのよ」

「でも、目安っていうのはないんですか。大体いくつくらいとか」

「目安ねえ……。ドイツのマイヤーは 4200 から 5600 の間だと言ってるけど、三省堂の『言語学大辞典世界言語編』には 8000 以上の言語が収録されているしなあ……」

まあ少なくとも 100 ということはないし、何万ということもないね。大体数千語というのがせめてもの目安かな」

「はあ、数千ですか。いずれにせよ、途方もない数ですね。あたしなんて日本語しかまともに使えないっていうのに……」

「バベルの塔が崩れないほうが良かった？」悪戯げに微笑む綺夢。

「う～……、かもしれません。あ、ちょこっとだけ崩れればよかったかも」

「ふふ、面白いね、こずえちゃんは」くすくすと笑う綺夢はなんともいえず愛らしかった。

「世界に数千の言葉があるとして、それだけたくさんあると何か何だか訳が分からなくなりますね」

「だから言語学者はそのカオスを少しでも減らすために、数多ある言語を分類してきたの」

「分類……ですか？」

「印欧語族のように、比較言語学で行う系統的分類も分類のひとつだよ」

「ほかにも分類ってあるんですか」

すると乙女が口を開く。

「19世紀のドイツの言語学者フンボルトによる孤立語、膠着語、屈折語、抱合語が有名ですわね」

「こりつ、こうちやく、くっせつ、ほうごう……」オウム返しに唱えるこずえちゃん。

「孤立語は文法的機能を語順によって表す言語のことですわ。中国語などがそうです。

『我爱你』と書いて『私はあなたを愛する』。もし『你爱我』となれば『あなたは私を愛する』という意味になります」

「主語、動詞、目的語などの役割が語順によってのみ表されるということですね」

「はい。一方、膠着語は単語に文法的な意味を示す語——正確には形態素——をくっつける言語のことです。日本語やトルコ語などがそうです。

『私はあなたを愛しています』の場合、『私』が主語であることは助詞の『は』によって表されています」

「じゃあ、『あなた』が目的語であることは助詞の『を』が表してるんですね」

「そうですわね。他方、屈折語は文法的な意味を示す部分が単語の中に食い込んでしまっている言語のことです。助詞が単語の中に入り込んでしまって単語から切り離せないというようなイメージをしてくださいな。ラテン語やアラビア語などがそうです。ラテン語の例文はええと……」

僕を見る。パトンタッチだ。

「例えば *puer puellam amat* (少年は少女を愛する) の場合、*puer* が『少年は』を表す。*puer* という単語の中に日本語でいう助詞の『は』が含まれているんだ。一方 *puellam* は『少女を』という意味で、この単語の中に既に助詞の『を』が含まれている」

「なるほど……」

「最後に抱合語ですわね。文を構成するあらゆる要素が結びついて、一文が一語になっている言語のことです。エスキモー語などがそうですが……」

流石に僕もエスキモー語は分からない。綺夢は「言語学の本で読んだ例文だけなら分かるけど……」と手を挙げた。

「*kavfiliomiarumagaluarpunga* (私は喜んでコーヒーを作しましょう) は、*kavfi* (コーヒー) に *-lior-* (する、作る)、*-niar-* (～するつもりだ)、*-umagaluar-* (喜んで～する)、*-punga* (一人称単数の接尾辞) がくっついたもので、一語で一文になっているの」

「ありがとう、みゆちゃん。」

以上で見たのが、フンボルトの提唱した孤立語、膠着語、屈折語、抱合語ですわ」

「あらゆる言語はその4つに分類されるんですね」

「ところがそうでもないんですよ。例えば日本語は何語に分類されると思います？」

「文法的意味を助詞などで示すから、膠着語ですよ」

「では動詞に限ってみればどうなるかしら」

「ええと……書かない、書きます、書く、書くとき、書けば、書けのように活用しますね」

「日本語の動詞には未然形とか命令形といったものがありますわね。単語の活用で文法的意味を示しています。この点だけ見れば、日本語はラテン語などと同じ屈折語です」

「確かに……」

「英語も *Taro and Jiro like Mary and Lucy* だったら主語と目的語を入れ替えても *Mary and Lucy like Taro and Jiro* になり、語順だけで主語と目的語といった文法的意味を表しています。この点で英語は中国語などと同じ孤立語的要素を持つと言えます。

その一方で代名詞 *I, my, me, mine* は日本語の助詞『は』『の』『を』などが単語の中に入り込んでいるので、屈折語的要素を持っていると言えます」

「英語の代名詞もラテン語の名詞みたいに活用しますもんね」

「ええ。ちなみに、名詞が変化する場合は活用でなく曲用といいます。

このように、言語は一般に孤立語だとか膠着語だとかに綺麗に分類することが難しいんです。一般に膠着語と言われている日本語にも屈折語的要素が含まれているわけですし。ただ、フンボルトのこの理論は、言語の伝統的な類型的分類として利用されています」

「類型的分類……ですか」

「あ、まだ類型論については説明してなかったね」

横で聞いていた綺夢がフェンスから指を離す。

「るいけいるん？」

「世界には何千もの言葉があるから、パターンごとに分類しないとやってられないよね。そのパターンのことを類型というの。

一番ありがちなのは基本語順で言語を分類する方法。

日本語は主語(subject)+目的語(object)+動詞(verb)という語順だよ。こういうのを頭文字を取って SOV 言語というの」

日本語は「私はあなたを愛します」という語順だから綺夢の言うとおりの。僕は綺夢の言葉を引き継いだ。

「一方、英語は I love you の語順だから SVO だな。

SOV は日本語、トルコ語、ラテン語などに見られる。

SVO は英語、フランス語、中国語などに見られる。

ちなみに動詞から始まる VSO のような言語もある。アラビア語のようにね」

「じゃあ貴方は世界の言語の何%くらいが SVO と SOV でできているか知ってるかな？」

「いや、割合までは……」と口ごもる。

「SOV が一番多く、約 50%。次いで SVO が多く、約 40%。残りの VOS (アラビア語)、VOS (トンガ語)、OVS (ニアス語)、OSV (ヒシカリヤナ語) で合わせて約 10%」

「日本語って一番メジャーな語順だったんですね」意外そうなこずえちゃん。

「類型論については松本克己などが詳しいよ。

それと、類型は語順以外にも見られるの。例えばアクセントで言語を分類すれば、日本語やスウェーデン語は高低アクセントを持ち、スペイン語やロシア語は強弱アクセントを持つと分類される」

「なるほど」頷くこずえちゃん。

「また、母音の数といった音韻論でも分類できるよ。

日本語は5母音で、世界一メジャーな体系をしているけど、中にはアラビア語のように /i/, /a/, /u/ の3母音しか持たないものもある」

「語順や母音体系などを見る限り、日本語はメジャーな言語に属するんですね。なんだか意外です。系統すら不明な言語だっていうのに……」

「類型論的に見れば、日本語はわりとありふれた言語だよ。日本語で特徴的なのは使用する文字種の多さじゃないかな。平仮名、片仮名、漢字、アルファベット、アラビア数字など、いくつもの文字を一緒くたに使用するからね」

そのとき、ぽつと雨粒が落ちてきた。

「やっぱりまだ梅雨だね。中に入ろう」と言って綺夢は僕らを連れ立った。

「そういえば明日は学校休みですね」こずえちゃんが階段を下りながら呟く。「あたし、バイトなくて暇なんですけど、先輩方はどうなんですか」

「わたしは言語学の本を読むくらいしか予定がないかな」

「私も哲学書を読むくらいしか予定がありませんわ」

「先輩は？」

暇だ。暇すぎる。どうせ家にいたってすることなどない。適当に受験勉強して終わりだ。かといって受験生が暇を公言していいものか迷う。

「ん……まあ、何か予定が入るなら時間を空けられないこともないけど」

なんだ自分、その上から目線は。暇じゃないですよアピールが我ながらウザい。

「じゃあみんなで街に遊びに出ませんか？」

「別にいいけど」

結局こずえちゃんの提案に誰も反対することなく、2時に繁華街の駅前で落ち合う約束になった。

校内に戻り、部室の前を横切ったとき、入り口のところに一人の少女が立っているのが見えた。

「あ……」

人のいい乙女が珍しく気まずそうな顔をした。綺夢も困ったような顔をしている。

少女はこちらに気付くと、首だけくいと動かした。無表情で、機械的な印象を与える子だった。黒髪をひとつに束ねている。

「誰？」と小声で尋ねると、乙女が「2年の市ノ瀬丁さんですわ」と答えた。

いちのせひのど……ねえ。「機械ヶ原ロボ子」とかのほうが似合ってる感じだけどな。

ロボ子、もとい丁は腕に旧式のパソコンを抱えていた。

「あの、丁ちゃん……」

綺夢が声をかけた瞬間、丁は脚で言語学部のドアを蹴った。ガンという音がしてドアが揺れる。

こずえちゃんが「きゃっ」と小さな悲鳴を上げる。

……なんなんだ、こいつは。

「鍵……開かない」

ポツリと呟く丁。

「あ、ああ、荷物ね」綺夢が慌てて駆け寄る。「また持ってきたんだね……？ いいよ、ウチに置いても」

どうやら隣のコンピュータ部の部員らしい。当面使わなくなったパソコンを言語学部の部室に置きにきたようだ。そういえば入って右手側の隅に謎の機械類が積んであったが、あれはそういうことだったのか。

コンピュータ部をチラと見る。言語学部の倍は広さがある教室だ。

チツと僕は舌打ちをした。——相手に聞こえない程度のデシベルで。まああれだ、本人に聞かれると良くないじゃないか。別に彼女が怖いわけじゃないよ？ ほら、もう高校生だし大人だし、いい加減荒事は避けたほうがいいのか……ね？

……心の底からチキンだな、自分。

ともあれ、ただでさえ狭い言語学部なのに、物置としていいように使われているのか。

綺夢が鍵を開けると、丁は無表情なまま入っていった。

「……なあ乙女、あいつなんなの？ 何様？ どちら様？ どの理系様？」

「丁さんはコンピュータ部の部長で、2年の首席なんです。専攻は脳科学とプログラムで、数学が得意科目だそうです」

「なんで無機質なくせにあんな横暴なんだ」

「コンピュータ部はウチの部室を狙ってるんです。向こうは機械類が多いから、置き場所に困ってるんです」

「言語学部だって本の置き場所に困ってるじゃないか」

「その……実はみゆちゃんが言語学部を始めるまで、あそこはコンピュータ部が自発的に物置として使っていたんですよ。

学校側はコンピュータ部の物置と認めていたわけではなかったのですが、言語学部ができたときに一旦荷物を全部コンピュータ部に戻させたんですよ」

なるほど、そういうことか。

「コンピュータ部としては部室を取られた気持ちになったわけです。やがてほとぼりが冷めたころに先方はまた荷物を置きにきたんです。

みゆちゃんとしては事実上先方の物置だったところを奪い取ってしまったということに対して気後れがあったので、彼らの言いなりになっているんです」

ああ、確かに綺夢は気が弱いからなあ……。

よし、ここはひとつ男を見せてやるか。なに、しょせん相手はロボ子よ。

僕ははずかずかと中に入っていった。パソコンを部屋の隅に置いた丁に向かって、「なあ」と声をかけた。

が、彼女はピクリともしない。

完全にスルーかよ。

「おい、市ノ瀬後輩！」

なんかヘンな呼称が出た。相当テンパってるな、僕。

詰め寄って——でもできるだけ遠くからおそろおそろ肩を叩くと、ようやく彼女は振り向いた。一切こちらなど眼中にないかのような無表情だ。

「悪いが、ここは言語学部の部室だ。勝手に荷物を運ぶのはやめてくれないか」

「……部員？」

無機質な声。やはりロボ子だ、機械だ。

「まっ、まだ仮入部だ」

「部員じゃないなら口を出さないで」

にべもない。

「ぎ……義を見てせざるは勇なきなり、だ！」

「は？」

意味不明という顔の丁。うん、僕も同意する。我ながら意味不明だ。

「前はそっちの部室だったかもしれないが、今はもう言語学部の部室なんだ」



「しかし部長の初月は拒絶しない」

こいつ、先輩を呼び捨てかよ。

「綺夢だって心の底じゃ迷惑がってるんだよ。な？」

綺夢に振る。彼女は困った顔で「迷惑っていうか、困るっていうか……」とぼしょぼしょ小声で答えた。

「旧態依然の言語学なんか研究している部活のことなど、知ったことではない」

ズバッと斬り捨てられた。

うっと詰まってしまう。

「旧態依然だと……？ 君に言語学の何が分かるっていうんだ」

僕に言語学の何が分かるっていうんだ。この語ヲタが。

でもとりあえずここは強気で。

丁は首を少しだけかしげ、垂れ下がった前髪を親指と人差指で摘んだ。

よく見ると端正な顔をしている。機械的で無表情だが、かなりの美少女であることには違いない。

一瞬後ずさりしそうになったが、頑張って耐える。てゆうか耐えろ。

「初月がやっているのは伝統的で古臭い言語学。最新の言語学は脳科学などと連携を図り、科学の力を借りて発達している。言語学はもはや旧来の分析方法では発展できないほどに発達してしまっている。これから新しい言語学を切り開いていくのは関連分野の諸科学と共存を図れる者だ」

「うっ……」

なんだかよく分からないが、凄そうなことを言っているぞ。

言い返せずに口ごもる僕の袖を綺夢がくいくいと引っ張る。

「丁ちゃんは言語学にも精通しているよ？」

最新の脳科学を言語学に応用する研究をしているの。

認知言語学と脳科学の知識なら、わたし以上かもしれない」

マジかよ……。ふつうにコンピュータやって、ゲームでも作ってるよ。

「じゃあなんで言語学部に入らないんだよ」

「声をかけたことならあるよ。でも……」

綺夢の代わりに丁が続ける。

「ここでは学ぶことがないから。

私は脳科学を使った最新のアプローチで言語学を研究する」

このロボ子、綺夢や乙女ほどの能力を持った人間を前にして、ずいぶんと大口を叩くものだ。しかし綺夢は少しも否定しようとしなない。

こいつ、そんなに優秀なのかよ。2年の首席だかなんだか知らないが……。

「説得の余地なしって感じだな」

「こんな部活に意味はない。早く潰してウチの分室にすればいい」

言ってくれるじゃないか……。

かといって今の僕では言い返すだけの知識がない。

僕はぎゅっと拳を握った。

丁は無表情のまま僕の横を過ぎ去り、出口まで歩いていった。

「待てよ。荷物、持って帰らないのか」

「アナタに私と渡り合うだけの力があれば、考えないこともない」

……くっ。

丁はドアに貼られたノベルの塔を見ると、無表情のまま呟いた。

「——バベルの塔が啼いてる」

え……？

それきり丁は何も言わず、コンピュータ部へと戻っていった。

室内には4人が取り残された。乙女とこずえちゃんが綺夢のそばに寄り添って無言で立ち尽くしていた。かける言葉が見当たらないのだろう。

綺夢は寂しげな表情で俯いている。

こずえちゃんは「なんなんですか、あの先輩……」と不快感をあらわにしている。

僕は開け放しになったドアを見ながら、頭の中で丁の言葉を復唱していた。

バベルの塔が啼いてる……。

<形態論>

今日は学校は休みで、2時に綺夢たちと繁華街の駅前に集合ということになっている。時間の5分前に行くと、既に乙女とこずえちゃんが来ていた。綺夢の姿はない。

乙女は白いワンピースを着ていた。長い黒髪とのコントラストが綺麗で、精霊のように見えた。カバンも時計もおしゃれなものを身に着けていた。やはりお嬢様なんだろうなあ。靴はブランド物であろう上品なパンプスだった。

こずえちゃんはカジュアルな服装で、淡黄色のキャミソールに紺のホットパンツに黒の花柄のレギンスを穿いていた。足が細くて長いので、つい目が行ってしまう。カバンは小さな革のリュックを背負っていた。脚にはブーツを履いていた。

「綺夢はまだみたいだね」と言うと、「みゆちゃんはいつも時間どおりに行動しますから」と返してきた。

その言葉通り、2時ちょうどに綺夢は現れた。1分と変わらずに。

「あ、みんな～」

待たせたことに悪びれもない。そもそも2時の集合なので、待たせたという感覚がないのだろう。やっぱり親御さんが外国人だと文化の差みたいのがあるのかな。

綺夢は桜色のカーディガンに白いシャツを着ていた。下は淡い水色のスカートで、ストッキングも履かずに生足だ。スカート丈は膝より少し上で、靴は緑色のレースアップのサンダル。カバンは持たず、白いふわふわの毛で覆われた小さなボシェットを肩から下げているだけ。全体的にちょっとロリータ向けな仕様だ。

ほほう、これはこれで……。三者三様で良いですなあ。みんな違ってみんないい。うむ、名言だ。

——などと思っていると、女子たちから「何見てるの？」という目を向けられ、慌ててあさっての方向を見つめた。

こずえちゃんが服を買いいたいというので、ショッピングモールに行き、服屋を見て回った。女の子たちがあれこれと試着をして遊んでいた。

僕はその様子を微笑まじげに見ていた。退屈な時間といえば退屈だったが、美少女たちが色んなファッションをこぞって見せてくれるだけで、男としては望外の幸せといっていだらう。

途中アイスクリーム屋でアイスを買って食べた。綺夢は甘い物が大好きなようで、幸せそうな顔をしていた。

乙女とこずえちゃんも甘い物はそれなりに好きなようで、おいしそうにしていた。女の子というのは基本的に甘い物が好きなようだ。

僕は甘い物がそこまで好きでもないし、男っぽいところを見せたかったという下心もあって、あえて抹茶アイスを選択した。綺夢に「しぶいね」と言われ、「まあ男なんてそんなもんだよ」となぜか偉そうに言ってしまったのが今日の1死にたいだった。

僕の中には他にも「1キモい」とか「1俺死ねばいいのに」とか、類似した単位が存在する。ちなみに「1死にたい」は1Stと書き、「1キモい」は1Kmで、「1俺死ねばいいのに」は1Osと書く。こういうのを自虐系単位と呼ぶのだが、いつになったら国際単位系に採用されるのだらう。

こずえちゃんの提案でゲームセンターに行った。乙女は行ったことがないらしく、綺夢もほとんど行ったことがないらしい。僕も小中学校のころは行ったが、高校になってからはあまり行っていない。

こずえちゃんは友達と遊び慣れているのだらう、色んなゲームを教えてくれた。といっても女の子が好きそうなものばかりだったけど。

運動神経を使うゲームが多かった。綺夢は体育も得意なので、初めてのわりにはサクサクとできていた。乙女は体育が苦手なようで、あまり対応できないでいた。

「乙女さんっ、そこです、そこっ！」

「え、ええと……」

「あー、ダメだぁ……」

「あらあ〜」

こんな調子で、おっとりしている乙女はこずえちゃんの指示にほとんど従えないでいた。僕は参加せずに彼女たちの様子を見ていた。特に自慢できるような特技も持ちあわせていないので、大人しく見ていることにしたのだ。まして女の子たちの前で失敗して恥などかきたくないし。

僕はベンチに座って3人を見ていた。

「結構ゲームセンターって疲れるねえ」

言いながら綺夢がベンチにやってくる。

「私ももう体力が……」

乙女がよれよれになってやってくる。

「おつかれ」

「はい、疲れましたわ……」

こずえちゃんが意外そうな顔で「あれ、もう止めちゃうんですか？」と寄ってきた。

1年といえばこないだまで中学生だったわけで、体力があるのも無理はないか。僕らはもうあと少しで大学生だもんな。年齢を感じるよ。

こずえちゃんは手に景品のぬいぐるみを持っていた。

「それ何？」

「えっと、猫ですね」

猫と聞いて綺夢の耳がピクツとなる。まるで尻尾が生えたかのようにうずうずします。

ああ、綺夢の尻尾がピンと立ってゆらゆらしているのが見えるようだ。

「み、綺夢さんにあげましょうか？ あたし、いっぱい持つてるから」

空気を読むこずえちゃん。

「いいのっ!？」

目がキラキラしすぎだ。施しを受けた恵まれない子供みたいな顔になってるぞ。

「わあ、しろにゃんこだあ」

嬉しそうだなあ。

綺夢はしばらく猫をいじって色んなポーズをさせていたが、ふと「ねえ、『猫』と『白猫』の違いは何か分かる？」と聞いてきた。

「え、白いか否かじゃないか？」

「どちらも単語だってことは分かる？」

「ああ」

「確かにどちらも単語なんだけど、『白猫』は『白』と『猫』の組み合わせでできているよね。一方『猫』はこれ以上細かく区切れない」

「そうだな」

「単語は何でできているか知ってる？」

「え、単語が語の最小単位だろ。単語は単語からできているとしか言いようがないよ」

「でも『白猫』という単語は『白』と『猫』に分けることができるよね？」

「確かに」

「英語の painter (画家) も paint と -er に分けられるよね」

「……だな」

「語を構成している最小の意味単位のことを形態素(morpheme)というの」

「けいたいそ……？」

「『猫』のように、たったひとつの形態素でひとつの単語になっているものを単純語というの。『雨』、『土』なども単純語だね。日本語の固有語は和語というけど、和語の単純語は2文字、もとい2モーラでできてるものが多いの」

「そういえば古典の時間で『あめつちの詞』っていうのをやった覚えがある。あめ、つちほし、そら、やま、かは……と続いていくんだよな。『かは』と書いて『川』の意味だ。

確かに和語の単純語は2モーラでできてるのが多いな」

「なあ、ひとつの形態素でできた単語が単純語なら、複数の形態素でできた単語はなんというんだ？」

「合成語だよ。白猫も painter もともに合成語。だけど合成語はさらに2つに分類できる。ひとつは複合語で、もうひとつは派生語」

「どう違うんだ？」

「painter の -er って『～する人』っていう意味だよな。paint は単体で使えるけど、-er は単体で使える？」

「無理だな」

「だよな。単体で使えない形態素のことを接辞というの。語頭に来れば接頭辞、語末に来れば接尾辞、語中に来れば接中辞。そして接辞を含んだ合成語のことを派生語というの」

「つまり painter は-er という接尾辞を含むから派生語か。で、『白猫』の『白』は色を示す名詞だし、『猫』は動物を示す名詞で、どちらも接辞ではないから複合語といたいわけだな？」

「明察」パンと手を打つ。

「painter は英語だが、日本語にも派生語ってあるのか」

「もちろん。『おやつ』は単純語で、『水菓子』は複合語で、『お菓子』は派生語だよ。丁寧語を作る『お』は単独では使えないから接頭辞でしょ。ほぼ同じ意味の単語なのに、どれも構成が異なっているの」

「形態素……か。形態素ってのは常に一定の形をして不変なものなのか？」

「そんなことないよ。例えば複数形を示す英語の s は books, girls, boxes においてそれぞれ /s/, /z/, /iz/ という形態になって現れるでしょ。このようにひとつの形態素に複数の交替形がある場合、それらを互いに異形態(allo-morph)というの」

「ついでに内容語と機能語についても触れておくね」

「ああ、頼む」

「内容語っていうのは文法的な機能をほとんど持たず、主として語彙的意味を表す語のこと。要は名詞・動詞・形容詞などのことだよ。」

一方、機能語っていうのは文法的機能を主に持ち、語彙的意味を持たない語のこと。要は英語の前置詞や日本語の助詞・助動詞などのことだよ」

「うん、分かりやすいネーミングだな。単語は内容語と機能語に分かれるんだな。ときに、内容語と機能語はどちらか先にできたんだろう」

「内容語じゃないかな。あと、両者はきっぱり分かれているわけじゃないよ。例えば内容語が機能語に変化することがある。両者は連続体で、境界線は虚ろなんだよ」

「そうなのか？」

「内容語が機能語になることを文法化というの。乙女がよく言う『~かしら』っていう終助詞は『~か知らん』から来ているの。『知る』という動詞が文法化しているよね」

「面白いな。英語の be going to が文字通り『行っている』でなく未来形を示すのも文法化か？」

「そうだね。あと、『3つくらい』の『くらい』も元は名詞だったんだけど、文法化して助詞になってる」

「ふむふむ」

綺夢はまた猫のぬいぐるみで遊びだした。

こずえちゃんは僕と綺夢の話を黙って聞いていた。

「大丈夫？ 付いてこれてる？」

彼女の顔を覗き込む。

「は、はい。なんとかっ」ふいに顔を赤らめて返事する。「あの、先輩は……」

「ん？」

「いえ……」

彼女は何か言いかけたものの、綺夢と乙女を見て止めてしまった。

乙女がジュースの紙コップを捨てに綺夢と席を立った。するとこずえちゃんは彼女たちを目で追いながら続きを話した。

「あの……先輩ってパベってるとき、顔が変わりますよね」

「え、そう？」

「はい。夢中になっているというか、す、素敵というか……」

もじもじするこずえちゃん。

……ん？ いま何て言った？

「あの……言語学に興味を持ったのって……」

「うん？」

「言語学が面白かったからですか」

「うーん、まあ……」

確かにそうだけど、それだけが理由と言えるだろうか。

僕は遠巻きに綺夢を眺めた。こずえちゃんも無言で綺夢を見る。

「それとも……」

綺夢を見つめながら話すこずえちゃん。

「それとも？」

「……いえ、なんでもありません」



綺夢と乙女が戻ってきた。

「で、もとはなんの話だっけ。そうそう、形態素。僕、語の最小単位は単語だと思ってたから驚きだったよ。語みたいな小さい単位がどういう仕組みになっているのかを調べる分野があるんだな」

「そう。そしてその分野のことを形態論というの。次は語形成について話そうか」

「面白そうですね」身を乗り出すこずえちゃん。

「語形成とは語を作り出すやり方のこと。語ができる場合、いくつかのパターンがあるの。

まったく新たに単語を作り出すやり方と、外国語からの借用と、既存の語を応用するやり方があるよ」

「IT用語なんかは借用が多いですよ。パソコン関係の単語はカタカナ語ばかりです」

「そうだね。で、既存の語を応用するやり方は派生、合成、逆形成、混成、省略などがあるの」

「合成っていうのはさっきの『白』と『猫』で『白猫』とかのことですか？」

「そう。一方、派生っていうのは、『お菓子』みたいに派生語を作る語形成のこと」

「省略は何となく分かります。『パーソナルコンピュータ』を『パソコン』にするようなものですよ」

「そうだね。ちなみに日本語の省略語は一般的に4モーラになるものが多いよ。高校や病院のように2字漢語が4モーラになることが多いから、日本人にとって4モーラというのは座りのいい数なの。それでカタカナ語でも4モーラになるよう省略されることが多いの」

「なるほど」

「ちなみに頭字語も省略の一種だよ」

「International Phonetic Alphabet で IPA でしたっけ。国際音声字母」

「よく覚えてたね」

こずえちゃんの頭を撫でる綺夢。彼女は恥ずかしそうな様子で下を向いた。

綺夢の手は白くて小さくて柔らかそうだ。

いいなあ……僕も撫でてもら——いやいや、何を考えとるんだ、僕は。

ぶんぶんと首を振った。

「逆形成と混成というのがよく分からないんですが」

「逆形成っていうのは逆成ともいうの。例えばタイプライターっていう機械が昔あったよね。あれは typewriter という名詞が先にできたの。その後、『typewriter という名詞があるなら typewrite (タイプライターで打つ) という動詞もあるはずだ』という考えのもとに、typewrite という新たな単語が生まれたの。こういうのを逆形成というんだよ」

「逆形成は合成に比べると頻度が高くありませんわね」乙女が追補するかのよう唱える。「けど、日常的にも逆形成を見ることができます。『ハンバーガー』という単語はドイツのハンブルグという都市の名から来ているんですが、ここから『チーズバーガー』や『フィッシュバーガー』などという単語ができました。こういうのも逆形成の一種ですわ」

「なるほど。それで混成というのは……？」

「形態と意味が似てる2つの語の部分同士が合体して新しい単語ができることだよ。例えば怪獣のゴジラはゴリラとクジラという2つの語が混ざってできたものなの」

「それが混成ですか」

「かばん語ともいうね。混成は意外なところに潜んでる。『やぶく』というのはゼロから作られた動詞に見えるけど、実は『やぶる』と『さく』が混成してできたものなの」

「そうだったんですか！ 思わぬ伏兵ですねっ」

驚くこずえちゃん。僕もそれは初耳だった。

「混成の長所は合成に比べ、語形を短くできる点。ドイツ語のように合成好きな言語だと、単語がものすごい長さになり、話すのが大変になってしまう。

逆に混成の短所はもとの単語がなんだったのか、何と何を組み合わせたのか分かりにくくなり、単語を覚える際に覚えづらいという点」

「ええと、結局合成と混成のどちらが良いんでしょうか」

「どちらが優れているか、言語学は答えを出さないよ。ただ、わたしは個人的には混成のほうが好きだけど」

「どうしてですか」

「覚えるのは一度だけど、その単語を使うのは一生でしょ。だったら最初に苦労して覚えたほうが後で使うときに楽だから」

「なるほど……」

「ただ、形態論的に見れば混成より合成のほうが頻度が高いから、まあ俗な言い方をすれば合成のほうが人気のある語形成なんだろうね」

ベンチの前のゲーム機に人が集まってきてうるさくなった。

「場所を変えようか」

僕は彼女たちを誘導し、外の喫茶店へ行った。

雨も降ってないし空気も冷たくないで、テラスで飲むことにした。綺夢はフレーバーティーを、乙女は緑茶を、こずえちゃんはカフェラテを頼んだ。

綺夢はカップをテーブルに置くと、「これはカップです」と言った。皆、何のことかと首をかしげる。

「ねえ、わざわざ『これはひとつのカップです』なんていう言い方する？」

「しないな」

「でも英語ではするよね。This is a cup. 必ずカップの数が単数か複数か言わなければならない」

「ああ。英語では可算名詞の数は常に示す必要があるからな」

「カップが2つ以上あれば、cups としなければならない」

綺夢はマドラーで紅茶をかき混ぜた。

「ああ、今度は文法範疇、文法カテゴリーですわね。語を形成する原理の分類のことです」

緑茶をすすり、乙女が補う。

「文法範疇？ 綺夢さん、それってどんなものがあるんですか」

「格、定性、人称、数、極性、態、時制、相（アスペクト）、法（ムード、モダリティ）、性などがあるよ。この辺は彼のほうが詳しいんじゃないかな」と僕に水を向ける。こずえちゃんは綺夢の言葉を一生懸命メモに取っていた。

「格というのは名詞の持つ文法的な意味を示すものだ。

ラテン語において homo は『人は』という意味になり、これを主格という。hominem だと『人を』という意味になり、これを対格という。hominis だと『人の』という意味になり、これを属格という。同様に homini だと『人へ』という意味になり、これを与格という」

「英語の he, his, him, his みたいなものですか？」

「そう。he は主格。his は属格——学校だと所有格と習ったね。him は対格——学校だと目的格と習ったね。英語も代名詞は屈折して格を持つ。日本語の場合、格は格助詞で示す」

「あつ」ポンと手を叩く。「なるほど、だから『が』とか『を』のことを格助詞っていうんですね。中学のとき格助詞っていう術語を国語便覧で見て、なんでこんなネーミングなんだろうって不思議に思っていました。格を示す助詞だから格助詞なんですね」

彼女は長年の謎が解けたような表情を見せた。

「次に定性というのは、対象が限定されるかどうかを表す要素のことだ。

日本語では希薄な概念だが、英語でははっきりしている。英語の場合、There is a cat. The cat is on the desk というが、これを訳すと『猫がいる。猫は机の上にいる』となる。

日本語ではどちらも『猫』だが、英語では a cat と the cat というように区別されている。「確か英語だと、ある名詞が2回目に出てきたときは、もうその名詞が何のことか分かってるので a じゃなくて the を付けるんですね。だから2回目に出てきたときは the cat になってる」

「そう。もう既にそれが何であるか限定されていることを定性というんだ。the は定性を示す冠詞だ。一方、限定されていないことを不定性という。a は不定性を示す冠詞だ」

「ああ～。なるほど、だから中学のとき the は定冠詞で a は不定冠詞って習ったんですね」納得した顔のこずえちゃん。「もう、学校の先生ってなんできちんと術語の由来を教えてくださいないんだろ。格助詞にしても定冠詞にしても、きちんと説明してくれたほうが分かりやすいのに」

それは多分、そうするとかえって頭がパンクする学生が多いから、理屈抜きでとにかく覚えさせたほうが早いという理由だと思う。

「名詞の定不定って冠詞で表されるものなんですか？」

「ヨーロッパの言葉にはそういうものが多いね。フランス語も le, la, les といった定冠詞、un, une, des などの不定冠詞がある。

ただハンガリー一語などでは動詞を変化させて定性を示すことがある。例えば olvasok egy könyvet は I read a book という意味だが、olvasom a könyvet は I read the book という意味になる。読むという動詞は不定性の場合 olvasok だが、定性の場合 olvasom になっている」

「面白いですね。ところで、日本語には定性や不定性というのはないようですね」

「そんなことないよ」綺夢がフォローする。「主語と主題って知ってる？」

「主題は知りません」

すると横で聞いていた乙女がカバンから『オックスフォード言語学辞典』を取り出した。  
ドラえもんかよ……。

「主題とは、『ある特定の文脈において発せられた文が、全体として述べようとしている事柄に相当すると考えられる、文の一部についていう』とあります」

「うーん、辞書の定義っていつもよく分からないんですよ」

「まあ関係各所から非難を受けないよう厳密な定義をしたがるから、分かりやすさを犠牲にしちゃってるんだよね」苦笑を浮かべる綺夢。「分かりやすく説明するとたいい『それは違う。厳密にはこうこうで〜』という風に文句言われちゃうから」

「でも、それで理解できないんじゃ無意味です！」

こずえちゃんの主張は初学者としてもっともだった。細かい点で洩れがあってもいいからまずは理解させてほしい。

「要するに文中で問題になっている話題のことだよ。『日曜日に行けません』という文だと、『日曜日』がこの文の話題の中心でしょ。『僕は大丈夫です』の場合、話題の中心は『僕』だよ」

「ああ、その説明なら理解できます。要するに主題は日本語だと『は』で表されるものことですね」

「まあとりあえずはそういう理解でいいよ」

「さて、主題については理解できたようだね」僕は話を戻す。「助詞の『は』は主題を示すが、主題は話題を表す以上、不定だと困る」

「まあ、不定なものが話題になるわけじゃないですもんね。知らないものは話題にできない」

「そう。だから『は』は基本的に定的なものとともに使われる。一方、『誰』というのは意味上必ず不定だから、定的なものを要求する『は』と一緒に使うことができないんだ」

「そういえば『誰が』とは言えても『誰は』とは言えませんもんね」

「このように、日本語でも定性や不定性が見られることはあるんだ」

「なるほど」

「次は人称だね」

「それはいくらなんでも分かります。一人称が話し手、二人称が聞き手、三人称がその他ですよ」

「そう。人称は代名詞などで示されるが、動詞で人称を示すということもある。例えば He plays tennis における plays は主語の人称が三単現——三人称単数現在形——であることを示すだろ」

「はい」

「主語の人称によって動詞が変化するのはドイツ語やフランス語にも見られる。イタリア語の場合、動詞を見れば主語の人称が分かるから、主語は省略されることもあるくらいだ。

例えば持つという動詞は avere だが、主語が一人称単数 io (私は) の場合、ho になる。従って Ho una amica italiana. といえば『私はイタリアの女友達がいいます』という意味になる。一々主語の io を述べる必要はないんだ」

「主語が省略されるとなると、もはやイタリア語では動詞が人称を示していると言っても過言ではありませんね」

「数については既に触れたね。英語では本が2冊以上あれば books のように s が付く」

「ですね」

「日本語や中国語や韓国語ではこういうことはないけど、フランス語やドイツ語では英語と同じように数を示す必要がある。フランス語で一冊の本は un livre だが、複数冊になると des livres という風になる」

「数って面倒ですよ。一個って分かりきってるのに一々付けなきゃいけないんですもん」

「でも、数が分かりきっていない場合は困らないかい？ 日本語は数があいまいだから、単数が複数か判断できない場合が多々ある。『古池や蛙飛び込む水の音』という句は知ってるね」

「それはもちろん」

「じゃあこのカエルが何匹か考えたことは？」

するとこずえちゃんは考え込んだ。

「そういえば……何匹なのでしょう。考えたこともありませんでした」

「一匹かもしれないし、複数かもしれない。日本人にすら分からない。というか、ふつうの日本人はこのカエルが何匹かすら考えない。言語が物の見方に影響を与えているね」

僕の最後の言葉を聞いて、綺夢はなんだか嬉しそうな顔をした。まるで「明察！」とも言いげな顔だ。僕は特に気にせず続けた。

「この句を英訳したとき、訳者はたいそう困ったそうだよ。色々な訳者がこの句を翻訳して、たいていは a frog で訳してるんだけど、中には frogs と訳した人もいる」

「英語は常に数を気にするので、日本語を英語に訳すときは単数が複数か曖昧になっているところについて考えなきゃいけないんですね」

「そう。あと、数が文法範疇にあるということは、必然的に名詞に可算不可算という概念が付いて回る。これが意外と便利なんだよ」

「ええ〜」如実に渡る。「あたしにはややこしいだけなんですけど」

「例えば fire は可算かな、不可算かな？」

「火は数えられないから不可算です」

「実は fire には可算名詞の用法もある。火自体は数えられないけど、火事は数えられるよね。火事は a fire と表現することができる。不可算名詞を可算名詞にするだけで別の概念を作ることができる。火事という新たな単語を覚える必要がないんだ」

「なるほど。使いようによっては便利ですね」

ようやく納得したようだ。

「ちなみに世の中には双数という面白い概念もあるよ」綺夢が付け加える。「単数、双数、複数というように、1、2、それ以上を表す言語があるの」

「なんで2までを特別視するんですか」

「人体なんかがそうだけど、2つで1組のものが多いからじゃないかな。例えば目、耳、手、足などはすべて2つで1組でしょ」

「確かに……」

「印欧祖語には双数形があったとされているよ。面白いことに、双数は時代とともに廃れていく傾向にあるね」

そういえば僕が学んだ言語でも双数を持つ言語があったな。古代ギリシャ語などがそうだった。

双数は時代とともに廃れる傾向があるのか。僕がやった言語を観察すると、確かにそうになっているように思える。

「次は極性だけど、これは僕は聞いたことがないな」

綺夢に投げる。

「要するに肯定と否定のことだよ。ある文や文の一部が真か偽かということを表す術語。英語だと肯定が無標で否定が有標だから、否定の際は not や no を付けて極性を表す」

「有標？」

首を傾げる僕に、綺夢は「あつ」という。

「そっか。音韻論と音声学のときに説明しなかったんだね。

たとえば10人中、男子が8人で女子が2人だとするね。このとき男女どちらかに性別を区別するためのバッジを付けるとしたら、貴方はどうする？」

「そりゃ人数の少ない女子にバッジを付けるさ。そのほうが合理的だからな」

「そうすると女子にはバッジという標識が付き、男子には何も標識が付かないことになるよね。これを文字通り有標と無標というの。より数が多く頻度が高いほうが無標になるよ」

「つまり無標っていうのはデフォルトのことか」

「まあそうだね」

「ところで態っていうのは分かる？」

綺夢がこずえちゃんを見る。

「中学でやった受動態とか能動態のことですよ。受け身の文が受動態で、ふつうの文が能動態っていう……」

「そうそう。言語学ではヴォイス（ボイス）ともいうの。ほかにも中動態や、能格言語における逆受動態などがあるんだけど、とりあえずは能動態と受動態について知っていればいいよ」

「はい」

「あと、使役や可能などの表現も態に含められることがあるよ」

「使役や可能も、ですか？」

「うん。日本語の場合だけどね。助動詞の『れる・られる』は可能の意味で使われるから可能態を生じるし、『させ』は使役の文を作るから使役態を生じる。

助動詞のおかげで、日本語にはほかにも自発態や尊敬態などが存在するよ。ただまあ、初学者が覚えておけばいいのは能動態と受動態だけだね」

「時制は英語でやったから分かる？ 言語学ではテンスと呼ぶことも多いけど」



綺夢がこずえちゃんに問う。

「要するに過去とか現在とか未来のことですよね」

その言葉を受け取った僕は口を開く。

「簡単にいえばそうだけど、人間の言語は奥が深いよ。

コンゴ語には今日過去、昨日過去、遠過去という3つの過去形がある。

かと思えば中国語のように時制を持たない言語もある」

「えっ、中国語では過去のことが表現できないんですか!？」

「いやいや、そういう意味じゃない。過去にあったことを表現できない言語はない。ただ、動詞で時制を示さない言語があるというだけのことだよ。

『我 去 学校』といえば『私は学校へ行く』という意味だけど、『我 昨天 去 学校』といえば『私は昨日学校へ行った』という意味になる。動詞『去(行く)』自体が変化することはなく、『昨天(昨日)』という副詞が過去であることを示している」

「ああ、なるほど。そういうことですか」

「次はなんでしたっけ……」先ほど取ったメモを見るこずえちゃん。「あ、相か」

「相はアスペクトということが多いね」綺夢が紅茶をひとすすりする。「簡単に言えば、行為がどの段階まで進んでいるかを示すものだよ」

「行為の段階……？」

「例えばある行為がもう終わっているとか、逆にまだ終わっていないとか、そういったことを示すのがアスペクトなの。

『雨が降っている』や『雨が降っていた』のように『ている』が付いている場合は、まだ雨は止んでないよね。行為がまだ終わっていない段階だから非完結相というの。

一方、『雨が降る』や『雨が降った』のように『ている』がない場合は完結相になるの」

「アスペクトで重要なのは動作が完了しているか否かなんですか」

「ほとんどの言語でそうだね。特にロシア語などのスラブ語で顕著だよ。

ただわたしは論理的に考えれば最低でも行為には5つの段階があると思う」

珍しく綺夢が特論を述べだした。

「まず行為に及ぶ前の段階。

次に行為が開始する段階。

続いて行為を行なっている途中の段階。

そして行為が完了した段階。

最後に行為の結果が残存している段階」

「論理的で客観的な区分ですね」

「どの言語もこれらのアスペクトに相当する表現は可能なの。述語のアスペクトとして表さなかったとしても、色んな言い回しを駆使することで同じ文意を表すことができる。

アスペクトに関しては個別言語ごとに術語が定まっているくらいがあるね。IPA みたいにあまねく言語に統一的な、客観的で論理的なアスペクトの体系を制定すればいいと思うんだけど……」

自分の主張に自信がないのか迷いがあるのか、綺夢はふいに口ごもる。

「まあとにかく、アスペクトについては行為の段階を示すものという理解でいいよ。あ、ちなみに行為の段階でなく行為の反復などを指す場合もあるから注意してね」

「次は法だね」綺夢はメモを見る。「ムードとかモダリティともいうんだけど、これは分かる？」

僕は首を振る。

「文が表す出来事が事実か否かとか、聞き手に対する態度とかを表すものだよ」

「あ、直説法、命令法、接続法（仮定法）、希求法、条件法、禁止法とかのことか」

「そうそう。語学をやっているとモダリティより『～法』のほうが詳しいよね」

「直接法とか命令法ってなんですか、先輩」

「印欧語に見られる法の一種なんだけど、例えば直接法っていうのは話者が事実をそのまま語る場合に用いられる動詞の活用をいうんだ。I play とか He plays の play や plays がそうだね」

にしても、英語だと法を説明するのが難しいな。

「フランス語で『行く』は aller というんだけど、主語が『あなた』の場合は tu vas となるんだ。主語が『あなたたち』の場合は vous allez となり、主語が『私たち』の場合は nous allons になる」

「フランス語……ですか」

多少面食らっているようだが仕方がない。

「英語だと you go, we go だからどれも go だけど、フランス語の場合は vas, allez, allons と変化する」

「面倒くさいんですね」

「はは……。で、英語の命令法——学校では命令形って習ったっけ——はどうやって作るんだっけ？」

「え？ 確か主語を省いて動詞の原形を置くんですよ。goで『行け』みたいに」

「そうだね。でもフランス語の場合、『あなた』に命令する場合はvas、『あなたたち』に命令する場合はallez、『私たち』に命令する場合はallonsになる。これが命令法」

「『私たち』に命令することってできるんですか。だってそれって自分たちのことですよ。自分に命令するってヘンじゃないですか」

「要は英語のletsだよ。『～しましょう』っていう意味」

「ああ、なるほど。うーん、フランス語の場合は命令法を作るのが厄介なんですね」

「一方、接続法とは勧告、命令、禁止、願望、後悔など、願われたことや考えられたことを述べる法のことだ。英語では馴染みがないが、フランス語などにはある」

「英語の場合は実質仮定法として教えられることが多いですわね」という乙女の言葉に僕は頷く。

「ああ、仮定法なら分かります」

こずえちゃんは理解したようだ。

「法についてはそのくらいで十分かな」綺夢は右上を見て、一人頷く。「さっき法はモダリティともいうと言ったけど、厳密にはモダリティは法性といって、法とは異なるの」

「ただ、法と同義で使われることがあるというだけですわ」補う乙女。

「モダリティとは、話している内容に対する話者の確信度や心情を表すものことだよ。」

『きっと雨が降るだろう』という文では、『雨が降る』という事柄に対する話者の推測が「きっと～だろう」という句によって表されてるよね。この部分がモダリティなんだけど、「きっと～だろう」は事柄に対するモダリティなので、対事モダリティというの。

一方、『楽しいね』とか『良いよ』の『ね』や『よ』は事柄に対するモダリティじゃなくて、聞き手に対する話者の心情を示しているでしょう？ こういうのを対事モダリティに対して、対人モダリティというの」

「モダリティには事柄に対する対事モダリティと、聞き手に対する対人モダリティとがあるんですね。分かりました」

気付いたら飲み物がなくなっていた。時計を見るともう7時になっていた。来たときにはまだ夕方だったのに、もう暗い。どうりでテーブルの上のメモが見づらいわけだ。

「そろそろ帰らないとな。みんな、門限は何時だ？」

「わたしは普段家にいるから門限っていう制度自体がないんだけど、そろそろ帰らないとお母さんが心配するかな。夕飯もあるし」

「私は遅くなると先程メールでお手伝いさんに伝えておきましたわ」

「あたしは門限9時です。もう帰り支度しないとですね。あ、でも最後の性について教えてください」

じつとこちらを見てくる。

「性か……。君は名詞に性別があるって知ったらどう思う？」

「名詞に性別……ですか？」

「例えばフランス語には男性名詞と女性名詞というのがある。少女を意味する *fille* は女性名詞だ」

「別に……そりゃそうだなって風にしか思いませんが。女の子が女性名詞っていうのは当然なんじゃ……。男性を意味する単語は男性名詞なんでしょう？」

「ああ、男を意味する *homme* は男性名詞だ。じゃあ、猫を意味する *chat* が男性名詞だというのはどう思う？」

「メス猫でも男性名詞なんですか？」

「メス猫を表す *chatte* という女性名詞もあるにはあるが、ふつうオスメス関係なく *chat* という」

「犬はどうなってんですか」

「犬は *chien* といい、男性名詞だ。メス犬も含まれる」

「なんだかヘンですね」

「もっと面白い例もある。ヒバリはフランス語で *alouette* といい、女性名詞だ。 *L'alouette chante* で『ヒバリがさえずる』という意味になる。ところがヒバリでさえずるのはオスだけだ」

「へえ、面白いですね！」

「更に、生きてない物にまで性があるとしたらどう思う？」

「え、あるんですか？」

「ああ。太陽は *le soleil* で男性名詞、月は *la lune* で女性名詞。ペアになるものは片方が男性で片方が女性ということがまあある」

「太陽が男性で月が女性というのは何となくイメージに合いますね」

「ところがドイツ語では太陽は *die Sonne* といい、女性名詞。そして月が *der Mond* といい、男性名詞。フランス語と逆なんだ」

「え、独仏で性別が食い違ってるんですか。覚えるのが大変そうですね」

「そう、独仏では名詞を覚えるときには名詞の性まで覚える必要があるんだ。ちなみにドイツ語には男女に加えて中性名詞というものもある」

「中性名詞は生きてないものに使うんですか？ あ、違うか。太陽が女性で月が男性ですもんね……」

「面白いことに、少女を意味する *das Mädchen* は女性名詞でなく中性名詞だ」

「それは少女がまだ大人の女性になってないからですか？」

「まあそういうのは暗記法としては役に立つが、実際には接尾辞の *-chen* が付いているからだよ。 *-chen* が付くものは中性名詞になると決まっているんだ」

「うわあ」こずえちゃんは頭を抱えた。「英語の名詞を覚えるのでさえ大変なのに、独仏では名詞の性まで覚えなきゃなんないなんて……」

「独仏なんてまだマシなほうだよ。スワヒリ語には少なくとも6種の性があるし、パンツ一諸語にはそれ以上の性を区別する言語もある」

「う……頭が混乱してきました」

「こずえちゃん、君は性が多いというだけで難しいと拒絶反応を起こしてないかい？ これは僕の持論だけど、性という概念は助数詞に通じるものがあると思うんだ」

「助数詞って、一個、一本、一冊、一匹みたいなやつですね」

「そう。性が何十種類もあるってことは、名詞が何十種類に分類されるってことだけど、それって日本語の助数詞や中国語の量詞と何が違うのかな？」

「言われてみれば……」

「日本語はあらゆる可算名詞を助数詞で数えることができるけど、これって性が何十個にも分かっているようなものじゃないかな。僕は助数詞は性の延長線上にあると思う」

綺夢の反応が気になったので横目で見てみたが、「うんうん」と聞いていたので恐らくそういう考え方もアリなのだろう。

「それにしても、すっかり暗くなりましたわね」

乙女が空を見上げて言う。6月といえど、この時間帯になると少し肌寒い。薄着のせいもあるだろう。制服は基本装甲が厚いので寒くないだろうが、僕の私服は簡素な格好なので少し風が冷たい。

「そろそろ帰らないとな」

「先輩方、今日のパベリも楽しかったです！ ありがとうございますっ！」

こずえちゃんはペコリとお辞儀をすると、僕たちのカップを片付けだした。後輩という自覚があるのだろう。気を利かせてちょこまかとよく動く。

僕らは喫茶店を後にして、駅まで戻っていった。そしてそのまま駅で散会となった。

今日は3人の私服も見れたし、形態論についても勉強できたし、有意義な日だった。

あれ……そういえば僕の高校生活どころか人生まるごと振り返っても、こんなに女の子に囲まれることなんてなかったような気がするぞ。しかも全員折り紙つきの美少女ときたもんだ。

なんだこれ、どういう風の吹き回しだよ。

3人の姿が脳裏に浮かぶ。

外国の血が入った妖精のような綺夢。絵に描いたような美少女だ。絵画が動いているといっても過言ではない。性格も優しく穏やかで愛らしい。

一方、大和撫子をそのまま具現化したような乙女。美しい黒髪の精霊のようだ。性格も大人しく、親切で愛想が良い。

そして元気いっぱいなこずえちゃん。明朗快活で礼儀正しく可愛らしい。思わず妹にしたくなるような子だ。

——改めて思う。なんだこれ、どういう風の吹き回しだよ。

ありえない、まさにハーレム、マジヤバイ。美人だけとか、マジありえんし。

気付いたら見事な五七五七七調で呟いていた。合計31モーラ。きっと自分は前世で名のある歌人だったに違いない。

## <武道会>

それから半月ほど、僕たちは言語学部で毎日のようにバベっていた。

7月に入り、梅雨も去った。

今日は武道会だ。クラス代表が集まって剣道やら空手やらといった競技を行う。

僕？ もちろん予選落ちだ。いや、決して弱いとかそういうことではない。単に本気を  
出さなかつただけだ。ほら、選ばれても面倒なだけだから。

こずえちゃんは運動神経がいろいろ、空手の選手に選ばれていた。

乙女は運動が苦手なので、予選の段階で落ちた。たまたま選抜時の体育の時間が合同授  
業だったので、乙女の試合は間近で見れていた。お嬢様らしく柔道で華麗に投げ飛ばされて  
「きゃっ」とか言っていた。

一方綺夢はというと、なんと柔道以外の種目、すなわち剣道、空手、弓道で選抜された  
という。最初聞いたときは面倒事を押し付けられたのかと思ったが、どうやら乙女曰く子  
供のころから武道を嗜んできたそうだ。

「乙女っ」

女子の競技は午後の部だった。僕は武道館に入ると、見物していた乙女に声をかける。

「あら、ごきげんよう」

ごきげんようとかリアルに言う乙女にもだいぶ慣れた。最初の頃はお嬢様キャラに戸惑  
っていたが、今ではこれでこそ乙女だと感じるようにまで昇華した。適応って怖いね。

「綺夢とこずえちゃんの様子は？」

「みゆちゃんは全種目で勝ち進んでいますわ。次は剣道の決勝です」

マジかよ……。どこの化物だよ。

「あの華奢な体のどこにそんな力が」

「あら、腕力だけならみゆちゃんは私以下ですよ」

「え、そうなのか？」

「体格は私のほうが上ですからね。みゆちゃん、155cmの42kgしかありませんから。腕  
相撲なんかだと私のほうが強いのですが」

「それを埋めるだけの技術があるってことか」

剣道の決勝が始まった。綺夢の相手は女子剣道部の部長。主将だ。流石にこれは勝てるはずがないだろう。

防具を着けているので速巻きには綺夢だということが分からないが、垂れに書いてある初月の名でどちらが綺夢か判別できる。

両者は蹲踞し、やがて試合が始まる。試合時間は5分。延長の場合は更に3分。3本勝負で、時間内に2本取った者の勝ちだ。

主審が合図を出す。

「えやあああ！」という声とともに剣道部主将が綺夢に襲いかかる。しかし綺夢はすんでのところでヒラリと躲し、「小手！ 面！」と涼やかに声を上げ、目にも留まらぬ速度で相手の小手と面を打った。

「面有り！」

声が上がリ、旗が立つ。

「え……。い……。いま綺夢、主将から一本取らなかったか？」

くすくす笑う乙女。「みゆちゃんは武芸が達者ですから」

いや、そういうレベルじゃないような……。

仕切りなおしてもう一本。今度も綺夢からはかからない。主将は奇声を上げて打ちまくるが、綺夢はすべてをいなす。そして合間を縫って「胴！」を入れた。

「胴有り！」

そして二本先取した綺夢に対し、主審は「勝負有り！」と宣言した。沸き立つ観客。

いや、ありえないだろ！

まさか剣道部主将を破るとは……。

5分ほどして綺夢が防具を脱いでやってきた。次の空手に備えて道着を着ている。

「あ、見に来てくれたの？」

「お、おう……。す、凄いんだな、綺夢」

「そんなことないよ」

えへへと笑う。

こうして見るとただの可愛い小さな女の子なんだがなあ……。

「次は空手ですわね」



トーナメント表を見る。準決勝戦は綺夢とこずえちゃんの対戦だった。こずえちゃんも運動は得意なようだ。

「先輩！」

こずえちゃんが道着姿でやってきた。

「やあ、次は綺夢とだってね。2人とも、怪我しないようにね」

「はいっ！ あ、綺夢さん、本気で来てくださいね！」

「お……お手柔らかに」

綺夢はあくまで自信なさげだ。流石に女の子に空手は無理だろう。

ルールを見てみると、女子だというのに寸止めの伝統空手ではなく、顔面以外打突OKのフルコンタクト空手だった。

試合時間は3分。その間に攻撃可能とされた各部位に「突き」「蹴り」「打ち」等を決め、相手を3秒以上ダウンさせるか、戦意喪失にさせた場合、「一本」勝ちとする。

何考えてるんだ、この学校は……。

改めて参加しなくて良かったと思うばかりである。

やがて準備が整い、試合が始まった。主審の合図とともにこずえちゃんが「やあっ！」と声を上げ、綺夢に左ストレート・右ストレート・右ミドルのコンボを遠慮無く叩き込んだ。

綺夢はそれを軽くないすと、掌底でこずえちゃんの顔面に牽制の一手を入れた。顔面でも牽制なら反則ではない。こずえちゃんが視界を奪われてひるんだ瞬間を見逃さず、綺夢はスパンとローキックを入れた。

入った角度があまりに良かったのだろうか、こずえちゃんはガクッと脚から崩れ、そのまま立てなくなってしまった。綺夢の一本勝ちだった。

「おいおい……一発KOとかありえないだろ」

どう見てもそんなに威力があるようには見えなかった。そもそも綺夢の細い脚からそんな力が出るはずない。

「みゆちゃんは人体の急所を突くのが巧いんですわ」

いや、それ、歩く殺人兵器だから……。てゆうかどこの武術の達人だよ。

2人がこちらにやってくる。

こずえちゃんはまだ歩きづらいうで、「完敗です……」と言っていた。

綺夢は「ごめんね、痛かったでしょ？」と彼女の心配をしていた。

なんか、おい、激しくシユールな光景だな。

続いて決勝戦。

なんと相手は図書委員兼生徒会会計の村上蛭。7月までに部員を4人集めなければ廃部になると言い出した張本人だ。

「決勝の相手は綺夢さんですか」道着をまとった蛭がやってくる。この子も見た目ふつうのメガネっ娘のくせして決勝まで登ってくるとか、どういうことだよ。

「いっそ賭けますか。私が勝ったら夏休みを待たずして言語学部は廃止ということで」

「あの……それ、わたしに何もメリットがないような……」

おずおずと言う綺夢。

「そういえば綺夢さんたち、図書館蔵書の三省堂『言語学大辞典』を私物化してますよね。今まで誰も使わないから目溢してましたけど、あれ、返してもらえませんか」

「えっと……あの……わたしたちはあれをよく使うので……その」

「よく聞こえませんが?」

「い、一冊5万円もするので、ウチの部費で全巻揃えるのは無理だよお……」

「じゃあ私に勝ったら看過してあげましょう」

「え、いいの?」

「その代わり、私が勝ったら言語学部は廃部ということで構いませんね」

「う……うん」

びくびくしながら綺夢が頷く。蛭はニッとすると、「顔面なしのルールですが、今回はアリで行きましょう」と言った。

「え、それは先生たちに怒られるんじゃない……」

「大丈夫、主審には私から言っておきます。生徒会の権力をなめないでください」

なんだよウチの生徒会。どこの圧力団体だよ。

「わ……わかったよ……」

自信なさげな綺夢。

蛭が去る。

「綺夢さんっ、絶対あんな人倒しちゃってくださいね！」

こずえちゃんが綺夢の手を掴んでぶんぶん振る。

「う……うん。がんばる……」

綺夢は相変わらず自信なさげだ。

やがて試合が始まり、主審が開始の合図をする。

綺夢は相変わらず動かない。

蛭は慎重に遠巻きからローキックを放ってくるが、綺夢はうまく膝を上げてガードする。間合いを詰めると、蛭は宣言通り顔を狙って打突を加えてきた。綺夢はすんでのところでそれを捌く。観客が一斉にどよめくが、審判は反則宣言をしない。本当に話を通したようだ。

……どんだけウチの生徒会は力持ってるんだよ。

綺夢は相手の攻撃をすべて捌くと、「やっ」と言ってなんと相手の足を踏んだ。

足を踏まれて蛭は急激につんのめる。綺夢はすかさず蛭の懐にもぐりこむと、下から打ち上げるように蛭の顎に掌底をあびせた。

「——っ！」

蛭は顎を打ち抜かれ、倒れこみそうになる。脳が揺さぶられたのか、体がふらついている。

「えああっ！」

蛭は声を張り上げて回し蹴りを放つが、綺夢はそれを躲すと、間合いに入って逆に蛭の首にハイキックを食らわせた。綺夢の体はゴムのように柔軟で、低身長にもかかわらず、上から下に打ち下ろすようなハイキックだった。

さすがの蛭もこれにはたまず、そのままぐらっと床に倒れこんだ。

こうして綺夢の勝利が確定した。

そして乙女が一言。

「言語学大辞典、全巻ゲットですわね」

蛭はそのまま保健室に運ばれた。

綺夢はこっちにやってくると、「蛭ちゃん、大丈夫かなあ……」と呟いた。

いや、お前が言うなや。

あれだけ自信なさげにしておいてあの見事な蹴りはなんなんだと問いたい。

ふいに一句浮かんだ。

——いやよいよよもハイキック。

……絶対に綺夢だけは怒らせないようにしよう。

綺夢は本当に忙しく、そのまま袴に着替えて弓道場へ向かった。

弓道は決勝戦まで進んでおり、綺夢の相手は先に来ていた。

「あっ！」

思わず小さく叫んでしまった。

そこにいたのはあの2年のロボ子、もとい市ノ瀬丁だった。

「遅いぞ、初月」

袴を身にまとった丁はやけにりりしく見えた。相変わらずの無表情だが。

「ごめんね、丁ちゃん」

小動物のように謝る綺夢。どっちが先輩だか分かったものじゃない。

ウチの弓道のルールはこうだ。早矢乙矢の2本を3組、計6射射って、より多くの中させたほうが勝ち。射位からの的までの距離は28mで、典型的な近的場だ。今回は完全な個人戦となる。

「初月、私が勝ったら言語学部の部室をコンピュータ部の物置としてもらい受けるぞ」

「え……それはちよつと……」

「アナタにもメリットを作ろう。アナタが勝てば言うことをひとつ聞いてやる」

「ほんと？　じゃあ一度わたしたちとバベってくれない？」

「バベる……？」

「脳科学とか認知言語学についてお話したいって思ってたの」

「ああ、いいだろう」

丁が弓を引く。まず早矢を軽々的中させ、続いて乙矢も的中させた。

「ねえ、丁ちゃん。丁ちゃんほどの知識があれば、わたしたちと一緒に研究することで、もっと高みに行けると思うの」

綺夢も軽々と早矢乙矢を的中させる。

「言っただろう。旧態依然のアナタたちの言語学に興味はないと」

続く2射も中てる丁。

「確かに丁ちゃんは脳科学の知識が凄いよ。でも、言語学は認知しか扱ってこなかったじゃない」

綺夢も負けじと2射を中てる。

「言語学の先端は認知にある。私は自分の専門分野を深く掘り下げるだけだ」

引き離すように2射中てる丁。これで皆中だ。

「うん、丁ちゃんの凄さは知ってる。専門分野を掘り下げるのもいいと思う」

綺夢も2射中て、皆中を出す。

勝負は射詰へと持ち込まれた。ここからは外した者が除かれる。

丁と綺夢は恐るべき集中力でその後の6射も中ててきた。

「しつこいな、初月」

疲労からか、初めて丁が苛立ったような表情を見せる。しかし綺夢は相変わらず真面目くさった顔で喋り続ける。

「丁ちゃんには包括的な言語学の知識が欠けてると思うの」

「なんだと……？」

「それを補えばもっと凄いレベルにまで到達できると思う」

「……くだらない」

丁が矢を放つ。が、惜しいところで矢は安土へ。

「わたし、もっと丁ちゃんとお話したいな。だから今度遊びに来てね、言語学部に」

綺夢はにこりとすると、正鵠を射た。

こうして射詰は綺夢の勝利で終わった。

僕は袴姿の綺夢に見とれていた。

剣道、空手、弓道。全てで優勝。そんなことがありえるのか。

あの華奢で中学生のような幼児体型に、どうしてこんなことが……。

まるで夢を見ているみたいだった。

ともあれ武道会は綺夢の三冠で幕を閉じた。

武道会の翌日、僕はいつものように放課後、言語学部へと足を運んだ。

途中、階段で丈士に会い、呼び止められた。

「よお。昨日の初月、凄かったな」

「ああ……お前さんも見てたのか」

「見てた見てた。ついでにいやあ、口半開きで初月をぼーっと見つめるお前さんの姿もな」

「な……そんなこと」

「ありや大変な女だぜ。何もかもができすぎてる。出来杉君ならぬ出来杉ちゃんだ」

「何が言いたい」

丈士はニヤツとする。

「付き合ったらさぞ大変だろうな。浮気なんかした日にゃ、骨折られるんじゃないか？」

「何言ってんだよ、バカ」

「よく言うぜ。顔に書いてあるぞ、初月のことが気になって仕方ないって。

だから言語学部に出入りしてるんだろ？ 風の噂で聞いたぜ、今月までに部員4人確保しないと廃部だって。甲斐甲斐しいじゃないか、お前さん。いや、それとも下心かな」

「別に、そんなんじゃないよ。綺夢はふつうに友達だよ」

「じゃあ哲学乙女は？ 付き合うならあいう子のほうがいいぜ。大人しいし綺麗だし、少なくとも喧嘩しても骨は折られない」

「そんな目で見てないよ。乙女も良い友人だ」

「じゃあなんだっけ、1年のあの子。こずえちゃんだっけ？ あっちが本命か。お前さん、案外気が多いんだな」

「バカ言え。彼女は大切な後輩だ」

「おいおい」呆れたように両腕を広げる。「あれだけの美少女に囲まれてといて、まだどれがいいのか選べないのかよ。幸せなやつだな」

「だから、そんな目で見てないんだってば！ もうお前さん、帰れよ！」

「へいへい、じゃあな。ま、せいぜいリア充生活を楽しんでください」

丈士は手をぶらぶら振りながら去っていった。

リア充？ この冴えない僕が？ 何を言ってるんだ。あいつのほうがよっぽどリア充じゃないか。

僕はため息を吐くと階段を上り、部室へと向かった。

部室は階段を上ってまっすぐ歩いた突き当りにあるのだが、階段を上った瞬間、異変に気付いた。

綺夢と乙女とこずえちゃんか部屋の外で立ち尽くしていたからだ。

何やってんだろ……。

いつもなら中に入って談笑しているのに、今日はなぜか入り口のところで屯している。

「みんな、何やってんの？」

ひょいと後ろから首を伸ばすと、3人が不安げな表情で僕を見てきた。

「ん？」

なんだ、この重い空気は。

「これ……」

綺夢が暗い顔で入り口のポスターを指さす。

そこにはバベルの塔のポスターが貼ってあった。

——ただし、いつもどおりではなく、別のポスターが……。

「なんだこれ……？」

言語学部を象徴するバベルの塔のポスターの代わりに、新しいポスターが貼られていた。

それは意外なことにバベルの塔だった。ただし、こちらは崩れていない。天にも届く高さの巨大な塔の絵だった。

イメチェンしたのか？ いや、そんなわけないよな。明らかに3人とも困惑している。ということは誰かが貼ったということになる。

「これ……いつの間に？」

綺夢は首を振る。

「さっきここに来たら貼り替えてあったの」

そしてポスターの左下を指さす。そこには謎のサインがしてあった。

——Anti Babel

「アンチ……バベル……？」

「多分、これを貼った人の署名だと思う」

「どういう意味だ？」

「……」

僕らは頭を抱えた。

「嫌がらせかな……。それにしても手が混んでるな」

「うん……」

「完成したバベルの塔に、アンチバベルの署名……。これは何を意味するんだ」

以前乙女が語ったバベルの塔の神話を思い出してみる。

確か人類はもともとひとつの言葉を話していたが、天にも届く塔を作ろうとして神の怒りに触れ、言葉はバラバラに分けられた。おかげで意思疎通ができなくなった結果、塔の建設は失敗に終わった。

バベルの塔の崩壊は言語の多様性の象徴だ。ではこの完成したバベルの塔が表すものとは何か。

「……言語の……統一？」

いや、それだと意味が通じない。もっと相手の意図を読み。

言語学部は言語の多様性があるからこそ成り立つ活動だ。もしバベルの塔が崩壊しなかったとしたら？ そうしたら言語は多様性を失い、言語学も語学も恐らく発展せず、言語学部は存在しなかった。

「そうか……」

分かった。これは言語学部のレーゾンデートルそのものを否定する行為なのだ。アンチバベルとは言語の多様性への反感、すなわち言語学部のレーゾンデートルに対する反駁。

「これは言語学部の存在意義に対する挑戦なんだな……」

僕の呟きに綺夢は重苦しく頷いた。

「どうやら言語学部に存続してほしくないと考えている者がいるようだ」

心当たりならいくつかある。

「僕が思うに——」

その言葉を遮るように、綺夢は「止めよう」と言った。

「……何をだ？」

「犯人探しなんて、したくない」



「でも、これは明らかな挑戦だろ。言語学部なんて廃部にしてしまえっていうメッセージだ」

「そんなの」綺夢はスカートの裾をきゅっと握った。「何度も言われてきたから、慣れるもん……」

「綺夢……」

「いいの。ことを荒立てたくないだけ。別に部室を荒らされたわけでもないし。それに、これくらいの嫌がらせは……来るだろうと思ってたから」

ふと昨日の武道会のことがいらい起こされる。確かに綺夢はあまりに目立ちすぎた。反感を買っても当然なほどに。

「入ろう。お茶でも飲んで話そうよ」

綺夢ができるだけ表情を取りなして鍵を開けた。

「中はこれと違って変わった様子はないですね」

こずえちゃんがぎよろぎよろと見回す。確かに綺夢の言った通り、中は一切荒らされていなかった。

となると鍵を持っていない外部の者の犯行と考えられる。鍵は綺夢が持っているし、予備の鍵は職員室にあるからおいそれとは持ち出せない。

それにしても嫌われたものだな。いくら弱小なマイナー活動だからといって、ここまでの扱いを受けて黙っていなければならないのが我慢ならない。

乙女がレモンティーを淹れる。

「それにしても手の込んだ嫌がらせですわね」

含みのある言い方だった。

「どういう意味だ、乙女？」

「単にウチに嫌がらせをしたいだけなら、ポスターを破るなり捨てるなりすればいいだけですわ。アンチバベルを名乗り、バベルの塔の神話を応用するなんて、よくもまあ考えたものです」

「それだけにたちが悪いな。それなりに頭の回る人間の仕業ということだ。

単にポスターを破っただけなら昨日の武道会での活躍を妬んだ者による衝動的な犯行とも考えられる。だがこれは明らかに計画的だ。しかもそれなりに知識のある人間による犯行だ」

「ねえ」一瞬、綺夢が珍しく苛立ったような声を上げる。「もう……やめようよ」  
その冷やかな気迫に押され、僕たちは話題を変えることにした。

「そういえば金田一春彦の『日本語』は面白かったよ」

僕の話題転換にこずえちゃんも空気を読んで乗ってくる。

「ですね。あの後貸していただいた鈴木孝夫の『ことばと文化』も面白かったです」

「井上京子の『もし「右」や「左」がなかったら』もためになったな」

乙女がレモンティーを置く。「『ことばと文化』が面白かったなら、今井むつみの『ことばと思考』もお気に召しまして？」

「ああ、あれもよかった。新書だから読みやすいしな。言語学や心理学の専門的な知識がなくてもわりとスイスイ読めた」

言語学の話題になったからか、綺夢は元気が出てきたようで、「類型論で推薦した松本克己はどうだった？」と身を乗り出してきた。

「『世界言語のなかの日本語』は比較言語学や類型論を綺夢から習っていたから、どうにか読むことができたよ。あれは読んどくべき一冊だと思う」

「松本克己といえば、『世界言語への視座』も面白かったです。ただ、今のあたしにはまだまだ難しく、何度も読み返してどうにかこうにかこなした感じですけど」

「不思議と綺夢や乙女が教えてくれたところはよく分かるんだよな。だけど、まだ教わってない部分は分からないことが多い」

「例えばどんな部分？」綺夢が眉を上げる。

「ええと、統語論……とか言ったかな。なんかそういう用語が出てくるんだが、正直よく分からない」

「あ、私もですっ」こくこく頷くこずえちゃん。

「じゃあ今日は統語論についてバベろうか」

「統語論は文の構造を扱う言語学の一分野だよ」

「語の構造を扱うのが形態論だったな。統語論は文の構造か。文法とは違うのか」

「狭義の文法は統語論を意味するから、そういう意味では当たりだよ。

まず文の種類だけど、単文、重文、複文は分かる？」

僕は首を傾げる。

「複数の語からなるものを句(phrase)といい、『主語＋述語』を備えた構造を節(clause)というの。

節がひとつしかない文のことを単文という。複数の節が対等な関係で結ばれたものを重文という。そして主節に対して従属節があるものを複文というの」

「例がほしいな」

「単文は『男の子が来た』。重文は『男の子は来て、女の子は去った』。複文は『男の子が来たと女の子は知った』だよ。『男の子が来た』が従属節で、『女の子は知った』が主節だね」

「なるほど。英語の I think that の that 以下は従属節だから、こういう文は複文になるわけだな」

「ところで文の種類には平叙文、否定文、疑問文、命令文、感嘆文があるけど、これは大丈夫？」

「その辺は中学生でも知ってるだろう。平叙文は肯定文ともいうな。感嘆文は How beautiful you are! (あなたはなんて美しいのでしょうか!) のような文のことだろう」

「目的語や補語や修飾語句について改めて説明する必要はある？」

「いや、学校でやったとおりだろう。I am fine は SVC という文型で、この C(complement)が補語だ。目的語の場合は I like soccer のような SVO の文で、この O(object)が目的語に当たる。

修飾語句っていうのは a cute little girl の cute や little といった形容詞のこと。ほかに、I saw a girl who is crying における関係詞節の who is crying も修飾語句だな」

「学校文法はちゃんと押さえているみたいだね」

呟く綺夢に、こずえちゃんも横で頷く。

「じゃあ直接構成要素分析はどうかな」

「それは……知らないな」

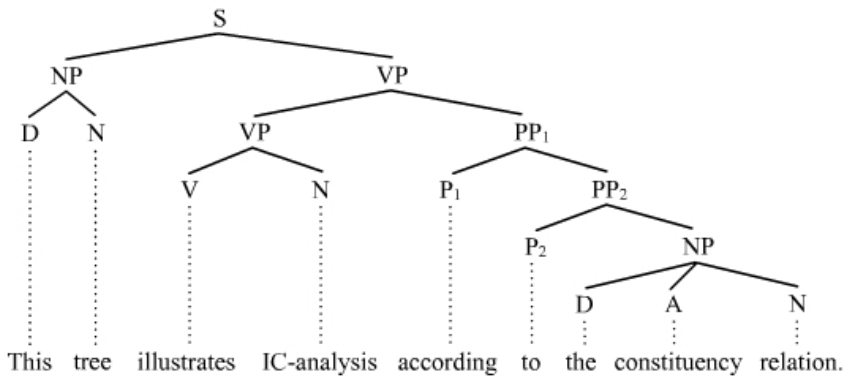
「IC 分析ともいうんだけど。ある構造体を直接構成要素に細かく分けていくことだよ」

「構造体？」

「語や形態素の集合のことだよ。『そして私は勉強を始めた』という文全体も構造体だし、『私は勉強を始めた』だけ切り取っても構造体だし、『私は』だけでも構造体となる」  
 「直接構成素とは？」

「ある構造が中に含んでいる構成素を直接構成素というの。先の例だと、例えば『私は』という構造の中に『私』という直接構成素が入っていることになるね」

「句構造文法における直接構成素分析を見てみようか」と言って綺夢は図を書きだした。



出典：[http://en.wikipedia.org/wiki/Immediate\\_constituent\\_analysis](http://en.wikipedia.org/wiki/Immediate_constituent_analysis)

- S: Sentence (文)
- NP: Noun Phrase (名詞句)
- D: Determiner (限定詞)
- N: Noun (名詞)
- VP: Verb Phrase (動詞句)
- V: Verb (動詞)
- PP: Prepositional Phrase (前置詞句)
- P: Preposition (前置詞)
- A: Adjective (形容詞)

例文和訳：この木は構成要素関係に従って直接構成素分析を説明する。

「『この木は構成要素関係に従って直接構成素分析を説明する』という文があるよね。それをまず『この木は』という名詞句と、『構成要素関係に従って直接構成素分析を説明する』という動詞句に分けるの」

「そしてそれを最終的に前置詞だ名詞だ動詞だと個々の品詞ごとに分けていき、各単語ごとの文法的関係を明らかにするわけか」

横で見ていたこずえちゃんは理系なのでこういう分析は口に合うのか、「なるほど……」と呟いていた。

「文は線条性を持った一次元体だが、こうやって樹形図のような表を利用して二次元的に捉えると、単語と単語同士の文法的な関係が見て取れるな」

形態論が語の構造を扱うのに対し、統語論が文の構造を扱うという意味がようやく分かった。なるほど確かに文の構造を明らかにしている。

「ところでサラッと流したが、句構造文法ってのはなんだ？」

これには乙女が答えた。

「phrase structure grammar といって、アメリカの言語学者チョムスキーが提唱した概念ですわ。チョムスキーは生成文法という理論の主要人物です」

「生成文法？」

「それにはまず構造主義から説明しないといけませんわね」

哲学乙女の眼が楽しそうに光る。

「構造主義とは、狭義には1960年代に登場して発展していった20世紀の現代思想のひとつです。広義には、ある現象に潜在する構造を抽出し、その構造によって現象を理解したり制御したりするための方法論を意味します」

「よく分からんな」

「ソシュールは覚えておいでですか」

「言語学を通時言語学と共時言語学に分けた人だろ」

「現代思想としての構造主義はソシュールの言語学を祖とします。その後、レヴィ＝ストロースによって普及することになりました。

生成文法以前は構造主義言語学が主流でした。ヨーロッパの構造主義言語学と区別してアメリカ構造主義とも呼ばれます」

「構造主義言語学……」

「その方法論は、得られた音声データから音韻論、形態論、統語論の記述を行うというものでした。音素や形態素の分類が主な目標でした。これがアメリカ構造主義ですわね」

「スイス人だったソシュールから、時代の転換点がアメリカに移ったわけか。なぜだ？」

「それまでの言語学は主にヨーロッパの言葉を研究していたわけです。

ところが新大陸では印欧語とは系統的に無関係なネイティブ・アメリカンの言語が次々発見されていきました。

西洋人にしてみれば、自分たちとは全く異なる価値観やシステムを持った言語を分析することになったわけです。

そこで客観的に相手の言語の構造を記す方法論が台頭してきたんです」

「なるほどな。自分たちの旧来の常識が通じない相手を分析するのだから、偏見抜きで相手の持つ構造を客観的に分析する必要性が出てきたわけか」

「色々な言語を分析した結果、アメリカ構造主義では多くの言語を対象としたデータが膨大に得られたわけです」

「ふむ……」

「ときに生成文法は合理論ですが、アメリカ構造主義は経験論に分類されます」

「合理論と経験論ってなんだ？」

「なんだか話が言語学から哲学になってきたが、言語学の発展は哲学の発展とともに歩んできたのだから仕方ない。

それにしても哲学を噛み砕いて話すときの乙女は生き活きとしている。

「合理論とはこういう考え方ですわ。人間は生得的(生まれながら)に理性を持っている。人間は基本的な観念・概念の一部を持つ。あるいはそれらを獲得する能力を持つ」

「よく分からんが、とにかく先天性を重視する考え方というわけだな」

「対して経験論では、人間は経験を通じて様々な観念・概念を獲得すると考えます」

「こっちは逆に後天性を重視するわけか」

「今述べた経験論はロックやヒュームに代表されるイギリス経験論です。合理論はイギリス経験論に対し、大陸合理主義と呼ばれます」

「で、アメリカ構造主義は経験論を引き継いでいて、生成文法はその逆に合理論の立場を取るわけか。相反するんだな。

「アメリカ構造主義にはどんな論客がいたんだ？」

「ブルームフィールドやサピアなどが有名ですわね」

綺夢の飼い猫のサピアか。ということは綺夢は経験主義の立場を取る人間なのだろう。

……ん？ それって生成文法に対して批判的な立場ということじゃないか？

「生成文法ってのはいつ頃できたんだ？」

「チョムスキーが1955年に The Logical Structure of Linguistic Theory、1957年に Syntactic Structuresなどを発表したのが契機ですわ」

「となると1960年代から発展した構造主義と並行して発展していったんだな。

で、チョムスキーってのはいったい何を主張したんだ」

「彼は言語能力(competence)と言語運用(performance)という概念を導入しました。

言語能力とは、ある言語の話者が持つ適切な言語形式を産出する能力のことです。

言語運用とは、言語能力を利用して実際に産出された言語形式を指します」

「それって要は言語知識と発話みたいなもんだろ。ソシユールのラングとパロールに似て  
ないか？ ラングとパロールは言語知識と発話みたいなもんなんだろ？」

「確かに似てますわね。ただソシユールのラングはその言語を扱う人々の頭の中にある共  
通の言語知識を指していて、社会的側面が強いんですの。対してチョムスキーの言語能力  
は話者個人の頭の中にある言語知識について言っているの、個人的側面が強いんです」

「社会と個人の差か」

しかしそれだけだとチョムスキーの何が特徴的なのか分からない。乙女はこちらの意図  
を察したかのように続けた。

「チョムスキーの提唱する生成文法とは、全ての人間の言語に普遍的な特性があるという  
仮説なんです。彼はその普遍的特性は人間が持って生まれた生物学的な特徴だと述べまし  
た。これを言語生得説といいます。つまり言語は人間の生物学的な器官と捉えたわけです」

「それはまた大きく出たな。要するに言語は人間の本能だと言いたいわけだろ。経験論と  
真っ向から対立するな」

やにわに胸が熱くなった。経験論の構造主義に対し、合理論の生成文法をぶつけてきた  
わけか。さあ、宗教戦争が始まるぞ。

「チョムスキー以前の言語学では、ソシュールの学説やブルームフィールドなどのアメリカ構造主義を基盤とする構造主義言語学が主流でした。言語形式を観察・記述する経験論的なアプローチですわね。

これに対し、生成文法は言語を作り出す人間の能力やメカニズムに着目したわけです。この過程で彼は言語形式を産出する言語能力と、実際に産出された言語形式である言語運用を区別し、前者を研究の焦点としたわけです」

「ああ、それでようやく言語能力と言語運用を区別した理由が分かった。個々人の脳に入っている言語能力について集中的に分析するために、2つの術語を作って研究対象を分離したわけだな」

「それで、経験論の構造主義と合理論の生成文法の戦いはどうなったんだ？」

「どちらかが片方を論破したというほどのことは起こらなかったんですが、生成文法がその後時代の寵児になったのは否定できませんわね。生成文法はその発達過程で統語論や機械翻訳にも影響を与えています」

「ふむ。まあ結局は合理論と経験論の宗教論争だろ。そう簡単に決着が付くわけないよな。興味のない外野からすれば巨人ファンと阪神ファンの不毛な争いみたいなものだ」

「かもしれませんわね」苦笑する乙女。

「生成文法ってのは、そのチョムスキーってのが一人で頑張ってるのか？」

「いえいえ、もちろんそんなことはありませんわ。著名な論客でいえばピンカーなどがあります。『言語を生み出す本能』は一度ご覧になったほうがよろしいかと」

「生成文法ってのは今も時代の最先端なのか？」

「今はどちらかという認知言語学が主流じゃないかな」黙っていた綺夢が口を開く。「生成文法は言語学史としてひととおり学んでおくべきだと思うけど、なかなか大変だよ」

「なんで？」

「チョムスキーは自分で出した理論を後からあれこれ変える人でね。何度が体系が大きく変わったので、『言うことをころころ変えて節操がない』と言われることがあるよ」

「それは批判なのか、非難なのか」



「非難じゃないかな。理論を変えてはいけないという決まりはないからね。でもあれだけ体系を大きく変えれば節操がないと言われるのは仕方ないと思うよ。実際、初期の理論と最新の理論では大きな違いがあるからね。生成文法を読み解くのは大変な作業だよ」

「ふうん。なあ、ところで哲学乙女はどっちの論客なんだ。経験論？ それとも合理論？」

「私は哲学の観測者として中立な立場を取りますわ」

「そっか。綺夢はどうなんだ、言語学徒として」

「私はサピア、ウォーフ、池上嘉彦のファンだから、経験論と認知言語学寄りかな」

案外綺夢はさくっと立場を明らかにした。

「認知言語学っていうと……あれか、市ノ瀬丁の専門分野か」

「そうだよ」

「認知言語学ってのはいつごろから出てきたんだ？」

これには乙女が答える。

「認知意味論の大家であるレイコフ、認知文法の大家であるラネカー、格文法やフレーム意味論のフィルモアなどを鑑みると、おおむね70年代ないし80年代ごろから隆盛してきたと考えるのが妥当ですわね」

「……にしても、直接構成素分析からずいぶん話が哲学に逸れたな」

「それが出てきた歴史を鑑みると、避けて通れない話題だったんですわ」

「だろうな。学問は通時的に発展していくもので、学術用語はそれに伴って生まれるものだからな。

他に統語論や生成文法で知っておくべき基本的な術語はあるか」

綺夢に目を向ける。

「じゃあ順に説明しようか。まずは文法性と容認性。『私は彼を愛する』は文法的に容認されるけど、『は私する愛を彼』はどう？」

「日本語じゃないな」

「文法的に見ておかしい、つまり容認されない文のことを非文というの。非文は通常\*印を文頭に付けて表されるよ」

「文法性や容認性についてはネイティブが『おかしい』か『おかしくないか』で判断することができるんだな」

「まあね。ただ、Colorless green ideas sleep furiously というチョムスキーによる有名な文があつてね……」

「なんだそれ。『色のない緑色の考えは猛烈な勢いで眠る』だと？ どういう意味だ」

「意味はないの。むしろ意味がないことに意味があるの」

「どういうことだ」

「この文って文法的にはおかしくないでしょ。でも意味的にはおかしいよね。この文を容認できるかって言われるとネイティブはどう思う？」

「あー……文法的には容認できても意味的には無理だなあ。そうか、容認性って文法性と必ずしも一致しないのか」

「そうだね。じゃあ次は普遍性と多様性。人間の言語は多様だけど、よく見ると普遍性がある。

例えばすべての言語において、上唇と下の歯で閉鎖を作って調音する音をもつ言語は生理的に不可能ではないか存在しない。

また、全ての言語は名詞と動詞の区別を持つことも分かっている。

こういうのを絶対的普遍性というの」

「絶対じゃないものもあるのか」

「例えば摩擦音が一つしかない言語では、その摩擦音は [s] であるという普遍性があるのだけど、これは非絶対的普遍性というの」

「なぜ？」

「ハワイ語では唯一の摩擦音が[h]だから。例外がある以上は絶対的普遍性とはいえないよね」

「確かに」

「ほとんどの言語で平叙文の末尾を上昇調で発音すると yes/no 疑問文として機能するというのもまた非絶対的普遍性のひとつだね。タイ語などが例外だから」

「ああ、確かにタイ語はそうだった」

「それと、普遍性が条件式みたいになっているものもあるよ。例えば『ある言語が VSO（動詞-主語-目的語）という語順を持つなら、その言語では形容詞は名詞に後続する』というようなのがこれに当たる」

「言われてみれば、確かにアラビア語の形容詞は名詞に後置されるな」

「普遍性はどちらかというと類型論の成果だから、類型論のところで説明しても良かったかもしれないね」

綺夢は一度背伸びをしてから続ける。

「ほかに知っておきたい基本的な術語は表層構造と深層構造かな。」

表層構造とは、具体的な発音や文字を除いて、選んだ語彙や語順が現実の文と同じ抽象的構造のこと。要は実際に表出された文のことだと思えばいいよ。

深層構造とは、現実の発話の基底にあつて文の意味を規定すると想定され、表層構造よりいっそう抽象的な構造のこと。深層構造を変形することで表層構造が導き出され、異形同義文や同形異義文の関係を説明するのに役立つ」

「うーん、つまり僕たちが普段目になっている文は表層構造で、その表層構造は深層構造を変形してできたものということか？」

「そう」

「例がほしいな。分かりにくい」

「例えば『私は桜を見たい』という表層構造は、〔ワタシガ〔ワタシガサクラヲミル〕タイ〕という深層構造に、同一名詞句消去変形などといったいくつかの変形規則を適応することで得られるの」

「なるほどな。表層構造と深層構造の例は分かった。深層構造を変形させることで、実際の文である表層構造を得るわけか」

「深層構造を理解すれば、異形同義文や同形異義文を分析できるよ」

「異形同義文や同形異義文ってなんだ？」

「異形同義文は、形は違うけど意味は同じ文のこと。例えば能動態と受動態がこれに当たる。『彼は彼女を愛する』と『彼女は彼に愛される』は形は異なるけど意味は一緒でしょ。」

同形異義文は He took my picture みたいに、文は同じだけど複数の意味を持つ文のこと」

「え、それ複数の意味があるのか」

「『私が所有している写真』とも『私を写した写真』とも取れるでしょう？」

「ああ、なるほど」

「深層構造——」と綺夢が喋り出したとき、コンコンとドアがノックされた。

「はい？」と綺夢が応じると、蛍が入ってきて「下校時刻ですけど？」と仁王立ちした。

時計を見る。もうそんな時間か。

流石生徒会、抜け目ないな。

てゆうかこのメガネっ娘、昨日の試合で見たけど何気に空手の使い手なんだよな。怒らせたら僕じゃ太刀打ちできそうもない。ここは逆らわないのが賢明だ。

「あ、ごめんね。すぐ帰るから」と言って綺夢は荷物を片付けだした。

そしてその日はそのまま散会となった。

部室を出たとき、僕はアンチバベルと名乗る人物が貼った謎のポスターに目をやった。

きつと剥がしたところでまた次の嫌がらせをされるのだろう。前のポスターもどこに行ったか分からないし、これを剥がすと部室内の様子が窓から透けて見えてなんとなく嫌だし、このままにしておいたほうがマシか。

綺夢をチラ見する。やはりポスターのことが気になっているのだろうか。でも表には出さないし、ポスターを見ようもしない。女は何を考えているのか分からなくて怖いところがある。

ポスターを剥がしたらアンチバベルの挑戦を受けるということを意味するわけで、そうになったら嫌がらせがエスカレートするかもしれない。このまま大人しく様子を見て、相手が増長するようなら対策を考えるというのが大人な対処法だろう。

僕はなんとなく後ろ髪を引かれる思いのままその場を去った。

<意味論・諸論>

それから一週間ほどが過ぎた。アンチバベルは特にあれ以上何もしてこなかったが、ポスターは貼り替えられたままだ。言語学部の象徴である崩壊したバベルの塔のポスターの所在はいまだに分からない。

僕はいつものように言語学部の部室へ向かった。すると入り口のところで乙女とこずえちゃんが立っていた。

「あれ、綺夢はまだか？」

鍵は綺夢が持っている。

「まだ教室みたいですね」

「何かあったのかな」

学年首席が補修を受けさせられるはずもない。それに、風邪で欠席なら乙女に連絡が入っているはずだ。

「行ってみましょうか」

乙女が提案する。

「そうだね」と言って綺夢のクラスへ向かった。

綺夢は3年の文系特進クラスだ。僕の教室とは離れている。

教室に行くと、外から綺夢の姿が見えた。放課後の教室で、ただ一人机の前に立ち尽くしていた。

ガラッとドアを開けると彼女はハツとした顔になった。慌てて何かを後ろ手に隠す。

「綺夢、どうしたんだよ。部室にも来ずにこんなところで一人で」

「な……なんでもないよ」

「今、何か隠したよな。何だ？」

「べ、別に何でもないよ……？」

完全に挙動不審だ。男は嘘を吐くとき目をそらし、女は嘘を吐くとき相手の顔を見るというが、綺夢はあっさり挙動不審になるので嘘がバレやすい。

「綺夢……見せてみろ」

「なんでもないから……」首を振る。だが明らかに顔色が悪い。

僕はつかつかと歩み寄ると、綺夢の腕を取った。武道会で優勝した少女のわりには、あまりに腕力が弱かった。子供のように無力だった。

綺夢は手に一枚の絵ハガキを持っていた。

「なんだこれ……」

よく見ると、そこには例の完成したバベルの塔の絵が印刷してあった。

左下には Anti Babel の署名。

——そして赤い文字で「私の邪魔をしないで」と手書きされていた。

見たところ女の子の文字だが、怨念が滲っているように感じられる。

「これ……どうしたんだ」

「……机に入ってたの」

綺夢はようやく重い口を開けた。

「いつ入れられたんだ」

「気付いたのはさっきだけど、今日は教室を離れてないから、多分朝のうちかと」

僕は拳を握った。

嫌がらせがエスカレートしてやがる。ショックで部屋に来れず、しばし呆然とさせてしまうほどに。

アンチバベルの正体は誰だ。

綺夢を邪魔に思う人物。そして言語学部の存在を否定する人物。該当者は何人かいた。

「なあ、綺夢。僕が思うに犯人は——」

すつと僕の唇に指を当ててくる。

「止めよう。……ね？」

「あ……ああ」

でも本当にそれでいいのか。こんな脅迫状みたいなものまで送りつけられて黙っていいのか。

「せつかく皆ここに来てくれたし、もう教室には誰もいないから、今日はここでバベろうか」

「まあ……綺夢がそう言うなら」

僕たちは適当に机を合わせて座った。

「そういえば意味論についてはまだ話したことがなかったね」

「意味論？」

「貴方は意味の意味について考えたことはある？」

「意味の意味……」

なんだかテレビの中のテレビのような、無限回廊を思わせる不思議な言葉だった。

「今回は意味について考えてみようか。言語学では意味論で扱われるよ。」

意味論とは、自然言語の意味を扱う下位領域のことだよ」

「まあネーミングどおりだな。だが、定義が漠然としすぎている。もう少し詳しく頼む」

「意味論とは統語論の単位である語、句、文、それと談話などが持つ意味を研究する分野ということが出来るよ」

「談話？」

「文章や会話のように首尾一貫性を備えた複数の文の連なりのこと。要するに一定の話題を持った文の集まりだね」

「意味論には言語学の潮流ごとにいくつかの理論がありますわ」

乙女が口を開く。

「例えば成分分析はアメリカ構造主義の意味論です。語彙素の意味である意義素を、ちょうど音素を弁別素性で規定するように、意味成分によって規定します」

「意義素と意味成分が分からんな」

「一つの語や形態素（語彙素）が担う意味を意義素といいます。音素が音韻論における基本的な単位であるのと同じく、意義素は意味論における基本的な単位といえます。」

ちなみに意義素という術語は学者によって微妙に意味が異なります。ブルームフィールドと服部四郎のように」

すると綺夢が口を挟む。

「そもそも言語学の術語の多くは学者によって微妙に定義が異なることが多いよ。言語学って少しでも定義の言葉尻が違うだけで、猛口撃を受ける学問だから気を付けて。」

わたしたちの教えてきた基本的な定義だって、誰かしらから見れば口撃の対象となるかもしれない。

でも安心して。わたしたちが教えてきたのはどれも言語学の参考書など、出典があるものだから、決して間違っただけのものではないの。色んな概説書の中から汎用性があるなど感じただけの定義を教えてきただけだから」

「そうか。それは助かるよ」

「本当に言語学って少しの言葉尻の違いを捉えて口撃される学問なんだよ」

綺夢はため息混じりに言う。

「大半は瑣末な違いによる定義合戦にすぎないから、そういうくだらない論争に巻き込まれないように注意してね。特に学派の違いによる定義の食い違いは単なる宗教戦争だから関わらないのが賢明だよ。

わたしたちはできるだけ一般的な定義を紹介してるけど、貴方が今後読む本次第によってはわたしたちが教えた定義と違う定義がなされている術語が出てくるかもしれないね」

「分かった、気をつけるよ。てゆうか言語学って案外くだらないことやってるんだな」

「だ・よ・ね！」

僕が肯うと、綺夢は強く賛同してきた。乙女は苦笑して続ける。

「音素が弁別素性の集まったものと考えられるのと同じように、意義素はより原始的な要素の集まりと考えることができます。このような原始的な要素のことを意味成分ないし意味素性や意義特徴といいます。

そしてこのような意味の分析方法を成分分析というのです」

「うん……」

難しいな。

「私やみゆちゃんはふだん意味素性という術語を使うことが多いですね。音声素性と並行して考えることができるので」

「そうか。定義は分かったが、例がほしいところだな」

「/m/という音素が[+子音 +鼻音 +両唇音]といった音声素性を持つという話は覚えておいてですか」

「ああ」



「これと同じようなやり方で、例えば『父』は[+人間 +男性 +世代1 +直系]と表すことができますよね」

「となると『母』は[+人間 -男性 +世代1 +直系]という意味素性を持つというわけか」

「はい。そうやって意義素——ここでいう親族名詞を意味素性で分析することを成分分析といいます」

「成分分析はアメリカ構造主義の意味理論なんだよな？ じゃあほかにも意味理論があるのか」

「はい。生成意味論や認知意味論といった意味理論があります。認知言語学を提案したレイコフは生成意味論を研究していました。認知言語学は生成文法を批判する最大の勢力になっています」

「なるほど」

「認知意味論とは認知言語学による意味研究のことです。こちらはレイコフの『レトリックと人生』、『認知意味論』、スウィーツァーの『認知意味論の展開』、タルミーの『Toward a Cognitive Semantics』といった理論を指すことが多いです」

「その辺は丁ちゃんが強いよね」と綺夢が口を挟む。

「意味論と一口に言っても色々なんだな」

「じゃあ今度は具体的に意味について考えてみようか。貴方は意味というのは常に一定で移ろわないものだと思う？」

「いや、言葉の意味は時とともに変化するものだろう」

「意味が変化する要因は何だと思う？」

「うーん、時間とか、かなあ……」

「それもあるね。意味の変化の要因としては、歴史的原因、言語的原因、社会的原因、心理的原因などが挙げられる。

歴史的原因というのは要するに時代の流れのことだよ。昔は車といえば人力車を指したんだけど、今では自動車のことを言うよね。科学や技術の発展に伴い、こうした意味の変化は避けられない」

「だな。それはすぐ思いつくよ」

「言語的原因というのは、修飾語の意味が被修飾語に吸収されること。あるいはその反対。例えば capital city（首都）のことを一々 capital city って言う？」

「ふつうは capital で済ますな」

「ということは被修飾語の city の意味が修飾語の capital に吸収されているよね」

「ああ、確かに」

「社会的原因というのは、一般社会と特殊な社会の間における言葉の移動のこと。例えば普請ってどういう意味の言葉だか知ってる？」

こずえちゃんに手を向ける。

「建物を建てること……ですよ」

「じゃあ貴方は元の意味を知ってる？」

「仏教における寺の建立のことだろ」

「そう。仏教という特殊な社会の言葉が一般社会での建築という意味に変化している」

「ああ、なるほど。確かに社会的原因による意味の変化だな」

「心理的原因とは、その名の通りなんだけど……。例えばドイツ語で熊ってなんていうか知ってる？」

「das Bär だろ」

「じゃあその語源は？」

「ああ、それなら分かる。茶色とかそういう感じの意味だったと思う。かつて熊は恐れられていて、熊という名前を呼ぶと本当に熊が来るという迷信があったんだよ。それで人々は熊という言葉を使わないで、『例の茶色い奴』みたいな言い方に変えたんだ」

「明察。そういう心理的なタブーなんかから、褐色という意味の単語が熊という意味に変わっている」

「意味が変化する原因って色々あるんですね」感心したようなこずえちゃん。「意味が変化する原因は分かりましたけど、意味が変化するパターンはどんなものがあるんでしょう」

「良い質問だね。意味変化のパターンには、一般化、特殊化、上昇、下落などがあるよ」

「どれも聞いたことはありません」

「一般化っていうのは例えば『瀬戸物』などのことだよ。瀬戸物っていうのは陶磁器って意味だよ。陶磁器には色んな産地があるけど、尾張の瀬戸で作られたものがとりわけ有

名だったの。それでいつの間にか瀬戸物で陶磁器全般を指すようになった。こういうのを一般化というよ」

「ああ、現代でも商品名なんかでよくありますよね。入浴剤のことを代表してバスクリンと言ったりしますが、実際にはバブとかバスロマンとか色々あるわけですよ。でも日常生活ではバブとかもまとめて十把一絡げにバスクリンって呼んじゃうことがありますよね」

あるなあと僕は心中で賛同した。確かに一般化は商品名で多い気がする。

「そうそう。それも一般化だね。商品名の場合は商標なんかの問題があるからテレビで放送するときにはあえて入浴剤みたいな言い方をして商標を避けることがあるよね」

「はい、ありますね」

「一般化についてはよく分かったみたいだね。特殊化はその反対だよ。花見という言葉の『花』は何を指す？」

「桜ですよ」

「花見という言葉の本質を考えれば、梅を見たって構わないはずだけど、花見といえば桜を見ることを指すよね。花という広い概念の中で、桜という特定の植物を指している。花見に見られるこういう意味変化のパターンを特殊化というの」

「そういえばさつきから何か違和感があるなと思っていたのですが」乙女がふと呟く。「今日は教室なのでお茶が出せないんですよ。喉が乾きませんか？」

「確かに。僕、なんか買ってこようか？」

「あたしは大丈夫です、先輩」

「わたしも平気。乙女は？」

「私も平気ですわ。ただ皆さんが辛いかと思って」乙女はにこりとした。

「ええとそれで何の話だっけ。ああそうそう、上昇と下落、綺夢が話を再開する。「上昇は意味が良い方に変化する現象のこと。助長はもともと悪い意味で使ってたんだけど、今は助けるとか促すくらいの意味で使うことが多いよね」

「あ、それ古文でやりました。苗を早く生長させようと思った宋の人が苗を引き抜いて枯らしてしまったという話から来てるんですよ。だから本当は不必要な力添えをして、かえって害することを意味するんですよ」

「そうそう。ほかに卑近な例を挙げると、例えば『ヤバい』ってもともと『危ない』とか『よろしくない』という意味で使っていたんだけど、『このカレー、ヤバい』みたいに良い意味で使うようにもなったよね」

「はい。『このカレーはおいしい』という意味で使っていますね。

上昇は意味が良い方向に変化することなんです。じゃあ下落はその反対ですか」

「そう。例えば『貴様』ってどう考えても文字からすれば良い意味なのに、悪い意味で使うじゃない？ あれも元はちゃんと良い意味で使ってたんだけど、陳腐化するうちに丁寧さが足りなく感じられるようになっていって、ついには悪い意味にまで落ちてしまったの。これが下落ね」

「一般化、特殊化、上昇、下落……」

指折り数えるこずえちゃん。熱心だなあ。

——などと思っていると、彼女はチラリと僕を見てくる。僕は慌てて目をそらして綺夢を見つめる。

それにしても綺夢は凄いな、何でも知っている。こんな可愛い女の子が学年首席で運動もできるなんて、神様はずいぶんと不公平に人間を作ったものだ。

こずえちゃんは僕と綺夢を交互に見ると、黙って下を向いた。

「ほかに、比喩を用いた意味変化のパターンも知っておくといいよ」

「はあ、比喩、ですか」

綺夢の言葉にこずえちゃんが返す。心なしか、今こずえちゃんの言い方がつっけんどんだった気がする。しかし綺夢は特に気にした様子もなく続ける。

「具体的には隠喩、換喩、提喩などのことだね。認知言語学でよく出てくるから、こちらへんは押さえておいたほうがいいよ」

「お願いします」

「隠喩はメタファーともいうの。2つの事物に類似性が認められる場合に使われる比喩のこと。要するに喩えのことだね。

例えば、スターといったら本来星という意味だよ。だけどこれは売れてる芸能人などを指すこともあるでしょう。売れてる芸能人がキラキラ輝いているように感じられることから、星を意味するスターという語で喩えられている。こういうのをメタファーというの」

「そういえば隠喩は中学の国語でやりました。あたしは直喩の反対だと習いました。直喩は『まるで～のようだ』という比喩で、隠喩は『まるで～のようだ』を使わない喩えのことだと習った気がします」

「そうだね。次に換喩だけど、これはメトニミーともいうよ。2つの間に隣接性がある場合に使われる比喩のこと。

例えば『やかんが沸いた』というけど、よく考えれば沸いているのは『お湯』であって『やかん』じゃないよね。『やかん』と『お湯』は物理的に隣接性があるでしょ。だから『やかん』を以って『お湯』を示している。こういうのをメトニミーというの」

「隣接性は物理的に接触した2者の間にしかありませんか」

「メトニミーは、『原因、容器、材料、生産物』と『結果、中身、製品、生産地』との間で生まれるよ。『やかん』と『お湯』の場合は容器と中身のメトニミーだね。

『ブロンズ』は青銅という材料だけど、『等身大のブロンズ』というこれらはブロンズ像のことだから、製品を指すでしょ。これもメトニミーといえるよ」

「メトニミーにも色々あるんですね。最後の提喩ってなんですか」

「シネクドキーともいうんだけど、上位概念を下位概念で言い換えることをいうの。逆に下位概念を上位概念で言い換えてもいいよ」

「具体的には？」

「一般的な意味を表すのに特殊な意味の語を用いたり、全体を表すのに部分を表す語を用いたりする比喩のことだよ。また、その逆でもいい」

「例がほしいです」

「例えば『石』は一般的には『石』という意味を表すけど、文脈によっては『宝石』という特殊な意味になるよね。

また、『手が足りない』は『人が足りない』という意味だよ。『手』という人体の部分を表す語で『人』という人体全体を指している」

「なるほど」

こずえちゃんは頷いた。隠喩、換喩、提喩。それぞれメタファー、メトニミー、シネクドキーというのか。覚えておこう。

「やっぱり飲み物がないと落ち着きませんわね」

ぽつりと乙女が言う。

「だな。自販機でも行こうか」

僕らは教室を出て、1階の自販機コーナーに行った。各自ジュースを買い、横にあるベンチに腰掛けた。

乙女は僕らが飲み物を買って席に着くまで、飲み物に手を付けず待っていた。別に言葉に出しはしないが、ひとつひとつの所作がお嬢様然としている。

「乙女って丁重だよな」

僕が呟くとこずえちゃんが「そんなにテンション低くないでしょう」と言ってきた。

「え？」

一瞬何のことを言ってるんだか分からず戸惑ったが、すぐ「丁重を低調と勘違いしたんだ」と気付いた。

「いや、素行がいつも礼儀正しく丁重だよなってこと」

「あ、そっちですか」こずえちゃんは恥ずかしそうな顔をした。

それを見ていた綺夢が「同音異義語だね」と言った。

「日本語は同音異義語が多いから、漢字が見えない口語だと勘違いが多いよな」

「多くの語彙が漢字語だからね。その上漢字には読みのパターンが少ないのが問題。中国本土だと声調があるから同じ読みでも四声で4つに区別できるんだけど、日本語には声調がないから音読みのパターン数が減ってしまい、結果的に同音異義語が増えちゃうの」

「韓国語なんかもそうだな。あれも漢字語が多い。しかも文字にしたときも表音文字のハングルだから、どの漢字を使っているのか分からない。同音異義語の区別は文脈で判断するしかない」

「先輩、表音文字ってなんですか」

「平仮名、片仮名、ハングル、アルファベットみたいに、音を示す文字のことだよ。対して表意文字は漢字やトンプア文字みたいに、意味を示す文字のことだよ」

ふんふんとこずえちゃんが頷く。

「同音異義語が出たところで、同字異義語についても考えてみよっか」

「同音異義語の逆だな？ 同じ文字を書くのに意味が異なる単語か。これは英語や韓国語に多いよな。例えば pension は『年金』のほか『下宿屋』という意味がある。こういうのが同字異義語だ。同綴異義語といってもいいだろう」

「音や字が同じでも意味が異なる単語って結構あるんですね。そういえば意味が似ている単語ってなんて言いましたっけ」

「類義語だろ。synonym (シノニム)」

「ああ、それです。『少女』と『童女』のような」

「ちなみに逆は反義語で、antonym (アントニム) だ。対義語や反意語や反対語ともいうな。例えば『少女』に対しては『少年』がある」

「類義語や反義語はどの言語にもあるんですか」

「そりゃそうだよ。例えば韓国語だと少女は소녀 (ソニョ) で、少年は소년 (ソニョン) という。どちらも漢字語で、単にハングルで表音文字化しただけだよ。漢字にすれば少女と少年だ」

僕はメモにハングルを書いてみせる。

こずえちゃんはハングルのメモを見て、不思議そうな顔をしていた。

「あたし、ハングルってよく分からないんですよね。街中じゃよく見るのに。この入っているのはㄷという子音で、ㅏっていうのはㅏという母音ですか」

「明察」と綺夢の口癖を真似てみた。くすっと綺夢が横で笑う。

「韓国語の母音も日本語と同じ5つですか」

「いや、韓国語は母音が日本語より多い上、合成母音字まである。さらに子音で終わるCVC みたいな閉音節の単語も多いから、文法は似ても聞き取りは結構難儀だよ」

「そもそもハングルって正直読みづらいんですよね」頬を膨らませる。

「はは、彼らが平仮名や片仮名や漢字をやるよりは、僕らがハングルをやるほうがだいぶ楽だよ」

「アルファベットで書けばいいのに……」

まだぶつぶつ言っている。意外と頑固だな。

「アルファベットで書けないこともないよ。たとえばソウルは서울と書くけど、これはアルファベットだと Seoul と転写される」

「転写？」

「ある文字体系を別の文字体系に置き換えることだよ。ハングル→アルファベットみたい  
にね」

「ただ、Seoulだとセオウルって読みたくなりますね」

「転写先の文字数が足りないとそういうことが起こる。韓国語にはオに当たるのが2つほ  
どあるから、アルファベットに転写すると母音字が足りないんだ。

ハングルは韓国語を書くのに特化してるから、転写に甘えずハングルはハングルのまま  
覚えたほうが最終的には合理的なんだよ」

「そのようですね」

ようやく納得したようだ。

「そういえば韓国語といえば、これも日本語と同じく系統不明なんでしたっけ」

綺夢を向くこずえちゃん。

「うん、そうだよ」

「英語は印欧語族でしたよね。ほかにどんな語族があるんですか」

「そうだねえ」

綺夢は指折り数えだした。

「例えばアラビア語やヘブライ語などのセム語族。モロッコやアルジェリアで使われるベ  
ルベル諸語などのハム語族。

ほかに、中国語、タイ語、ビルマ語、チベット語などのシナ=チベット語族。これは印  
欧語族に続いて2番目に大きな語族だね。なんせ中国語が入ってるから。

あと、フィンランド語、エストニア語、ハンガリー語などのウラル語族。

それと、トルコ語やモンゴル語などのアルタイ語族」

「あれ、アルタイ語族って日本語との関わりがあるかもって言ってませんでしたっけ」

「うん、日本語はアルタイ語族の要素があるからね。rで始まる固有語がないとか、母音  
調和があるとか」

「母音調和？」

「同じか似たような母音を連続して使うことだよ。例えばお酒を飲んでへべれけになるっ  
て言うでしょ。へべれけって本来は『へべらか』となるのが筋なんだけど、母音調和して  
『へべれけ』になったの。heberaka→heberekeで、母音がeに統一されてるでしょ」



「へえ」感心したような声を出すこずえちゃん。

「それにしてもアルタイ語は東西に広いですね。モンゴルはともかくトルコってインドより西だから、もう地理的には印欧語族の圏内じゃないですか。それが日本語と関係があるかもしれないって、なんだか凄いですね」

「そうだね。もっと広いものもあるよ。マライ・ポリネシア諸語は西はマダガスカル島から、東はインドネシア、ミクロネシア、メラネシア、ポリネシアで話されてるの。オーストロネシア語族とも呼ばれるね」

「あ、これも日本語に影響を与えた可能性があるって言ってましたね」

「うん。日本語は恐らくアルタイ語族やオーストロネシア語族などの混合だと思われるからね。まあ、諸説あるけど」

「日本人の顔って北方系と南方系があるから、言語的にもなにかしら混ざってるんじゃないかっていう考えは納得できます」

綺夢は肯定も否定もせず続けた。

「あと、オーストロアジア諸語というのものもあるよ。南アジア諸語ともいって、ベトナム語、モン語、クメール語などが入る。

そのほかにアメリカ＝インディアン諸語、アフリカ諸語、ドラヴィダ諸語、コーカサス諸語などがある。まあ色々だね」

「日韓みたいに系統不明な言語って多いんですか」

「そうでもないよ。むしろ分布からいくと系統不明は珍しいほう」

「ほかにどんなのが系統不明なんですか」

「スペインとフランスの国境で話されているバスク語が有名かな。あと、日本の中にアイヌ語があるのも忘れちゃいけないけど、これも系統不明だね」

「言語って色々あるんですね……」

しみじみと呟くこずえちゃん。

「やっぱり文明の進んでいない民族の言語は単純だったり劣っていたりするんですか」

「そんなことないよ」苦笑する綺夢。「まず大前提として、現代言語学は言語に優劣を付けない」

「はい」大人しく頷くこずえちゃん。

「そして、後進国の言語は先進国の言語と同様に語彙が豊かで文法が複雑。

確かにIT用語とかに関していえば、後進国の言語の語彙は貧弱かもしれない。その代わり、そういう言語では植物の名前がやたら詳しくあったりというようなことがある」

「なるほど」

「あと文法に関していえばむしろこずえちゃんの想像とは逆で、言語というのは広まれば広まるほど、異言語と接触すればするほど単純化する傾向があるの。

例えば英語はかつてドイツ語とかと同じく名詞が格変化したりしてたんだけど、今では残ってないでしょ」

「ということは、変化しやすい言語と変化しづらい言語があるということですか」

「うん。ちなみに言語は変化するものだから、使われている限り、変わらない言語というのは存在しないよ。

話を戻すけど、あまり変化しない言語っていうのは、いわゆる保守的な言語のことだね。異言語との接触が少ない言語は変化が少ない傾向にあるよ。

例えばドイツ語やアイスランド語などは保守的だね。特にアイスランド語の基本文法は1000年間もの間ほとんど変わっていないの」

「1000年も！」

こずえちゃんは驚いて口を開けた。

「そんな昔から変わってない言語があるんだ……。

……昔といえば、最古の言語って何なんでしょう。というか、そもそも言語の起源って何なんでしょう」

こずえちゃんの頭は疑問の宝庫だ。

これには乙女が答えた。

「言語の起源は諸説あります。ただ、文献が残っていないので、どれも推測にすぎません。基本的なものとしてはワンワン説、プープー説、ドンドン説、エイヤコーラ説などがありますわね」

「面白いネーミングですね」

確かに乙女の口から出てくるような言葉ではなかった。

「ワンワン説は、動物の鳴き声の模倣が言語の起源ではないかとする説です。

プープー説は、驚きとか痛みとか喜びといった感情に起因する発声が言語の起源ではないかとする説です。

ドンドン説は、あらゆる物は共鳴振動を起こしており、それが何らかの形で言語に反映されたのではないかとする説です。やや分かりづらい説ですわね。

エイヤコーラ説は、人類が集団で作業をするときの掛け声が言語の起源ではないかとする説です」

「で、結局どれが本当なんでしょう」

「さあ」乙女はふふっと微笑んだ。

「さあ……って、言語学は言語の起源についてちゃんと調べようとはしないんですか」

「したいのは山々なのですが、文献がなさすぎて推測の域を出ないんですわ。あまりに色々な説が跋扈したため、1866年にパリ言語学会は言語の起源に関する論文を受理しないと宣言しました。言語の起源に関する研究が下火になったのはこれが契機ですわね」

「結局、言語の起源はよく分からないんですね……」

こずえちゃんは肩を落とした。

「言語の起源は分からない。最古の言語も文献がないので遡れない。日本語の系統も不明。言語学って分からないことだらけですね」

「まあ、わりと根本的なところが分かってない学問ではあるよね」綺夢が肯う。

「話は変わりますが、世界一難しい言語っていったい何語なんでしょう」

問うこずえちゃん。本当に次から次へと疑問が湧く子だ。

「言語学的に言えば、言語の絶対的な難しさは存在しないの。言語には相対的な難しさしか存在しないんだよ」

とはいえ、そのひとつひとつに即答できる綺夢も凄い。

「相対的な難しさ……ですか」

「例えば日本人にとって韓国語は語順も似ているし、漢字語もかなり共通しているから、比較的簡単といえる。一方、日本人にとって英語は語順から文字から単語から文化までまるで異なるから難しいといえる。フランス語も同様。

ただアメリカ人からすればフランス語は単語も共通しているものが多く、文法もそこそこ似ているから簡単。他方、アメリカ人からすれば日本語には漢字があるし、共通する

語も一部の外来語くらいだし、文法もまるで違うから難しい。しかも日本語学習者にとって外来語であるカタカナ語はむしろ難しいものと認識されることが多い(始末)

「つまり母語に似ている言語は簡単だけど、似てない言語は難しいということですね。何を母語とするかによって言語の難しさは決まるから、相対的な難しさしか存在しないということですね」

こずえちゃんは理解したようだ。

「そう。だからとりわけ日本語が難しいということはないし、簡単ということもない。

ただまあ日本語は文字種が多いし、漢字を覚えるのはネイティブですら苦勞するから、文字など一部に限って言えば難しいといえるかもしれないね。少なくとも 26 文字覚えれば事足りる英語に比べて」

「なるほど」

「話は戻りますが、さっきの母音調和っていう現象は面白いと思いました。『へべらか』が『へべれけ』ですか。それにしても母音調和ってなんのために起こるんでしょう」

「多分単語を発音しやすくするためだと思うよ。母音は舌の前後の位置や高さを変えて発音するでしょう？ 同じ母音が連続すれば舌を動かさずに済み、労力が減るから」

「なるほど。結構人間ってものぐさなんですね。ほかに労力を減らす仕組みってあるんですか」

「あるよ。音変化と呼ばれる現象だけど、たいていは言いやすさのために起こってるね」

「どんなのがあるんですか」

「例えば同化(assimilation)。『日』は『ひ』と読み、『傘』は『かさ』と読むけど、複合語にすると『ひかさ』じゃなくて『ひがさ』になるよね。hikasa が higasa になるのが同化の例だよ」

「何が何に同化してるんですか」

「無声音の k が有声音の g に変わっているよね。k の前後は i と a という母音で、これらはどちらも有声音。有声音・無声音・有声音じゃ発音しづらいから、無声音の k を有声音の g に変えたわけ。つまり無声音が有声音に同化しているの」

「なるほど。確か国語の時間でこういうのを連濁って習った気がします」

「ちなみに同化の反対は異化(dissimilation)ね。同じか似た音の一方が、より異なる音に変化すること。

例えば『七日』って本来は『ななか』って読むはずだよ。でも実際は『なのか』って読む。『なな』という同じ音の後ろ側が変化して、『なの』に変わっている。こういうのが異化だよ

「音って結構変わるんですね」

「音変化についてほかに知っておきたいのは脱落、重音脱落、添加、音位転換かな」

「難しそうですね」

「術語だけ聞くとね。脱落っていうのは例えば『～している』が『～してる』になるようなものことだよ。i という母音が脱落してるね。同様に、『なのだ』は口語で『なんだ』になるけど、これはo という母音が脱落しているといえるね」

「これも言いやすさのためでしょうか」

「そうだね。で、重音脱落っていうのは、同じか似た音が連続する場合に、片方の音が抜け落ちることだよ。probably を[probi:]と発音することがあるけど、これはbが続いているからだね」

「なるほど」

「一方、添加とは語に音を加えることだよ。例えば『夫婦』は本来そのまま読んだら『ふふ』でしょ。でも実際は『ふうふ』って読まれるよね。『う』っていう母音が添加されているのが分かるよね」

「『夫人』は『ふうじん』ではなく『ふじん』だから、『夫』の音読みは『ふ』です。でも確かに『夫婦』においては『ふ』でなく『ふう』になっていますね」

「うん。そして、音位転換とは語中で2つの音の位置が入れ替わることなの。『新しい』って『あたらしい』って読むけど、本当は『あらたしい』なんだよ」

「え、そうなんですか？」

「その証拠に『新たに』の場合は『あらたに』と読むじゃない」

「あつ、言われてみれば」ポンと手を打つ。「よくそういう例えがすぐ思いつきますね」綺夢ははにかみながら、「ほかに音位転換の例を出せるかな？」と僕に目を向けてくる。「山茶花とかどうだろう。本来の読みは『さんざか』だが、順番が入れ替わって『さざんか』になっている」

「うん、そうだね」綺夢は満足気に頷いた。

こずえちゃんは「先輩も凄いです……！」と感心していた。

こずえちゃんはベンチを立て紙コップをゴミ箱に捨てた。

「これで音の変化は以上ですか」

再び腰掛けながら綺夢に問う。

「そうねえ……。あ、ウムラウトとアプラウトについて説明してあげたら？」と僕に水を向けてくる。

僕は空咳をひとつ決め込む。

「母音が後続する母音に同化される現象をウムラウトという。ドイツ語などによく見られるよ。例えば客のことを Gast というんだけど、これの複数形は Gäste という。a は語尾の前舌母音の e に引っ張られて前方に寄り、ä に変化している。

ä はエとアの間道的な音なんだ。要するに a の音が e に引っ張られて ä になってるってわけ」

「母音調和を思い出しますね」

「一方、アプラウトっていうのは、動詞の活用や品詞の転換に見られる母音の交替を指す」

「うう……例がほしいです」

「中学のとき、sing の原形と過去形と過去分詞を sing-sang-sung と覚えさせられただろ。規則動詞なら sing-singed-singed として-ed で過去形や過去分詞を表せばいい。でも sing は不規則動詞なので接尾辞を付けず、母音の部分を入れ替えて動詞を活用させている。こういうのをアプラウトというんだ」

「ついでに類推についても説明しておくよ。これは音変化だけに使う術語ではないけれど」

「類推は言語学の術語というより、ふつうの日本語ですよ。英語でいうとアナロジー」

「そうだね。ところで、know の活用は言えるよね？」

「know-knew-known ですよ」

「throw は？」

「throw-threw-thrown です」

「活用のパターンが似てない？」

「似てますね」

「そうになると know や throw に語形がよく似た snow の活用は、snow-snew-snown になるんじゃないかという推測が働くでしょ。ある例から別の似たような例を引っ張りだしてくる

ことを類推というんだけど、snow のこの活用は know などの活用の類推によるものだと考えられる」

「え、でも snow の活用は snow-snowed-snowed ですよ」

異を唱えるこずえちゃんに僕はフォローする。

「いや、両方とも正しいんだ。snow-snew-snown という活用もあるんだよ。まあ、こずえちゃんの言うことも分かるよ。実際 It snowed のほうが It snow より圧倒的に多く使われるからね」

「うん」と言う綺夢。「類推は認知言語学的にも重要な概念だから、覚えておくといいよ。色んなところで出てくる概念だから」

「はいっ」

こずえちゃんは元気に答えた。

「ところで先輩って語学に詳しいですけど、何ヶ国語くらいできるんですか」

急に話題が変わったな。

僕は一瞬言葉に窮する。

「どこまでできれば『できる』とカウントしていいのか迷うところだけど、簡単な挨拶程度ができる言語なら数十はあるよ。新聞が読める程度に限定すれば十前後かな」

「うわ」手で口を覆う。「すごすぎです……」

「そんなことないよ。綺夢と乙女だって相当なものだろ？」

綺夢は苦笑するだけで具体的な数は言わなかった。が、僕の見立てでは彼女は相当な数の言語を習得しているはずだ。外国にいた経験もあるというし、少なくとも日本語しかできないということはなからう。

他方、乙女は控えめな声で答えた。

「私は論文を読む関係で英語はできますが、総じて語学はあまり。でもまあ、そこは哲学乙女ですし」

自分であだ名を言うか。

「あ〜、世の中で一番語学ができる人って、何ヶ国語くらいできるんでしょうねえ」

こずえちゃんか遠くを見て呟く。

「新名美次の『40 国語習得法』という本を読んだことがあるんだが、まあアレを読むかぎり 40 ヶ国語くらいはできる人がいるようだね。もっとも、どこまでできれば『できる』とカウントしていいのか分からないから、何とも言えないけど」

「じゃあ、使える言語の数を増やすコツってあるんですかね」

「単純に頭数を増やしたいのなら、似たような言語をやるのが一番だろうね。例えばスウェーデン語とノルウェー語とデンマーク語はほぼ意思疎通が可能だから、1つ覚えればわりと簡単にあと2つ習得できるよ」

「比較言語学的に近い言語をやれば手っ取り早いってことですね。あたしも頑張ろっと」  
息巻くこずえちゃん。

「あっ、でもその前に正しい日本語をできるようにしなきゃだ」

それを見て綺夢がくすくす笑う。

「こずえちゃんは正しい日本語があるって思ってるんだ？」

「え、当たり前じゃないですか。テレビや本でも正しい日本語とか美しい日本語って言うてるじゃないですか」

「残念ながら言語学は正しい日本語が何かを規定しないの。『これが正しい日本語だ』なんて言う言語学者はまずいないよ。メディアに言わされることはあるかもしれないけどね」

「えっ!？」驚天動地という表情。「言語学は言語の正しさを規定できないんですか!？」

「そうだよ。言語学はただ客観的に言語を観察し、分析し、研究するだけ。何が正しいか、何が間違ってるかなんて考えない。そもそも、こずえちゃんの思う正しくない日本語って何？」

「例えば『ら抜き言葉』とか……。食べられるを食べれるって言ったり……」

「それは言語学においては誤りではなく、単なる言語の変化として観測されるの。言語学は『ら抜き言葉』が間違っているなんて言わない。ただ『ら抜き言葉』によって可能と尊敬を意味的に区別できるようになったとか、そういう客観的な事実を分析するだけ」

「はあ、そうなんですか……。言語学って優劣も正誤も規定しないんですね……。何だか気落ちしたような声のこずえちゃん。「ってことは、審美も規定しないんですか？」

「みゆ？」

「ほら、フランス語は美しいとか言うじゃないですか」



「ああ、そういう意味ね。うん。言語学は何か綺麗な言葉かなんてことも規定しないよ。そういう主観的なことは判断できない」

「じゃあなんでフランス語は美しいって言われてるんですか」

「それは単に日本が欧米至上主義だった時代にできた価値観だよ。フランスからは芸術などが、ドイツからは医療などが入ってきたでしょう。だからフランスは芸術的な、つまり綺麗なイメージができ、ドイツ語はおかしい、言い換えれば厳格でカッコいいイメージがついた。ただそれだけのこと。あれは単に相手の文化力や経済力に対する評価を言語にも適応しただけのことなんだよ」

「そうなんですか……」

「まあ、どこの国の人も同じような幻想を抱いてるよ。よく知らない遠くの国の言語にはエキゾチックなイメージを持つてるし、経済力や文化力の低い国の言語にはえてして矮小なイメージを持つてるし、自分たちより上と仰ぎ見て憧れているような国の言語にはえてしてカッコいいイメージを持つてる」

「それでも言語学的にはある言語が綺麗とか汚いとかは言えないんですね？」

「そう。言語学は優劣、正誤、審美など、主観的な評価に対しては判断をくださいない。そういう意味では一般の好事家たちにとっては物足りない分野かもしれないね」

若干綺夢が自嘲気味に笑ったのが気になった。

とそのとき、遠方から声が聞こえた。

「あら、あなたたち……？」

振り向くと、村上蛭が廊下の奥から歩いてきていた。

「もう下校時刻ですよ」

僕は黙って彼女を見上げた。

村上蛭……。平素から言語学部の廃止を訴え、武道会では綺夢に惨敗している。そういえばアンチバベルが現れたのは武道会の翌日だった。

「どうかしました？ 私の顔に何か付いています？」

わざとなのか素なのか、蛭は首を傾げる。

僕は紙コップを潰すと、「いや、もう帰るところだ」と言ってベンチを立った。

蛭がアンチバベルの正体だという証拠はどこにもない。僕は黙っていることにした。

蛭が去ると、綺夢は床に置いた鞆に手を伸ばした。その瞬間、彼女は真っ青な顔になり、突如悲鳴を上げた。

「きゃあっ！」

「どうしたっ!？」と言って振り向くと、綺夢は頭を抱えてしゃがみこんでいた。ぷるぷる震えながら鞆の近くを指し、「む、虫っ!」と叫んだ。

見ると小さな黒い虫が床をカサカサ徘徊していた。綺夢は今にも泣き出しそうな顔で「わたし、虫ダメなの! 鞆、取れないよお……」と言った。

武道会で3冠を得た少女とは思えない姿だった。意外な一面に僕は苦笑した。

虫を手で追い払うと、「ほら、もう大丈夫だよ」と綺夢に目をやった。

綺夢はまだ震える手で鞆を掴むと、ふうと長い溜息を吐いた。

「あ、ありがとう……」

冷静さを取り戻したのか、恥ずかしそうだ。

乙女とこずえちゃんはその様子を見てくすくすと笑っていた。

僕は思わず吹き出しそうになった。

綺夢は顔を紅くしたまま小さく「帰ろ……」と呟いた。

帰り際、僕は悪戯げに考えていた。

虫のおもちやとか使ってからかったら面白そうだな。

いや、そんなことしたら蹴り殺されるか。

しかし、綺夢にこんな弱点があったとはねえ。

僕は心中でほくそ笑んだ。

翌日はいつもどおり言語学部の部室でバベルすることになった。

といっても綺夢はもう言語学の基本的な術語を僕たちにひとつひとつ教えてくれていたので、各自本を読んで分からないところがあればそのつど話題に載せるという手法を取っていた。

僕は今、大堀寿夫の『認知言語学』を読んでいた。綺夢と乙女は英文の言語学書を読んでいた。こずえちゃんは榎山洋介の『認知意味論のしくみ』を読んでいた。

紅茶の香りが漂う静かな時間を破ったのは、突如ドアを開けるバンという音だった。

驚いて振り向くと、そこには旧式のコンピュータを抱えた市ノ瀬丁が立っていた。

「あ、丁ちゃん……」

綺夢は戸惑ったような声を出す。

こいつ、性懲りもなくまた荷物を置きにきたのか。

僕は彼女を見上げる。

市ノ瀬丁。こいつも言語学部を邪魔に思っている。そしてアンチバベルが現れる前日の武道会で綺夢に敗れている。何よりこいつは言語学に詳しい。バベルの塔の由来について知っていてもなんらおかしくない。

丁は無言で奥に入り、隅にコンピュータを置いた。そしてそのまま無言で去ろうとした。

「あ、ちょっと待って」

綺夢が呼び止めるとピクリとする。

「……なんだ」

「せつかく来たんだし、わたしたちと話さない？ バベって行ってよ」

「興味ない」

「ほら、弓道でわたしが勝ったらお話してくれる約束だったでしょ」

綺夢がにこりとすると、丁は一瞬「う……」と困惑した顔になり、「仕方ない……」とドアノブから手を離した。

「それで、何か聞きたい」

「ズバリ、認知言語学とは何でしょう」

僕があまり丁と話したがっていないのを察したのか、綺夢が話を進める。

「ゲシュタルト的な知覚、視点の投影・移動、カテゴリー化といった人間が持つ一般的な認知能力を反映したものが言語だという視座のもとに人間と言語の本質を研究する分野」

サラッと答えるが、何を言っているのか分からない。

「それじゃ彼らには伝わらないかも」

僕らを見ながら綺夢は苦笑する。丁はため息をひとつ吐く。

「1980年代の末期から現れはじめた言語学の動向で、言語は一般的な心の作用と連続したものであることを強調し、言語理論を認知の中に位置づけようとした」

「あ、それ『オックスフォード言語学辞典』の定義だね。よく暗記してるね」

「一度見たからな」

サラッと言う。機械かよ、お前。

「認知言語学は、言語の自律性を強調するチョムスキー学派を含む構造主義の学派と対立する。主な研究者はレイコフやラネカー。ただし彼らのはじめの頃は生成意味論の提唱者だった」

よく分からないが、とりあえず言語学界ではチョムスキー率いる生成文法の陣と、レイコフらが率いる認知言語学の陣が対立しているようだ。

「ピンカーは言語は人間の本能と考えた。生得論だ」

せいとくろん……？ 生得は確か「生まれもつての」というような意味だったはずだが。

「生得論とは、特定の能力、学習、行動の傾向などが元から脳の中に備わっているとする考え方のことだ。

これに対するのが経験主義。生まれたばかりの脳はタブララサ、つまり白紙の状態、先天的に知っていることはなく、経験によって学んでいくという考え方だ」

「で、ロボ……市ノ瀬さんはどっちが正しいと考えるんだ？ 認知言語学が専門ならやはり経験主義か」

「ええ。もともと、偏った経験主義者ではないが、いずれにせよ生得論には反対だ。言語を習得するために必要な能力がもともと備わっているという意味ならむしろ人間は生得的にそのような能力を持っているといえる。口腔の形状、肺臓の存在、直立二足歩行、歯の存在、肥大化した脳が存在などからな」

どうやら極端な生得論でもなければ極端な経験主義でもないようだ。案外バランスが取れているというかなんというか……。

「人間はキーボードを打つことができる。打つだけの能力がもともと五体に備わっている。だからといってキーボードを打つことが人間の本能か？ 蜘蛛が巣を作るがごとく、本能といえるか？」

それはないな。

「言語もキーボードと同じだ。人間が言語を使えるのは単に人体という環境が整っているからにすぎん。人間が言語を使うのはキーボードを打つと同様、環境が許しているからであって、本能ではない」

「じゃあ刺激の貧困説についてはどう思う？」 綺夢が水を向ける。

「チョムスキーはかつてこう主張した。大人は不完全な文や誤りを含んだ文を子供に教える。しかも十分な量の言語データを子供に与えない。つまり刺激——いわゆる言語データが不足している。にもかかわらず子供は母語を習得する。これはどういうことだ、と。

だがこれについて私は懐疑的だ。刺激が貧困しているという主張そのものが怪しい。子供は十分な量の刺激を与えられ、足りない部分は類推をしたり、周りの人間の発話などを参照に自己の文法を修正しているものと思われる」

「つまり刺激の貧困とは名ばかりで、そもそも刺激は貧困してない？」

「そうだ。親や周囲の人間が一言も話さなければ子供は母語を習得しない。それでこそ本当の意味で刺激の貧困だ。

ある程度言語データを与えて母語を習得したのなら、その程度の刺激で十分だったといえる。刺激の貧困というが、どの程度を以って貧困と呼ぶかがそもそも曖昧なんだよ。

確かに大人は母語に関する完全なデータを子供に与えない。しかし不完全なデータでも子供は類推など人間の認知能力でカバーでき、その結果母語を習得すると考えられる」

丁は綺夢に比べずいぶん断定的な物言いをするタイプだった。まあ見た目通りだが。

綺夢と違って一般論を述べているのでなく、単に持論を述べるタイプなので、ある程度経験主義に偏っているだろうことは覚悟して聞いたほうがいいだろう。

「チョムスキーの言う刺激の貧困は荒唐無稽だ。刺激が貧困しているのに子供が母語を習得するのは不思議だと？ 何も不思議なことはない。単に刺激は十分で、足りない分は周りの人間の発話を聞きながら認知能力を働かせて補い、母語を習得するにすぎない。

つまり最初から刺激は貧困してなかったんだ。本当に刺激が貧困しているなら、それは子供が母語を覚えられない程度に親や周囲が無口な場合を指す」

バッサリと斬って捨てた。

「つまり市ノ瀬さんとしては——」

「その呼称だが」僕の言葉を遮る。「市ノ瀬は我が家にもこの学校にも数名いる。しかし丁なら私しかいない。丁と呼んでもらったほうが解しやすい。敬称も不要だ。非合理的だ」

よく分からない感性の持ち主だ。しかしまあ大人しく従うことにするか。

「じゃあ丁はこう思ってるんだな？ つまり、人間には言語を使うだけの環境や身体能力が整っていて、子供に言語データを与えると認知能力を活かして母語を習得すると。つまり言語は本能ではなく、チョムスキーが言うような言語獲得装置も存在しないと」

言語獲得装置というのはつい先日、本で読んだ術語だ。その存在はチョムスキーが提唱している。

「言語獲得装置が脳内に存在するかどうかは脳科学が今後明らかにすることだ。だが私の予言では、そんなものは存在しない。母語を獲得するのに必要な能力を脳が持っていることは事実だが、それが言語獲得装置だとは思えない」

「つまりキーボードを打つための専門の装置を脳が持っていないのと同じく、言語を習得する能力は単に他のもつと基本的な所作をするための能力を応用したものにすぎないと？」

「そういうことだ。人間の脳にはキーボード獲得装置はない。単にキーボードを打つのに必要な能力が脳内と身体にあり、それを応用してキーボードを使っているにすぎない。言語も同様だ。言語を使うのに必要な能力が脳内と身体にあり、それを応用して言語を使っているにすぎない。言語専用の獲得装置などというものは存在しないと私は考える」

「丁さん、お茶はいかが？」

乙女がカップを手に取る。

「結構だ、哲学」

哲学？

「なんだその呼び方」

僕の疑問に丁は簡潔に答えた。

「折口だとこの学校に数名いる。彼女のあだ名は哲学乙女だ。だから哲学と呼んでいる」  
なら乙女と呼べばいいじゃないか。まあ乙女本人が嫌がっている様子もないので問題ないのかもしれないが。

どうやら丁にとって名前は人物を特定する識別子程度のものでしかないらしい。

「となると丁は普遍文法についても否定的か？」

言いながら僕は三省堂『大辞林』を引っ張りだし、普遍文法の定義を読み上げる。

「普遍文法とは『あらゆる言語に適用可能な共通の文法。言語は人間理性の現れであり、表面的には異なる諸国語の根底には普遍的な思考の秩序が存在するという考えに基づく』とあるな」

「普遍文法は機械翻訳には役立つさ」皮肉げに冷笑を浮かべる丁。「だがあんなものが人間の脳にあるとは思えない。

例えば深層構造を変形して表層構造を得ているという考え方でさえ、私にとっては荒唐無稽だ。

初月、アナタは彼にどんな深層構造の例を教えたんだ」

「ええと……〔ワタシガ〔ワタシガサクラヲミル〕タイ〕だったかな」

ふっと嗤う丁。

「いったいどの人間が〔ワタシガ〔ワタシガサクラヲミル〕タイ〕なんていう構造から『私は桜を見たい』などという文を生成している？ アナタが日本語覚えたとき、こういう深層構造を使って表層構造を得たか？ たとえ無意識下においてですら」

「いや……多分僕は周りの大人が『～を見たい』と言ってるのを聞いて、それで自分もこのフレーズを覚えたんだと思う。深層構造とか抜きに、単にフレーズや単語を覚え、そのフレーズや単語を組み合わせて表層構造を作ってきたと思う」

「だろう。深層構造などなしに、始めからフレーズや単語の組み合わせで表層構造を作る。それが人間だ」

「では深層構造は無意味と？」

「恐らく人間は深層構造を変形させて表層構造を得てはいないだろう。

だが深層構造を変形して表層構造を得るという行為は統語論的な文の分析や、機械翻訳などの分野では大いに役立った。なんせ文の構造が明瞭になるからな」

「ええと、つまり機械が言語を理解するのと人間が言語を理解するのは異なる？」

「そうだ。機械には人間のような認知能力がないからな」

「ところで機械はどのように言語を理解しているんだ」

「本質的に機械は言語を理解していない。ただ与えられたデータを機械的に分析しているだけだ。人間が考えるような理解をしているとは言いがたい」

「じゃあ機械翻訳はどのような仕組みでできているんだ」

「簡単な例を挙げよう。」

機械翻訳においては、入力されたデータを分析し、それを翻訳先の言語に変換する。その過程で中間言語という第三の言語を挟むこともある。

I eat an apple を『私はリンゴを食べる』に翻訳する基本的な流れを見てみよう。

I eat an apple は名詞句の I と動詞句の eat an apple に分かれる。動詞句は動詞の eat と名詞句の an apple に分かれる。名詞句は限定詞の an と名詞の apple に分かれる。機械はこのように入力された文を分析する。

それを日本語に翻訳する場合、単語を日本語に訳し、語順を日本語の語順に置き換え、限定詞など日本語に存在しない要素を捨象するなどし、結果的に『私はリンゴを食べる』という文を得る」

「なるほどな……」

「アナタは人間が機械のように言語を処理していると思う？」

「それはないんじゃないかな。子供が『私はリンゴを食べる』という文を理解するときに、いちいち名詞句だ動詞句だといった分析はしないし、文の構造も考えない。無意識のレベルにおいてですらだ」

「そう。子供はある程度まとまったフレーズを覚える。そしてそこに単語を入れる。そういう小さなフレーズを1個以上組み合わせて長い文を作る。

例えば『～が～たい』というようなフレーズを得ると、そこに『桜』や『見る』を入れて『桜が見たい』という文を得る。また、『おやつ』や『食べる』を入れることで『おやつが食べたい』という文を得る。子供はフレーズの中に単語を入れることで文を得ている。複数のフレーズを組み合わせることで、もっと長い文を作ることもできる」

「なるほど」

「文や文意がおかしいかどうかは、常識や類推などを用いて行なっている。」



『食べがおやつたい』がヘンだというのは類推によって判断できるし、『フライパンが食べたい』というのは常識によっておかしいと判断できる」

「しかし機械には常識はないし、類推も苦手だ。人間のような認知能力や知識を埋め込んでやらないと機械は人間が理解するようには文を理解できない。君はそう言いたいんだな？」

「そういうことだ」

「で、結局丁は将来何がしたいんだ」

「20世紀のようなやり方では機械翻訳にせよ認知言語学にせよ、これ以上の発展は望めないと考えている。

これからは人間の脳を分析することで、人間が言語を習得し使用するシステムを解析し、その結果を機械に埋め込んでいくというアプローチを取らざるをえないだろう。

言語学は文系の学問だが、最先端分野については今後理系の学問になるよ。脳科学なしに現在の神学論争を解決することはできない」

「神学論争？」

「言語獲得装置の有無や、生得論 VS 経験主義といった不毛な言い争いのことだ。こんなもの、脳科学が発達すればやがて明らかになる。だが旧態依然な文系言語学ではいつまで経っても解明できない。

今後、言語学者は脳科学を学び、認知言語学と脳科学を組み合わせる人間言語の本質を解明する必要があるだろう」

僕は綺夢を見やる。

「綺夢も同意見なのか？」

「今後言語学が脳科学と共同作業していただくことは否めないけど、直接脳を調べる手法だけでなく、今まで通り人間が発した言語を観察・分析するやり方も残ると思う」

「そっか」

「現在の脳科学だと脳に直接電極をさして電気信号を読み取ることは許されないから、ハッキリしたことが分からないの。直接脳に電極をさせれば、人間が言語を使うときの脳の働きをもっと詳しく調べることができるんだけど」

「なぜ脳に直接電極をさせないんだ？」

「倫理的な問題だよ」

綺夢の言葉を蛭が受け取る。

「そこで計測には大まかに分けて2種類の方法がある。

まず神経細胞が発する微弱な電氣的・磁氣的な信号を捉えるもの。EEG という機材を使えば脳波を計測できる。が、頭皮の表面上しか計測できないという欠点がある」

「脳の内側まで見れないというわけだな？」

「ああ。そこで脳の中まで見ようという考えが出てくる。電極を直接さしこむわけにはいかないため、fMRI という機材を使えば神経細胞が活動する際に生じる脳内での血流や代謝の変化を調べることができる」

「それ、良さそうだな」

「ところが神経細胞が活動してから血流・代謝が生じるまでのタイムラグが6秒ほど存在する。そのため、神経細胞がいつ活動したのかを正確に把握できない」

「どちらの方法にも欠点があるということか」

「実際、まだ脳科学ではほとんど言語現象については明らかになっていない。今後の課題は山積みだ」

綺夢が丁の言葉を受けて続ける。

「いつか脳科学が人間の言語能力を明らかにしてくれる日が来るかもしれない。そうすれば人間が発した言葉から言語を分析するという間接的な手法を取らなくて済むかもしれないね」

僕は感心して頷いた。

「ちなみに」綺夢が付け加える。「脳だけ見てちゃダメだよ。人間の言語は人間の身体性と重要に結びついてるから、脳だけでなく身体も考慮しなくちゃいけない」

「どういう意味だ？」

「たとえば『掴む』という動詞は脳だけ観察してても分析できない。手や腕の存在も考慮に入れないと、『掴む』という動詞は分析できない。言語と身体は密接に結びついてるんだよ」

「なるほど」

「ほかに、文化や風土などの環境も考慮する必要があるよ。稲作文化の日本だと稲と米の違いは重要だから単純語レベルで区別するけど、米が主食でないイギリスの英語ではどちらも rice という。こういう違いは脳だけ見ても分かることじゃない。身体の外の世界も考慮に入れないと」

「そうだな」

僕は頷いた。丁は特に否定してこなかった。

「ときに丁は機械翻訳って言ってたけど、完全な自動翻訳機は完成すると思うか？」

「完全な自動翻訳機があるのだとしたら、それは人間と同じ能力や知識を持つ必要がある」

「人間と同じ能力や知識？」

「まず、単語や成句の意味や語法はもちろんのこと、常識や文化といった知識が要る」

成句というのはイディオムのことだ。中高生には慣用句や熟語のようなものといったほうが分かりやすいかもしれない。

「あの……語法って何ですか？」

黙って聞いていたこずえちゃんが質問する。丁は彼女に目を向ける。

「要は言葉の使い方のことだ。」

『唇』は英語で lip だが、『唇』が赤い部分を指すのに対し、lip はその少し上まで指す。つまり鼻の下の一部を含むということだ。名詞の指す範囲は語法の一つだ。

また、ドイツ語で『行く』は gehen という。日本語では乗り物に乗って行く場合も『行く』といえるが、ドイツ語では乗り物を使う場合は fahren という。動詞の指す意味の範囲は言語ごと、単語ごとに異なる。

どちらの例でも日本語と外国語の語法が異なっている。語法の違いは異言語を習得する上で重要だ」

「分かりました。途中で話を切っちゃってすみません」

謝るこずえちゃん。丁を前に緊張しているようだ。

丁は話を元に戻す。

「完全な自動翻訳機には単語や成句の意味や語法はもちろんのこと、常識や文化といった知識が要るとは既に述べたな。そのほかに必要なのは、誤植を判断し修正できる能力だ。加えて、文脈から文意を判断できる能力や知識も必要だ。最低限これくらいはないとな」

「ハードル高いな」

「例えば学校で生徒が青い顔でお腹を押さえながら『佐藤先生、気持ち悪いです』と言ったとしよう。これはどう訳すべきだと思う？」

「Mr. Sato, I'm feeling sick とかかな」

「しかし原文に『私は具合が悪いと感じている』ということ特定できる要素はない。もしかしたら『佐藤先生、あなたは不気味です』という意味かもしれない」

「でも、お腹を押さえて具合悪そうにしてるんだろ？ なら状況から分かりそうなもんじやないか」

「そう。人間には常識があるし、相手の状況を見て文意を判断できる。しかし機械はそれができない。ちなみに、くだんの文をとある機械翻訳機に入れたら、Mr. Sato and a feeling are bad と出てきた」

「全く翻訳機として役に立っていないな。意味のある英文にすらなっていない」

「理論上は完全な自動翻訳機を作ることは可能だ。だがその機械は先に述べたような、人間同等の能力や知識を備えていなければならない。人間の知性に匹敵する機械を作れることが最低条件だ」

「なんだか人間を作るのと大して変わらない気がするな」

「同感だ。そこまで優秀な人工知能があれば、人工身体も与え、人造人間を作れるだろう。というより、人間と同等な性能を持った人工知能があるとすれば、人工身体は必須だろうな」

「なぜ？」

「情報を入力・出力するために目や耳や口といった感覚器官が必要だからだ。情報の入力ができなければ自立学習できないだろう？」

「ケータイのカメラのようなものを目の代わりにしたらどうだ」

丁は一瞬考えてから口を開いた。

「アナタはアフォーダンスという言葉を知っているか」

「いや……」

「環境が動物に与える意味のことだ。アフォーダンスは、物をどう取り扱うべきかといったようなことを示してくれる。例えば箒は掃くものであって殴るものではない。ときに、英語で箒は？」

「broom だ」

「ではその転換動詞はどういう意味だ」

「すまん、転換動詞ってなんだ」

「broom は名詞だが、動詞用法もあるだろう。名詞が動詞としても使われている。こういうのを転換動詞という。で、to broom の意味は？」

よもや知らないなどということはなかろうなという冷気の籠った声だ。

「確か——」

僕が答えようとしたら、丁は「待った。知っているなら答えるな」と言って制した。そしてこずえちゃんを指して「broom の転換動詞の意味を知っているか」と問うた。

「いえ……」おずおずと答える。

「ではどういう意味だか推測してみるかい」

「えっと……『箒する』ってことは……。地面を箒で掃くとか、そんな感じですか……？」

「その通り。箒は地面を掃くための道具だ。箒のアフォーダンスは箒をどう扱うべきかを教えてくれる。柄を持ってサッサとゴミをかき集めるというようにな。

さて、もし人工知能が手や脚や目を持っていなかったら、箒のアフォーダンスを理解することができるか？ to broom の意味を推測することができるか？」

「それは……無理だろうな」

「そう、無理だ。今そのショートカットの少女が転換動詞の意味を推測できたのは、彼女に手や脚や目といった器官が備わっているからだ。

手もなければ手を見たことすらもない人間がいたとして、彼に箒のアフォーダンスを理解することはできない。『あれは何をするための道具なんだろう？』と謎に思うだけだ。

同様に、手もなければ手を見たことすらもない機械に箒のアフォーダンスを理解することはできない」

「確かに……」

「言語は人間の身体や認知能力と密接に関係している。もし人間の言語を人間並みに解する機械があれば、それは人間と同じ身体や認知能力を備えている必要がある。

従って、ケータイのカメラじゃダメだ。少なくとももっと眼球に近い機能を持ったものを、顔に相当する部分に2つ付けないといけない」

「その上、腕や脚なども必要ということか」

僕はため息を吐いた。

「なあ、それなら人間をゼロから作るのと変わらないじゃないか。生殖を経て産んだほうが早い気がする」

「そうだな。ただ、そういう人工知能を備えた人造人間が実現すれば、社会はさらに発展するだろう。」

人間が人間を非生殖によって作れるようになれば、人類は神にすらなれるかもしれない」  
丁の言葉には重みがあった。

「さて、一般人に対する私の講義は以上だ」

丁は綺夢を一瞥する。

「初学者にはこれくらいが精一杯だろう。」

約束は果たしたぞ、初月」

「うん、ありがとうね」

綺夢は苦笑まじりに礼を述べた。

丁はドアノブに手を掛ける。そして綺夢に背を向けたまま呟く。

「初月、哲学。アナタたちこそ、コンピュータ部に来ないか」

綺夢と乙女がびくりとなる。

「私の元で脳科学を勉強しないか。」

アナタたちの才能を旧態依然の言語学で食いつぶすのは、正直惜しい」

丁の声に珍しく感情が宿る。

そうか、彼女はむしろ綺夢たちの力については認めているんだ。言語学部さえなければ綺夢たちが自分のところに来るのではないかと思っているのだ。そのせいもあって、余計言語学部を邪魔に思っているのだろう。

「ありがとう。でも、ここがわたしの居場所だから」

静かに答える綺夢。

「そうか……。哲学は？」

乙女は綺夢の手を握る。

「私は理系ではありませんし、みゆちゃんと違って万能型でもありません。あくまで専攻は哲学です。それに、どのみち私の居場所はみゆちゃんがいるところですから」

「……分かった」

丁はそのままドアを開けると、振り向かずに去っていった。

彼女が去ると、こずえちゃんは「は一つ」と言って机に突っ伏した。

「あの人、すごい緊張感を感じます。綺夢さんや乙女さんとはまるで逆っ」

「はは、そうかもね」

「ですよ。蛭さんより緊張します」

「蛭……か」

蛭と丁……。

僕の脳裏にアンチバベルの名が再びよぎった。

「そういえば丁がさっき、完璧な自動翻訳機には常識や文化の知識も必要って言うたが、言語と文化ってそんなに関係あるのかね」

鈴木孝夫の『ことばと文化』を既読だったので、ある程度のことは理解できていたが、あえて綺夢に確認してみた。

「あるよ。例えば一般的にその文化にとって重要なものは単純語や短い語形で示されることが多いの。その文化にとって特に重要でない場合、単語が宛てがわれないことすらある。

日本語では稲と米を区別するけど、牛は雄雌どっちでも牛だよ。一方、英語では稲と米はどちらも rice だけど、牛は ox や cow といった風に単純語レベルで区別する。

これは日本が稲作文化で、イギリスが牧畜を行なってきたからなの。日本の稲作文化では稲と米の違いは重要だし、イギリスの牧畜文化では牛の性別は重要。その違いが言語に現れてる。

このように、言葉と文化には関係がある。なお、稲作や牧畜の選択は風土によるところが大きいから、言語は風土とも密接な関係があるといっている」

「そうだな」

「そもそも言語はその背景となる文化や風土と切り離すことができないの。

他の例を挙げようか。英語では兄と弟をともに brother といい、姉と妹をともに sister というでしょ。年齢で単語を分けないよね。でも日本語や韓国語では分ける。これは日韓がとりわけ長幼を重んじる文化にあるからだよ」

「日韓は兄弟以外の単語でも長幼を重んじるよな。先輩とかいう呼称も日韓にはあるが、英語にはない」

「特に韓国では儒教の影響もあって、目上の人に対する口の聞き方に気を使うよね。男言葉と女言葉の違いより、目上に対する言葉と目下に対する言葉の違いのほうが大きい。

単語レベルではもちろんのこと、全体的な口調にまで言葉の違いは及ぶ。目上には丁寧な합니다 (ハムニダ) 体や해요 (ヘヨ) 体を使う一方、目下には반말 (パンマル) といういわゆるタメ口を使うというように」

綺夢は韓国語にも詳しいようだ。語学と言語学は遠いようで近く、近いようで遠い。

「言語が文化や風土と切り離せないのは明白なんだけど、言語が思考に影響を与えるかというとまた別の話だよな」

「ああ、なんかの本で読んだな。なんだっけ、言語相対論……？」

「そう。サピア＝ウォーフの仮説の名でも有名だよな」綺夢は『オックスフォード言語学辞典』を引く。「人が話す言語の意味構造が、彼らの住む世界についての概念の形成の方法を決定する、あるいは制限するもの——と辞書にはある」

彼女はそのまま辞書を読み続ける。

「言語相対論の仮説。あるいは極端な形では言語決定論とも呼ばれる」

「なんだか難しいですね」こずえちゃんがコメントする。

「要するに言語が思考を決定付けるという強い仮説が言語決定論で、言語が思考に影響を与えるという弱い仮説が言語相対論と考えておけばいいよ」

「綺夢さんはどちらを支持してるんですか」

「わたしは相対論だよ。弱い仮説のほう。多くの言語学者は弱い仮説についてならある程度認めるんじゃないかな」

「ふだん中道派な乙女さんはどうですか」

「私も弱い仮説なら支持していますわね」

中立好きな乙女が言うのだから、よほど一般的な見方なのだろう。



「言語が思考の基盤だという見解は18世紀後半～19世紀前半にかけてドイツの思想家によって唱えられました」乙女が語りだす。「哲学者のカントあたりが代表ですわね」

カントの名なら流石の僕でも知っている。彼が言語学に手を出していたとは意外だ。「その後、フンボルトもその理論の擁護をしました。ですから、サピア＝ウォーフの仮説というのはある日突然サピアとウォーフが言い出したものではないんです」

「そりゃまあ、ポツと思いつくようなものじゃないもんな」

「そしてこの理論を深めたのがアメリカの人類学者ボアズです。彼はアメリカで分析した多くのアメリカ＝インディアン諸語から、生活様式と言語様式が地域によっていかに多様であるかを知りました。そして生活様式と言語様式の間に強い結びつきがあることを知りました。こうして、人間の物の見方は言語に反映されるという考えに行き着きました」

乙女は順を追って歴史的に説明してくれるから、どういう流れでその理論ができていったかを理解しやすい。

「そしてそのボアズの弟子が、かのサピアなのです」

「ようやく話が繋がったな」

「ええ。更に、そのサピアの弟子がウォーフなのです」

「これで役者が揃ったわけか」

「サピアは1921年に著書『言語』において、言語は人の考え方に影響を与えると主張しました。これを受けたウォーフが1940年代に理論を発展させた結果、サピア＝ウォーフの仮説が誕生したのですわ」

「という、生成文法なんかができるより前の話か」

「生成文法の派閥の主張とサピア＝ウォーフの仮説は水と油の関係にあります。有名どころでは、ピンカーは『言語を生み出す本能』の中で言語本能説を唱え、人の思考は普遍的な心的言語で行われるもので、人は生得的に持つルールに則って母語の文法を習得していくと述べ、サピア＝ウォーフの仮説を批判しました」

「それもかなり悪辣な言い方でね」

綺夢が珍しく不快感を顕わにした言い方をした。

そういえば彼女の飼猫はサピアとウォーフと池上だったなということを思い出した。

「で、実際のどの程度言語って思考に影響を与えるものなのかね」

僕が息をつくとき、綺夢は質問を投げかけてきた。

「例えば貴方が山登りをしているとして、天気が悪くなったとするね。雷雲が集まって、ゴロゴロ言いだしたとする。でも貴方はどうにか雲を抜けだし、雲より高い位置まで到達することができた。こうなったら少なくとも雲の中や下にいるよりは安全だよな」

そりゃそうだ。僕は素直に「ああ」と頷いた。

「どうしてそう思う？」

綺夢は自分で述べたことをあえて蒸し返し、理由を問うてきた。

「どうしてって……雷雲の中が危険なのは当たり前だろ。それに雲の下にいたら雷が落ちてくるかもしれないじゃないか」

「うんうん。ところでこずえちゃんは どう思う？」

すると彼女はおずおずと切り出した。

「あの、先輩……あたしは雷雲の上でも下でも危険だと思いますけど」

「え、そうなの？」

「雷ってそもそも上にも進みますよ」

流石理系。てゆうか理系のはずの僕がなぜそれを知らない。後輩に教えられるとは。

「明察」綺夢はこずえちゃんに微笑んだ。そして僕のほうを向く。「ねえ、どうして貴方は雲の下より上のほうが安全だと錯覚していたの？」

「それは……」

「さっき貴方こう言ったよね、『雲の下にいたら雷が落ちてくるかもしれないじゃないか』って。

そう、日本語では『雷』は『落ちる』ものなの。『落雷』という熟語もあるくらいだしね。日本語では『雷』は『来る』とか『着く』ものではないの。このコロケーションのせいで、貴方は無意識のうちに『雲の上には雷が落ちない』と考えてしまった」

確かにその通りだった。

「ねえ、もし貴方がとある言語Lの話者だったとして、その言語のコロケーションでは『雷』は『届く』ものだったとしようか。その世界での貴方は今と同じ誤解をしたかな？」

「恐らく……しなかったと思う。僕は『落ちる』という表現に騙されていたんだ。普段から『届く』と言っていれば、雲の上が安全だとは錯覚しなかったと思う」

「それって言語が思考に影響を与えていると言えない？」

その通りだった。こういうのは自分で言い当てられて体験してこそよく理解できる。

「なるほど。言語は少なくともある程度の割合で思考に影響を与えるようだ」

僕は大きく深く頷いた。

言葉と文化と風土。言葉と思考。面白い分野だな。

その後、こずえちゃんはバイトがあるので足早に帰っていった。

乙女も用事があるとかで去っていった。

僕と綺夢は少し部室に残ることにした。

二人きりになるのは久しぶりだ。

「そういえばもうそろそろテスト期間だな」

「そうだね。勉強はちゃんとしてる？」

「まあそれなりに。綺夢は？」

「いつもどおりかな」

「試験の前はバベってないで勉強しないとだよな」

「一応、受験生だしね」苦笑する綺夢。

「かといって一人で勉強してもはかどらないし、乙女を交えて3人でやるか？」

「いいね。そしたらこずえちゃんの勉強も見てあげられるし」

「じゃあしばらくは部室にこもりつきりだな」

ふと安心した自分がいた。この部室に来る口実ができたことが嬉しいようだ。

「テストが明けたら終業式だ。7月19日までに部員を4人集められなければ言語学部は廃部なんだよな」

「うん……」

「あのな、綺夢。あらかじめ言っておくが、僕は入るつもりだ」

「えっ、本当？」

素直に嬉しそうな顔をするのでかえって照れる。

「ああ。だから部活のことは心配するな」

「でも、3人じゃ……」

「いや、どう考えてもこずえちゃん、あの様子だったら入るだろ。まだ1年だし、将来は部長になってもらわんと」

すると綺夢はふっと暗い顔をした。

「どう……かな」

僕はため息をついた。

「綺夢っていつも他人との関係に対して自信なさげだよな。大丈夫だよ、こずえちゃんだってあれだけ毎日入り浸ってるんだ。言語学に興味を持つてるよ。入らない理由はない」  
しかし綺夢は無言で俯いたままだった。

空気が重くなったので話題を変えることにした。

「綺夢はこのまま文系で大学に進むつもり？」

「うん、わたしはそのつもり。貴方は？」

「僕は正直文転しようか迷ってる。でも丁を見てると理系でも言語学はできるんじゃないかという気もする」

「そうだね」

「ただ綺夢が武道会るとき言ってたろ。弓道の決勝のとき、丁には包括的な言語学の知識がないって。あれが気がかりでな。やっぱり言語学をやるには文系のほうがいいのかなって。」

それに僕の興味はもともと語学にあるんだから、そのことを考えても文系のほうが良いんじゃないかっていう気もする」

「本気で言語学と語学を専攻したいなら、文転は必要かもしれないね」

「だよなあ」

「でもまだ出願まで時間もあるし、もう少し考えてみたらどうかな」

「ああ、そうするよ」

綺夢はじっと僕を見てきた。

「……なんだよ」

「ん？ ふふ、最初に話したときよりずっとわたしに対して心を開いてくれてるなって思ってた」

「そうか？」

「最初はだいぶ緊張してるように見えたよ。まあ、それはわたしも同じだったけど」

確かに綺夢みたいな美少女相手にも、どもらなくなった。ふつうに日常会話もできるようになった。慣れだな。

「ねえ、語学と言語学は近いようで遠いって言ったよね。

……わたしたちの距離は縮んだのかな」

綺夢は膝を抱え、椅子の上で三角座りをする。

「え……」

「……」

「そう、だな。うん、僕が言語学に歩み寄ったことで、近付いたんじゃないか。その……多少は」

「多少……か」

綺夢は寂しげに笑った。

「ねえ、最初の出会いを覚えてる？」

「ああ。図書館で同じ本を取ろうとして指がぶつかったんだ。そこで少し会話して、綺夢が学生証を落として、それで僕がここに届けにきた」

「雨の降る6月だったね」

「ああ」

「あれからもう1年以上か」

「ああ……ん？」

1年以上？

綺夢は膝をきゅっと抱える。

「言ったでしょ。最初の出会いを覚えてるかって」

「え……」

「やっぱり覚えてなかったんだね」

綺夢はふふっと笑った。そして静かに語りだした。

「去年の梅雨の話です。

男の子に免疫のない2年生の女の子が、図書館で本を読んでいました。

彼女は言語学の本棚の前に立って、本を読んでいた。

その横には2年生の男の子がいました。彼は語学の本を読んでいた。

図書館を出た女の子は昇降口に降りていきました。外は梅雨の雨が降り注いでいました。

女の子は傘を持っていませんでした。するとさっきの男の子が傘を片手に出てきました。

彼は一旦傘を差して歩き出しましたが、少し歩くと戻ってきました。

そして真っ赤な顔で女の子に傘を差し出しました。

女の子は驚いて何も言えないでいました。

すると、男の子は『濡れるだろ』と言って、傘を置いて去っていきました。

女の子はその傘を拾って帰りました。

次の日、女の子はその傘を持って図書館に行きました。でも彼には会えませんでした。

次の日も次の日も、女の子は図書館に行きました。でも彼には会えませんでした。

やがて6月の梅雨は終わってしまいました。

夏休みが明けて、女の子は廊下で彼とすれ違いました。

だけど時間が経ちすぎていたせいで、声をかけるタイミングを逃してしまいました。

秋になって、女の子は図書館で語学書を読む彼を見つけました。

女の子はずっとその男の子と話をしたいと思っていました。

最初はあのお礼の一言言いたいだけでした。

でも、だんだん彼と話をしたいと思うようになったんです。

そうして彼を見かけるたびに、女の子は横の言語学の棚に行って本を読んでいた。

冬が過ぎ、春が過ぎました。

いつも横で言語学の本を読んでいる女の子に、彼は少しも気付いてくれませんでした。

また梅雨が来ました。

けれども女の子は話しかける勇気がありませんでした。

彼と話がしたい。

でも、きっかけがない。

——だから、彼が一冊の本に手を伸ばしたとき、彼女はそっと指を添えました……」

夕日が紅い。

綺夢はぼつぼつと静かに言葉を紡いだ。

僕は静謐な空間の中で、黙って彼女の言葉に耳を傾けていた。

綺夢はそっと立ち上がると、本棚の陰から一本の傘を取り出した。

——あの懐かしい傘を。

「女の子はいつかその傘を返して、こう言おうと思っていました。

——ありがとう」

そっと傘を差し出してきた。

僕は静かにそれを受け取った。

手と手が触れ合った。

僕は——きっと何も考えてなかったんだと思う。自然と心の中に湧いた言葉を口にした。

「……濡れなかったか」

あのときの女の子ははにかむと、彼女の髪のように柔らかな口調で返した。

「——おかげさまで」

綺夢は傘から手を離れた。

手と手が離れる。

離れていた距離が少し近付いて、少し離れた。

「じゃあ、また明日」

小さく綺夢は手を振った。

「うん、また明日」

僕は小さく答えて、部室を去った。



<アンチバベル>

虫の知らせというようなことは、本当にあるのだろうか。  
少なくとも僕の人生では奇跡的な偶然など起こったことがない。  
だが、今朝は運命の歯車が僕の人生のレールから少し外れていたようだ。

早朝5時に目が覚めた。とりわけ前日に多く寝たというわけでもないし、昨晚早く寝たということもない。

7月中旬の暑さのせいで寝苦しかっただけかもしれない。虫の知らせというほどのことではないのかもしれない。

ああ、でも僕にはなんとなく分かっているんだ。  
どうして寝付きが悪かったのか。どうして眠りが浅かったのか。  
——1年ぶりに帰ってきた傘に心が高揚していた。  
強いて言えば、それが早く目覚めてしまった理由だろう。

早く起きたって、そのまま家でゆったりしてから登校してもよかった。  
ただ、今朝はなんとなく早く学校に行きたくなった。

いつもより早い電車で、いつもより早い時間に校門をくぐる。  
当然そのまま教室に足を運べば良かった。どうせまだ誰もいない教室に行って、朝の新鮮な空気を吸っても良かった。

だが、僕はふと気になって綺夢の教室に足を運んでみた。

なぜ足を運んだのか、正確には覚えていない。  
ただなんとなく、綺夢の教室に行ってみようと思ったのだ。

でも多分心の底では分かっていたんだ。  
もしかしたら綺夢も自分と同じようによく眠れず、早く起きてしまったかもしれない。  
それで偶々早く来ていて、会えるかもしれない。

そう期待している自分が、そうだったらいいなと思う自分がいることに気付いていた。

廊下には誰もいなかった。階段にも誰もいなかった。

僕は綺夢の教室へと歩いていった。

するとドアの窓から綺夢が席に座っているのが見え、内心驚いた。

よもや本当に彼女も早く登校していたとは。なんという奇遇か。

ドアに手をかけたとき、ふと席に座っている人物が綺夢でないことに気付いた。

そこに座っていた女の子は、手に絵ハガキを持って、綺夢の机の中にそっとしまった。

そして彼女はサッと立ち上がった。

僕は呆然と突っ立って見ていた。

彼女はそそくさと教室を出ようとし、ドアのほうを向いた。

必然的に、僕らは目が合った。

その女の子は僕を見て一瞬ビクツとなると、放心した顔で立ち尽くした。

僕は無言でドアを開けた。

中に入る。

彼女に近寄る。正確には、綺夢の机に近付く。

立ち尽くしたままの女の子の眼から涙が溢れる。

「どうして……」

女の子は掠れた声で呟いた。

どうしてだろう。僕にも分からない。

なぜたまたま今日この時間にこの場所に来てしまったのか。

——なぜアンチバベルと偶々居合わせてしまったのか。

僕にも分からなかった。

言葉もなく、僕は綺夢の机の中に手を入れ、絵ハガキを取り出す。

絵ハガキには完成したバベルの塔。Anti Babel の署名。

そして赤い文字。哭くような悲痛な文言。

僕はその文言を心の中で読み上げた。

——「彼はいつもあなたしか見てくれない」

「どうして……先輩」

こずえちゃんの眼は涙であふれていた。

手で口を押さえ、泣きじゃくっていた。

「偶々……としか言いようがない」

僕は静かに呟くと、綺夢の席に着いた。

「僕からも聞いていいかい。」

——「どうして？」

こずえちゃんは立ったまま泣いていた。

「先輩の……横顔ばかり見ていました。」

綺夢さんの顔を憧憬の眼差しで見る先輩の横顔を……。

先輩はいつも彼女を見ている。優しさと憧れに満ちた眼で」

僕は黙って聞いていた。

昨日僕はこずえちゃんが確実に入部すると綺夢に言った。

だが彼女は妙に自信なさげだった。

——「知っていたのだ。気付いていたのだ、彼女は。」

こずえちゃんが入らないかもしれない理由を。」

「最初は親切で優しい人だなんてくらいにしか思っていませんでした。  
変わった人だとも思っていました。  
だからその人が興味あるという言語学と語学をやってみようと思ったんです。  
だけどその人を見ているうちに、だんだんと自分の気持ちに気付いていったんです」

僕はポケットに絵ハガキを仕舞う。  
恐らくこんなことをするまでもなく、綺夢は全てを見通しているのだろうけど。

「想いが募れば募るほど、見えてしまったんです。  
彼が見ているのが自分じゃなくて、別の人だってことが。  
一緒にいればいるほど、辛くなっていきました。  
なのに想いはどんどん強くなっていきました」

僕は無言で聞いていた。  
いつも元気いっぱい得意的に言語学の知識を吸収していたこずえちゃん。  
しかし原動力は別のところにあった。  
僕はそれに全然気付いてあげられないでいた。

「ずっと……ずっと胸にしまっておくつもりだったのに。  
でもそれができなくて、悪いと知りながらこんなことを尊敬する綺夢さんに……。  
綺夢さんはいつだってあたしに優しくしてくれたのに……。  
あたし……あたしって何てダメな子なんだろう……」

こずえちゃんは頭を抱えて泣きじゃくった。  
僕はそっと立ち上がると、彼女の肩に手を置いた。

「分かっているんです。綺夢さんがアンチバベルの正体に気付いているってこと。  
それでいて何も言わずにあたしの相手をしてきてくれたってこと」

何と声をかければいいのか分からなかった。

ただ心の奥から一言だけ、自然と言葉が出てきた。

「……ごめん」

「……何を、ですか」

「気付いてあげられなかったこと」

こずえちゃんは小さく一度だけ頷いた。

「……これからどうする」

「綺夢さんに……謝ろうと思います。乙女さんにも。心配をかけちゃったし」

「仮入部はどうするの」

「こんな問題を起こした以上、あそこにはもういられません」

「それは……たとえ僕や綺夢や乙女が望んでも……？」

「先輩たちが……？」

僕はひとつ頷いた。

「綺夢といるのは楽しかった。

でも、乙女やこずえちゃんといるのも同じくらい楽しかった。

いつの間にかあそこが僕の居場所になっていたんだ。

僕は7月19日が来ても、言語学部になりたいと思う」

「……代わりに丁さんではダメですか。単に頭数が欲しいだけですか」

「君じゃないと駄目だ。僕ら4人だからこそ、バベっていて楽しいんだ。

失くしてから失った物の価値を悔やむなんてことはしたくない。

失くす前に、大切な物を失くさないようにしたい。

だから……一緒に来てほしい」

こずえちゃんは少し止まった後、ゆっくりと、しかし大きく頷いた。

そして泣きはらした顔で言った。

「ありがとうございます、先輩」

彼女の眼には何か決意めいたものがあった。

<告解>

その日の放課後、こずえちゃんは綺夢と乙女の前で深々と頭を下げた。  
——全ての事情を説明した上で。

「今すぐにでも追い出してくださって構いません。言い訳はしません」

こずえちゃんは頭を下げたまま顔を上げなかった。  
綺夢は椅子からゆっくり立ち上がると、こずえちゃんに近寄った。  
そして頭を優しく撫でた。

綺夢は困ったような顔で囁いた。  
「言語学部なのに、言葉を使うのが下手でごめんね。  
わたし、これからもただ皆と一緒にバベっていたい。  
——それしか言葉が浮かばないの」

「……あたし……ここにいてもいいんですか……？」  
「いいも何も」乙女が困惑したような顔で呟く。「こずえちゃんの気が収まるかどうかの  
ほうがずっと心配だったんですよ」

「え？」

思わず僕が声を上げる。  
「乙女も知ってたのか？」  
「哲学乙女は中立な立場で観測するのが癖ですから、みゆちゃんを見るあなたの顔と、あ  
なたを見るこずえちゃんの顔を見ていれば、大体のことは察しが付きましたわ」

なんてことだ。気付かなかったのは僕だけだったのか。  
考えてみればアンチバベルは僕らに何ら実害を与えていない。「あなたが邪魔」という  
絵ハガキの文言も、言語学部が邪魔という意味ではなかった。単に初月綺夢という恋敵が  
壁になっているという意味だったのだ。

そのことに気付いていた綺夢と乙女にとって、アンチバベルなど言語学部への脅威でも  
圧力でも何でもなかったのだ。

こずえちゃんはずっと泣きじゃくっていた。

綺夢と乙女は彼女の背中をさすって慰めていた。

こずえちゃんはただ「ごめんなさい」と「ありがとう」を繰り返すだけだった。



<7月19日>

期末テストが終わり、7月19日がやってきた。

今日は終業式で、授業はない。

午前で放校となり、僕たちは言語学部へと向かった。

テスト前期間はひたすら4人で部室で試験勉強をしていた。

おかげで4人ともテストの結果は上々だった。

綺夢に至ってはまたもや首席を獲得した。

部室の前に着いたとき、図書館から蛍が出てきた。

「あら、綺夢さん。今日も部活？」

「うん、そうだよ」

「ところで今日が何の日か覚えてますよね？」

「う……うん」

蛍は僕とこずえちゃんを見た。

「では仮入部のお二人に伺います。言語学部への入部を希望しますか？」

僕とこずえちゃんは声を揃え、「はい！」と答えた。

<人工言語>

蛭が去り、僕は言語学部の部室へと入った。

あの一件の後、アンチバベルは隠していたポスターを返してくれ、ドアのところには元の崩壊したバベルの塔の絵が貼られていた。

これで晴れて僕も言語学部の部員だ。

ようやく「ウチの部」ということができる。

不思議な気持ちだ。とつくのとうに「ウチの部」という気でいたから。

「さて、1学期の最後は何をバベろうか」

綺夢が腕を伸ばしながら周りに問う。乙女は特に意見を出すこともなく、ピーチティーを淹れに立ち上がった。

「そういえば」僕はふと思い出して切り出した。「僕の語学のラインナップにエスペラントがあるんだが——」

その刹那、こずえちゃんが「そんな国、ありましたっけ」と口を挟んできた。

僕は一瞬戸惑うと、「いや、エスペラント国っていうのがあるわけじゃないんだよ」と言った。

「どこの国の言葉でもない……ですか？」首をひねるこずえちゃん。

「ああ、人工言語さ」

「じんこうげんご？」

「人が作った言語のことだ」

「……言語はもともと人々が作ってきたものじゃないですか」ますます首をひねるこずえちゃん。

「いや、そういう意味じゃなくてね。特定の個人や集団が意図的に比較的短期間で作り上げた言語のことを言うんだ。対して、日本語や英語など、もともとどこかの民族が自然と作り上げた言語は文字通り自然言語という」

「え、言語って作れるものなんですか……!？」

ひどく驚いた様子だ。

綺夢を見ると、なぜか複雑な表情で乙女の淹れた紅茶を見つめている。

乙女は綺夢に目をやると、少し困ったような顔になり、席に着いた。

「人工言語についてバベりたいんですね。

残念ながら、言語学は人工言語を扱いません。

人工言語は言語学の範疇ではありません」

それはまるで死刑宣告のように聞こえた。

「え、でも人工言語も言語だろ。だったら言語学の対象じゃないか」

綺夢はふてくされたような声で、「言語学は自然言語を扱うんだよ。人工言語は含まれない。存在そのものを無視される」と呟いた。

乙女は綺夢と僕を何度か見比べると、少し困惑した顔で再開した。

「人工言語は哲学史、思想史で扱うことになりますわね」

「じゃあ哲学乙女のご高説を賜ろうじゃないか」

乙女は紅茶を一口飲んだ。そして何かを諳んじるように呟いた。

「暗号としての人工言語は古代エジプトやローマにも見つけることができる。最古の暗号は古代エジプトの石碑に刻まれたヒエログリフとされており、これは紀元前 1900 年ほど前のことである。この暗号を人工言語に含めると、人工言語の起源は少なくとも約 4000 年ほど前まで遡ることができる」

まるで何かの本を読み上げたような言葉だった。

「そんなに古くから人工言語はあったのか」

「ですが、一般に最古の人工言語というと、12 世紀のペンゲンのヒルデガルトによる *Lingua Ignota* (未知なる言語) が挙げられます」

「それでも 900 年も前のことか。比較言語学やソシュールの登場より遥かに早いんだな」

「人工言語が最も過熱したのは、17~18 世紀です。このころのヨーロッパでは、既に滅んでいたラテン語が学問や宗教の世界を中心に、知識人の共通語として機能していました。

ところが当時はフランス語など各国の土着語の力が強まっていましたし、ラテン語は西洋人の彼らにとってすら難しかったですし、非ヨーロッパ圏の言語の存在を知ったことでラテン語以外の価値観にも目覚めていました。

そこでもっと簡単に汎用性があって合理的で論理的な——いわゆる完全言語の探求をしようじゃないかと考える人々が出てきたわけです」

「完全言語の探求か。凄い行動力だな」

「ある人々はこう考えました。『ラテン語に代わる共通語を作ろうじゃないか』と」

「今の英語のような国際語がなかったんじゃ、そりゃそう考えるのも仕方ないよなあ」

「また、ある人々はこう考えました。『自然言語は曖昧で論理性に欠けるところがある。曖昧性を排他した論理的で科学的で厳密な言語を作ろう』と」

「そっちは『共通語を作ろう!』という実践的なアイデアに比べ、哲学的な課題を持った人工言語だな」

「そうですね。またある敬虔な人々はこう考えました。『バベルの塔が崩壊する前、人類はひとつの言葉を話していたという。つまりはアダムとイブが喋っていた言語だ。よし、その言語を再現しようじゃないか』と」

「それは言語学や語学というより、むしろ神学的な問いだな」

僕は頭の中を整理した。共通語を目指す人工言語、自然言語の曖昧性を排他した論理的な人工言語、バベルの塔崩壊以前のアダムの言語を再現する人工言語。少なくともこれら3つの企画があったということになる。

「なににせよ、ラテン語の共通語としての機能が低下したことなどが起因となり、17～18世紀に人工言語ブームが興ったのです。

それはもう驚くほどたくさんアイデアが出されました。いま私たちの時代でいくら人工言語を作ろうと思ったところで、どのアイデアも既に400年前に出されているものなのです」

「あらゆるパターンが出尽くされるほど人工言語が作られたんだな」

乙女は言語学大辞典を本棚から出すと、「人工語」の項目を僕に見せてきた。

「なんだ。言語学では人工言語は扱わないと言っておきながら、一応辞書には載ってるじゃないか」

綺夢がこぼれた声で「考察も調査も甘い、中途半端な記事だけだね。本当に書いてあるべきことが書かれてない」と付け足してきた。

なんだろう、こんな様子の綺夢は見たことがない。

「ともあれ、このころの人々は普遍言語の創造に熱中していたわけです。

ところが皮肉なことに18世紀ごろになると、フランス語がラテン語に代わって事実上のヨーロッパの共通語になっていたのです。20世紀の英語と同じですね

「じゃあ共通語としての普遍言語はもう要らないじゃないか」

「ですわよね。そういうわけで人工言語ブームは徐々に下火になっていったのです。

それでも依然として多くの普遍言語案が提出され続けました。そのため1866年、ついにパリ言語学会は普遍言語に関する論文を受理しないと宣言したのです」

「——ちょっと待った。それ、どこかで聞き覚えがあるな」

パリ言語学会……。

「そうだ、言語の起源に関する論文を受理しないとやった連中だ！」

「よく覚えておいででしたね。はい、実はこのとき人工言語も言語学から追い出されていたのです。今日でも人工言語が言語学の範疇にならない原因のひとつがこれです」

「人工言語は……」

綺夢が硬い表情のまま口を開く。

「いくつかの種類に分類されるの。

まず、共通の母語を持たない人々の間で使われる国際補助語。エスペラントはこれに入る。

次に、小説などの中で使われる架空言語。これらは主に芸術的用途で使われるから芸術言語という。トルキンの『指輪物語』などに見ることができる。

そして、何らかの実験として作られる工学言語。できるだけ少ない単語数で何でも表現できるよう作られた言語とか、サピア=ウォーフの仮説の調査のために設計された人工言語とか。

他にも細かい種類はあるけど、おおまかにいえば以上の3つに分かれるよ」

「了解。国際補助語と芸術言語と工学言語だな」

「17世紀ごろの普遍言語論争の主役だった普遍言語は、今の分類でいえばおおむね国際補助語や工学言語に分類されます」乙女が続ける。「1866年に人工言語は言語学から追放されたわけですが、その後も一部の人々の間で細々と活動は続けられました」

「皆が諦めたわけじゃなかったんだな」

「1879年にドイツのシュライヤーがヴォラピュクという国際補助語を作り、なかなかの好評を得ました。

そして1887年にポーランドのザメンホフがエスペラントを作りました。最も有名な人工言語ですわね」

「意外だな」僕は呆然と呟いた。「エスペラントができたのは人工言語が言語学から追放された後だったのか。それどころか、普遍言語論争という人工言語ブームが去った遙か後だったのか」

「はい。このころの言語学はエスペラントを含め、既に人工言語など眼中にありませんでした」

「そうだろうな。そのころといえばソシュールが通時言語学と共時言語学を立ち上げる少し前で、言語学は比較言語学に熱中していたのだから。人工言語なんて見向きもされなかったろう」

「はい。実際エスペラントを作ったザメンホフは言語学専攻ですらありません。ただの眼科医です」

「おいおい……」思わず苦笑が洩れた。「言語学を知らない人間が言語なんて作れるのかよ」

「少なくとも『ゼロから言語学に沿った言語』は作れないだろうね」綺夢が口を挟む。「実際、エスペラントはただ西洋語をごちゃ混ぜにしただけの言語だから」

「ああ、確かにエスペラントを学んでいてそう感じたな」

「太陽は suno で月は luno。明らかに英語の sun やロマンス語——例えばフランス語の lune などから来ている。文法も英語をはじめとしたヨーロッパ語にそっくり」

「ふむ……」

「ほかに、水は akvo、人は homo、手は mano、足は piedo、父は patro といった具合」

「どれもゲルマン語派とロマンス語に詳しければ意味を推察できそうなものだな。キメラみたいな言語だ。ヨーロッパ言語の継ぎ接ぎといふかなんというか」

すると綺夢は指を立てて、ピシッと言い放った。

「要するにエスペラントは通貨ユーロの言語版なんだよ」

言い得て妙だった。

「あくまでヨーロッパの共通語。世界の国際補助語と呼ぶには不公平すぎる」

「確かに」と僕は頷いた。

乙女が続きを述べる。

「正直なところ、ザメンホフは大して人工言語の制作作業に労力をかけませんでした。むしろエスペラントを広める布教活動の方に熱心でしたから。

ちなみに、エスペラントのように既存の言語から語彙などを借りてくる人工言語のことをアポステリオリな人工言語といいます。

逆に、既存の言語から語彙などを借りてこない場合はアプリオリな人工言語といいます」  
「アプリオリとアポステリオリか。アポステリオリのほうが楽そうだなあ。単語とか文法とか借りてくればいいんだもんな」

「ところで最も有名な人工言語はエスペラントと言いましたが、実は見方を変えればヘブライ語かもしれないのです」

「え？」

「ヘブライ語はかつてパレスチナに住んでいたヘブライ人の言語でした。ヘブライ語は時代とともに使われなくなり、2000年以上もの間、ユダヤ教の言葉として聖書やミシュナーなどの研究、儀式、祈りなどに用いられてきました」

「ラテン語と同じ、事実上の死語だったわけか」

「その事実上死語だったものを現代ヘブライ語として復活させたのがイエフダーという人でした。彼は人工言語史上存在したあらゆる制作者の中で、最も人工言語制作に心血と労力を注いだ偉人です。もっとも、現代ヘブライ語を人工言語に入れればの話ですが」

珍しく乙女が主観や感情を交えた言い方をした。

「そんなに頑張ったのか」

「ヨーロッパの言語を継ぎ接ぎして言語を作り、後は普及活動ばかりして上手く時流に乗って名声を獲得しただけのザメンホフに比べ、イエフダーはおよそ40年もの長きに渡ってコツコツと作業を続けました。

あまりに過酷な作業だったのでしょう。彼は立ったまま執筆活動ができる特殊な机まで用意して作業を続けました。彼の名が知られていないのは非常に残念なことですわ」

きっと乙女の言葉は、苦労をした経験のある人間ほど共感できるのだらうなと思った。

「一方、芸術言語で有名なトルキンは、第二次世界大戦ごろに『指輪物語』を書き、その中で人工言語を展開しました。

人工言語史にマイルストーンを置いた人物として、イエフダー、トルキン、ザメンホフは覚えておいたほうが良いでしょう」

「人工言語といえばエスペラントと相場が決まっていると思っていた自分の無学ぶりが恥ずかしいよ」僕は鼻を掻いた。

「ところで、先程から西洋ばかりが舞台だが、東洋では何も人工言語に関する出来事はなかったのか」

「東洋では目立った人工言語ブームはありませんでした。ただ、朝鮮は特筆すべきです」「なぜ？」

「人工文字であるハングルを実用しているからです。それもキリル文字などと異なり、まったくのゼロから作られたアприオリな人工文字です」

「えっ、ハングルって人工文字だったのか!？」

「1446年に李氏朝鮮第4代国王の世宗が訓民正音の名で公布したものです。実際に普及するまでにはそれはそれは大変な歴史があったのですが、ともあれ今では朝鮮語を書くのに使われる公式な文字です。

アприオリな人工文字を公式に用いている先進国は韓国以外にありません。その点で、韓国は人工言語に関して偉大で先進的な国家といえますよね」

「ふむ……。ときに平仮名は漢字の崩し字だが、これは人工文字じゃないのか」

「それは自然とできた文字です。人工文字ではありません。また、仮に人工文字だったとしてもアポストリオリにすぎません。ハングルはゼロからアприオリに作られたという点でも画期的なのです」

「西洋に普遍言語論争あり、東洋にアприオリ人工文字ハングルあり、といったところか。

ところで、エスペラント以降の人工言語界はどんな状況だったんだ？」

「エスペラントが大きな好評を得たため、その追従者とアンチがたくさん現れ、エスペラントを改良した言語が数多く作られました。もっとも、結局どこにも二匹目のどじょうはいなかったわけですけど。



なお、エスペラントが西洋語に偏重しすぎているという欠点を補うため、より広い範囲の自然言語から語彙を拝借するという人工言語もありました。

総じて 20 世紀はエスペラントという巨木に対抗する無数の苗木が生えた時代でした。20 世紀で人工言語といえば、ほぼ国際補助語を意味します」

「では現在の 21 世紀はどうなっているんだ」

「20 世紀末になるとパソコンとインターネットの普及で、人工言語制作は容易になり、更に数多くの言語が主にインターネット上で発表されるようになりました」

「技術が環境を変えたんだな」

「ところがこの時代は既に英語が国際語として存在していました。一方、エスペラントは人工言語の中で一番多くのシェアを得ながらも、ユーザー数はせいぜい自称 100 万人にしかなかったんです」

「英語は 10 億人以上のユーザーがいるから、エスペラントが 100 万人で国際補助語を謳うのは現実的でないな。まして 100 万人という数もどこまで信用できるやら」

「エスペラントでさえその惨状でしたから、言語制作者たちの中で『国際補助語を作ってもどうせ意味ないのでは?』という思いが強くなっていきました。」

まあ実際、言語は優れているから広まるわけではありません。言語が広まる要因は人口、文化力、経済力、軍事力などです。言語自体の性能やシステムは関係ありません。どんな合理的な言語を作ろうとも、広まる要因を満たしていなければ普及しないのです。

国際補助語はこうして徐々に下火になっていきました。代わって数が増えたのが芸術言語です」

「ほう」

僕は自然と頷いていた。相変わらず乙女の説明は順を追っていて分かりやすい。

乙女は長い黒髪を掻き上げた。黒い滝のように髪が流れる。そのさまに僕は思わず見とれた。そして彼女は言葉を続ける。

「パソコンとインターネットは個人が持つ力を大きくしました。たった一人のできる企画の規模が大きくなったのです。21 世紀は個人が力を持った時代といえます」

「確かにそうだな。音楽も 90 年代までは企業が独占し管理し、流行すら操作していた。だが 00 年代になると動画サイトやデスクトップミュージックなどの隆盛により、個人制

作の曲が思わぬ人気を博すといった事態が起きた。確実に 21 世紀の個人は 20 世紀より力を持っているといえるな」

「芸術言語は小説や漫画やゲームなどといったコンテンツの中で使われる言語です。21 世紀はコンテンツを個人が気軽に制作できる時代ですので、自作コンテンツの中で芸術言語を使おうと考える人々が増えたわけです」

「例えば？」

「異世界物のファンタジー小説を書いたとしますわね。異世界なのに登場人物が日本語や英語を使うのはおかしいと思いませんか？」

「確かに、ご都合主義だな」

「そこでその架空の世界や国の言葉が作者によって作られるわけです。ここに芸術言語の需要が生まれました。個人がコンテンツを気軽に作れるようになった結果、芸術言語の需要が増えたわけです。」

ちなみにこの傾向は企業も同じで、00 年代以降のファンタジーゲームには芸術言語が使用される割合が 90 年代より増えました」

「ということは、21 世紀は芸術言語の時代だと？」

「そういうことになりますわね」

なるほど。人工言語史についておおまかなことは分かった。

まず、言語学は原則として人工言語を扱わない。

人工言語にはエスペラント以前に 17 世紀に普遍言語論争という一大ブームがあった。

人工言語史にランドマークを置いたのはイエフダー、トールキン、ザメンホフ。

人工言語には主に国際補助語、芸術言語、工学言語がある。

20 世紀はエスペラントの影響が色濃い国際補助語の時代。

21 世紀は個人の時代で、芸術言語の時代。

「で、21 世紀の人工言語界もまだ西洋が先進的なのか」

すると、それまで黙っていた綺夢が複雑な表情で口を開いた。

「違う。21 世紀初頭において最も人工言語理論が発達していたのはこの国、日本」

「え？」意外だった。「そんなに凄い論客がいたのか。いったい誰なんだ？」

すると綺夢は透き通るような声で言った。

「——その人の名はセレン＝アルバザード」

一瞬空気がしんと静まり返った。

「1991年、彼はわずか10歳でアルカという人工言語の制作に携わる。

2005年には『新生人工言語論』というウェブサイトで新たな人工言語理論を提示し、人々を啓蒙した。この啓蒙活動は韓国など隣国からの客人を招いたほどだったの。

彼は人工言語に人工世界（人工文化と人工風土）という考え方を改めて導入したり、その言語固有の語法の重要性を強調したり、当時の日本には存在しなかった人工言語の作り方を解説したりといった啓蒙活動を行った。

2011年、活動20周年を記念して『人工言語学研究会』を発足。言語学から追放された人工言語をあえて使って言語学するという、孤軍奮闘で異端で画期的な活動を行った。

また、この年には自身の人工言語理論を記した著書を発表し、芸術言語であるアルカと日本語で書かれた小説も出版している」

「ずいぶん精力的だな」

「2012年、彼は人工言語界の論客が総じて言語学の知識に乏しいことを憂い、一般人でも言語学の概説が分かるようにと、物語仕立てで言語学を解説する小説を執筆し、これも出版した。

当時日本には物語仕立てで言語学概説を学べる書籍は存在しなかった。これもまた彼が初めて行った画期的な啓蒙活動のひとつ。そしてその後も彼は活動を続けた。

こうして彼は人工言語界を啓蒙し、同時に人工言語界と言語学界の距離を縮めようと尽力した」

綺夢は言葉を区切った。

「ねえ。これってわたしたちに似てると思わない？ わたしと貴方は言語学と語学という、近くて遠い位置にいた。でも互いに惹かれ合い、距離を縮めた。

彼もまた言語学と人工言語という、近くて遠い2つの分野に身を置いていた。そして2つの世界を融和させようと尽力した」

「……なんというか、壮大だな」

「彼は21世紀で初めて人工言語界に大きな転換点を置いた人物。

人工言語の四傑を挙げるなら、わたしはイエフダー、セレン、トールキン、ザメンホフをこの順番で挙げるよ」

ハッキリと綺夢は言い放った。

一番有名なエスペラントを作ったザメンホフが人工言語制作者としてはしんがりだという事実が僕には小気味良く感じられた。誰も知らない隠れた名店を見つけたような気分になった。

「ときに、その人が色々な啓蒙活動をしたというのは分かったが、その人が作ったアルカという言語は特筆すべきものだったのか？」

「アルカは、ゼロから作られたアプリオリな人工世界を持った、ゼロから作られたアプリオリな人工言語を、万単位の語彙規模で作り上げたという点で、史上初の試みだったの。そこまで精巧な人工言語はそれまで存在しなかったから。

アルカの全ての語には語源・初出年代欄が付され、固有のオンライン辞書には語の詳細な語法注記や文化記述が付く。たった一語の説明が卒論並みに長い項目すらある始末。

しかもアルカには小説、漫画、イラスト、ゲームといった多種多様なコンテンツが存在した。これも人気を呼んだ理由のひとつ。

芸術言語にもかかわらずユーザーの国籍は広く、30ヶ国以上に及んだ。この特徴により、芸術言語でありながら国際補助語以上に国際補助語としての機能を有していた。

その上作者は大学院で言語学を専攻していた。それどころか、そもそも彼が大学に入った目的が人工言語を昇華させるために言語学を学ぶため。いったい世の中の誰が人工言語を作るために自分の人生を棒に振って進路選択をするというの？」

綺夢は悩ましげな顔のまま語り続けた。なんだか心の声を吐露しているようにも見えた。

大学受験を控えた僕の心にも彼女の言葉は深く突き刺さった。僕は自分の専門分野に人生まで捧げることができるだろうか……。その気概があるだろうか……。

そして彼女はこう締めくくった。

「主観的にも客観的にも、アルカは世界一精巧に作り込まれた人工言語だったんだよ」

「ふむ……」

僕は唸ることしかできなかった。

こずえちゃんを見ると、「そんな凄い人が日本にいたなんて……」と呟いていた。

綺夢はちよつと肩をすくめる。

「まあセレンは日本国籍ではあるけど、フランス人と韓国人の血を引いているから、アルカが純粋な和製人工言語とっていいのかは微妙なところだね。

それに彼はアルカの主な作者でしかないの。アルカは数十名の人間による共同制作物だからね。そういう意味でも国産とっていいのかは微妙なところ」

「一語一語が詳細に作り込まれた言語に万単位の語彙を付すというのは凄い話だな」

「ふつう辞書って出版社や国家が尽力して何十人何百人もの人間を巻き込んで作るでしょ。ところがセレンはたった一人でアルカの辞書を執筆・編集してしまったの。言語を作り、小説などを書くかわら、一冊の市販書籍並みの辞典を作り上げてしまったのよ」

「恐ろしく精力的な人だな」

辞書をゼロから作る——。少し想像しただけでも空恐ろしい。だって、最初は何もないまっさらな白い紙しかなかったはずだ。そこにたった一人の人間が文字を書き込み、ついには市販書籍並みの辞典に仕立て上げてしまった。

いったいそこにはどれほどの苦労があったことだろう。最初何もなかった状態は、まるで身一つで大海原に放り出されたような気分だったのではないか。どこに進めばいいのかわ、何をすればいいのかわ。そんなことも分からない。眼前に広がるのはただ何も無い海。絶望ともいえる孤独感、無力感、寂寥感があったことだろう。よくそれを乗り越えたものだ。「ちなみにアルカの辞書は幻日辞典というの。幻はアルカを意味する漢字だよ。

アルカについてはネット等ですぐ調べることができるよ。サイトの情報はとても小集団が作ったとは思えないほどの質と量だから、きっと驚くと思う」

「しかしそれだけの実力があるなら、なぜもっと世間に知られていないんだ」

すると綺夢は複雑な顔で呟いた。

「世間は言語学以上に人工言語に興味を示さないからだよ。

どれだけ高尚でも、どれだけ人生棒に振って頑張っても、一般人は低俗でくだらない物を好んで消費する。俗悪なものには金を落とし、高尚でマイナーな学問には目もくれない」  
「……そうか」

言語学というマイナーな学問をやっている僕には身につまされる言葉だった。まして、そんなマイナーな言語学からすら追放された人工言語という超マイナーな世界に人生を捧げたその人の心境たるや、想像を絶するものがある。

「ただ、人工言語界ではアルカは非常に有名だよ。人工言語史のランドマークだからね。人工言語を検索したことがある人なら、十中八九アルカを目にしているはずだよ」  
「それは凄いな」

「ただ、肝心の欧米での知名度はいまいちな。人工言語の心臓である辞書がもともと日本語で書かれていたのが最大の原因だと思う。

セレンが英語圏の人間だったら——特に21世紀初頭の地球を牽引していた欧米社会の人間だったら——もっと容易に世界を動かしていたのだろうけど。

日本語という、西洋人にとって辺境の言語を使っていたのが、人工言語界の発展が妨げられた最大の原因だと思う」

「なるほど。確かに日本語はGDPのわりにはマイナーな言語だもんな」

「彼よりも遥かに前時代的な人工言語の知識しか持たない人間がアメリカなど欧米社会では人工言語の雄として跋扈している。それが情けないことに現実なの。

実力があるのに評価されない。さぞかし悔しいだろうね。何十年も受け入れられずに世間の無理解と戦ってきた彼は、いったいどんな気持ちなんだろうね……」

綺夢は寂しそうに呟いた。

僕は不思議に感じた。綺夢はサピア=ウォーフの伝説や、言語と文化の関係について述べるたびに、何度か複雑な表情を見せてきた。今回の複雑な表情はその延長線上にあると思う。というより、むしろ彼女の複雑な表情の原因は人工言語にこそあるのではないかな。

アприオリな人工世界を持ったアприオリな人工言語。そして言語学から追放された人工言語。それらが一本の線になって綺夢の複雑な心境を奏でているかのように見えた。

人工言語について語るときの綺夢の表情は複雑だ。乙女があからさまに気を使っていることから、綺夢の中で何か特別な感情があることは明白だ。

僕が思うに、彼女は自分の心境を人工言語に重ねているのではないかな。言語学は世間から評価されず、認知されにくい。人工言語はましてそうだ。

綺夢という人間も、実力があるのにそれを正当に評価してくれる友人や理解者が少ない。それどころか世界のどの国にも自分の居場所を見つけられず、常に排他されてきた。

——綺夢は人工言語の不遇に自分の不遇を重ねているのではないかな。

僕はそう思ったが、それを口にするのは彼女を傷つける気がして、黙っていた。

気付けばピーチティーは2杯目が空になっていた。

綺夢はひとしきり人工言語について語ると、なんだかかえって肩の力が抜けたようになり、普段の柔らかな表情に戻った。

どうも人工言語について悶々とした想いがあったのではないかと。そしてそれを人に語ったことで、彼女の中で一定のカタルシスがあったのではないかと。

綺夢は一息つくと、3杯目のピーチティーに手を伸ばしながら皆を見た。

「ところで、夏休みの間はでしょうか」

彼女は話題を変えてきた。僕は一拍置いてから答えた。

「運動部だと練習があるな。もっとも、3年は引退だが」

「ウチはどうする？」

「そうだなあ」

僕はうーんと背を伸ばした。

「どうせ毎日暇だし、ここでバベリながら受験勉強でもするよ。綺夢や乙女と勉強したほうが受験勉強もはかどるしな」

「じゃあ夏休みもここに集合ね？ 乙女とこずえちゃんは？」

「私はみゆちゃんが来るならお伴しますわ」

にこりとする乙女。本当に綺夢のことを気に入っているんだなあ。

「あたしも、先輩たちに勉強を見てもらえると助かりますし、来年はあたしが部長になってこの部を存続させなきゃいけないんですから、しっかりバベリたいと思いますっ！」

こずえちゃんは両拳をぎゅっと握りしめた。

そういうわけで、どうやら僕らの長い夏休みが始まりそうだ。

そんな7月19日の放課後だった。

<すれ違うふたつの同じ嘘>

7月19日の放課後。その後のちょっとした余談。  
部室を最後に出たのは僕と綺夢だった。  
乙女とこずえちゃんは用事があるので先に帰った。

帰りかけ、綺夢を図書館に誘った。  
僕は語学コーナーに立ち、本を見ていた。  
綺夢は言語学コーナーに立ち、本を見ていた。

僕は気になった本に手を伸ばした。  
すると白く細い指が僕の手に触れた。  
僕は少し笑って尋ねた。  
「——今のも、わざと？」

綺夢は微笑みを浮かべると、「どっちでしょう」と呟いた。  
僕はそのまま彼女の手を優しく包み込むように握りしめ——  
——なんてことはなく、黙って手をどけた。

うん、僕にはそんな真似はできない。  
僕にできるのは、せいぜい「これ」だけ……。

僕は語学の棚に目をやりながら、小さく呟いた。  
多分、聞こえなかったことにすれば聞こえなかったことになる程度の声で。

「——誕生日、おめでとう」

左側の空気が一瞬驚いて和らぐのを肌で感じた。  
僕は紅い顔のまま、語学の棚を見ていた。



左側から声が聞こえた。

「……どうして今日だって知ってたの？」

僕は短く答えた。

「学生証。先月、見たときに」

綺夢はクスッと笑った。

「初めて会ったばかりの女の子の誕生日を一度見ただけで覚えたの？」

もっともな質問だった。

だから僕はひとつ謝らなければいけないんだと思う。

綺夢と、今までずっと僕の心の声を読んできてくれた人に。

なぜなら、あるひとつのことを隠してきたから。

一年前の6月の梅雨の中、図書館帰りに傘を貸してあげた女の子。

その子のことをずっと覚えていたのを隠していた件について、僕は一言謝らなければならぬんだと思う。

この一年ずっと僕の横の言語学の棚で本を読んでいた彼女と、僕の心の声を読んできたあなたに。

—了

## <あとがき>

私の名はセレン＝アルバザードという。人工言語アルカの作者だ。この名前はアルカで付けられたものだが、日常的に戸籍名を用いない私にとっては、この名前こそが本名だという認識がある。

私がインターネットで初めて人工言語について調べたのは00年から01年のことだ。初めてアルカに携わったのは91年だが、そのころは仲間内での共同制作をしていた。

97年か98年にアルカや金田一春彦の『日本語』をきっかけとして、言語学に興味を持つようになった。それまで理系の進学校に通っていたが、大学でアルカをやるために文転。人工言語をやるために大学で勉強するという、人工言語界でも異例な進路選択をした。

大学入学前に既に言語学の専門書を読み漁っていたため、学部生向けの授業で得るものではなく、試験前は学友に言語学を教える役目を担っており、学部生のころから大学院の授業に出るなどしていた。大学院での専攻はむしろん言語学だ。

00年にアルカの制作を私一人が請け負うことになり、01年から作業を開始した。一人でゼロからアルカを立て直すにあたり、初めてインターネットで人工言語について調べた。要するに、人工言語の作り方を調べようとしたのだ。

ところが当時の日本に人工言語の作り方を解説したサイトは存在せず、個別人工言語のサイトがいくつか散見されるだけだった。しかもどの言語も作り込みが甘く、とても現実の人間のコミュニケーション用としてまともに使えそうなものではなく、参考のできるものではなかった。結果、私は自力でアルカを作りなおすことにした。

05年の秋。私はアルカの辞書である幻日辞典の執筆に相変わらず追われていた。アルファベットはABCから始まるが、アルカはtkxsという文字の順序で始まる。幻日辞典の見出しもこのtkxsという順序で並べるべきだと考えた。

しかしそれを実現する方法が見当たらなかったため、実に5年ぶりにインターネットで人工言語について調べた。同好の士がいればその人に方法を聞こうと考えたのだ。ところがインターネット上の人工言語界は00年から旧態依然で、なんら進歩が見られない状況だった。

結果的に文字を tkxs 順に並べる企画自体は成功を見るのだが、そのやり取りをしているうちに私の中で新たな目標が生まれた。

それは自分自身が人工言語界を革命し、啓蒙しようというものだった。

当時は人工言語について見識や経験を持っている人間は皆無で、それどころか言語学について学部生レベルの知識すら持っていない人間が大半を占めるという惨状だった。

皮肉なことに、かつて人工言語の作り方を調べた私が、自分の手で人工言語の作り方を指南することになったのだ。

また、人工言語の作り方だけでなく、人工言語史などについても論じ、通時的に人工言語を俯瞰させるように啓蒙した。

11年に私は活動20周年を記念して、人工言語学研究会を発足した。これは人工言語で言語学することを目的とする。

同年、『人工言語学・アルカ』、『紫苑の書』という書籍を出版した。この出版はISBNを取得し国会図書館に納本させ、その内容の著作権者が私であることを国に保証させるためのものであった。

売ることが目的ではなかったのに、無料で読める電子書籍版を出版に先駆けて公開した。にもかかわらず、わずか3ヶ月もしないうちに書籍は両方とも完売した。

12年の時点で、「人工言語」を検索するとアルカがエスペラントより先にサジェストされるようになっていた。また、アルカのサイトが最初のページに来るようになっていた。

また、私の人工言語理論やアルカは英語や韓国語になり、海外へ向けて発信されるようにもなった。

これにより、人工言語界における地位と名声は確立し、自身の人工言語理論も人工言語界に十分流布されたものと判断した。

これを受けて私は次の段階へと駒を進めた。05年の時点で私は人工言語界の人間があまりに人工言語の知識を持っていないことに閉口したが、同時に彼らのほとんどが言語学の最低限の知識すら持ち合わせていないという事実には驚愕した。

このとき私は人工言語と言語学について彼らを啓蒙せねばならないと考えた。そしてまず先に人工言語のほうを優先して啓蒙することにした。

それが一段落ついたので、12年に言語学について啓蒙することにした。

人工言語に興味を持つ層は、必ずしも語学や言語学に興味を持たない。不思議なことにそれが現実だ。だから言語学の概説書をボンと渡しても、なかなか理解してくれない。

言語学の知識がない人間でも簡単に読める概説書がほしいと思った。ところがどの書店を探しても、置いてある概説書は大学の文系学部生向けのものしかなかった。

私の学友もそうだったが、一般に言語学にそんなに興味を持っていない人間にとってはこれらの概説書は非常に難解なのだ。その上、言語学に興味を持っていたとしても、それなりに難しい。

05年から12年にかけて漸次的に、なぜ言語学の概説書に易しいものがないのか考えた。私は00年代後半に、語学教材の出版社で英語編集をしていた。高校英語やTOEICなど、需要のある分野には企業は資金を投入する。結果、良質で分かりやすい教材が生まれる。一方、言語学は一部の大学生しかやらないため、英語教材と比べて圧倒的に需要がない。こういうマイナー分野で出版社がどう戦うかという、大学教材として採用されるような概説書を作り、書店での売上より大学からの採用での安定した部数消化を狙うのだ。

大学教材として採用してもらうには、営業が売り込むほかはない。売り込むときに最も使いやすのが、著者陣のネームバリューだ。どこそこ大学の教授などというような肩書きが最低でも必要とされる。

TOEICや受験英語の教材と違って熾烈なマーケットではないから、ユーザーにとっての分かりやすさなどは二の次になる。もちろんどの概説書も平易さを売りにするのだが、実際には口だけで、TOEICや受験英語の教材と比べて遥かに難解な本ができあがる。

言語学が数学や哲学のように高校までの学習過程にあれば、言語学のマーケットは遥かに大きくなる。すると各出版社がこぞって概説書を出すため、より分かりやすく取っ付きやすいものが生まれる。そういう切磋琢磨が言語学界にはないため、概説書はどうしても不親切になる。

これは高校数学の教材と大学数学の教材にも言える。大学数学はやる人口も少ないし、目的も単位修得だけだ。従ってマーケットは小さく、出版社は力を入れず、高校数学に比べて分かりやすい親切な教材は刊行されない。

言語学の概説書に分かりやすいものがないのは、マーケットが小さいのが最大の理由だ。また、大学教材として採用されるようなものでなければ出版社は刊行しないので、ある程度大学教材にふさわしい「お固い感じ」を残しておかねばならない。平易すぎて取っ付きやすすぎるのは大学教材としてはかえって不適切なのだ。

しかし学生の立場、あるいは言語学に興味を持っているが敷居が高いと感じている人にとって、それはどう映るだろう。彼らにとって、大学側の体裁など知ったことではない。そんな理由でわざわざ分かりにくい教材を読ませられるのはいい迷惑だ。

以上を踏まえた上で、私は考えた。

今までにないような取っ付きやすい言語学の概説書があれば、それは言語学に触れてみたい人の最初の一步として良い手助けになるのではないか。

そんな参考書を考えたときに浮かんだのが、90年代によく売れた『ソフィーの世界』と、00年代に出た『数学ガール』だった。どちらも私の愛読書だ。

前者は哲学について、後者は数学について物語仕立てで説明した概説書だ。小説形式で読める哲学書や数学書といってもいい。

私はこれを言語学でできないかと考えた。というのも、自分自身00年に論理学を物語仕立てで解説した『ミールの書』という書籍を書いているからだ。自分の十八番の言語学なら、私にも執筆できる。

これまでに物語仕立てで読める言語学の概説書は存在しなかった。言語学の概説を小説形式で読めれば、それは初心者にとってきざ取っ付きやすいことだろう。

しかし同時に、教材屋時代の私が自分に警告しだした。

哲学と数学は倫理と数学の時間に高校でやる。国民のほとんどが触れている。だが言語学は文系大学生のそれも一部しか履修しない。マーケットの規模が違いすぎる。『ソフィーの世界』や『数学ガール』が売れた要領で売れるわけがない——と。

言語学の概説書は大学教材を販路に見込んで作られている。小説気分で手軽に読める本が大学教材として採用される可能性は低い。

私自身、語学出版時代に大学教材も作っているから、そのあたりの事情は詳しい。言語学を小説化しても採用枠に入らないのはプロの目から見て明らかだった。

需要のある TOEIC や英検の大学教材ですら採用を得るのは非常に厳しいのだ。コマ数も需要も少ない言語学でとなれば、採用の厳しさは途方もないレベルに達する。言語学で名の知れた教授陣に書かせ、大学教材としての体裁を整えたものですら、採用は厳しい。お手軽に読める小説などが採用される確率は、宝くじの一等に当たるより低い。

では大学教材以外に一般人向けの販路を考えたらどうだろう。素人は単純にそう考えるかもしれない。だがそう簡単には出版社は動かない。出版社の腰は案外重く臆病だ。

今までやったことのない販路を開拓するのは、よほどの勝算がない限りやらない。たとえ一人の編集が良いと思っても、周りの編集や営業などに潰されてしまうのだ。

言語学の場合、哲学や数学と違って高校までの教育課程に入っていない。圧倒的に知名度が低い分野だ。よって、どれだけ平易に書いたとしても、言語学に興味を持っている一般人の人口そのものが少ないため、一般人に向けた商品化も難しい。

大学教材として不適切で一般人にも需要がないとなれば、それほどの出版社でも出そうとはしない。

言語学に関心のある人間にとって手軽に読める入門書がいかに有り難かろうが、出版社は慈善事業をしているわけではないので出さない。というか出せない。

結局は商売なので、ユーザーにとって本当に良い物よりも採算をふつうは優先するのだ。社会的意義がある本だとしても、前例のない快挙だとしても、啓蒙的だとしても、初学者にとって歓迎されるべき作品だとしても、巡り巡って言語学界を華やがせるものだとしても、あまりにニッチすぎて出すことが難しいのだ。

そういった出版社の台所事情をよく知っている私は、企画時にこれは私費でやるしかないかと算段した。

このとき私は大槻文彦を思い出した。彼は国語辞典の『言海』を私費で刊行した。言海のように、私は自分の力で世の中を啓蒙しなければならなかった。

私費といえば、エスペラントも作者のザメンホフが私費で出版している。どうやら私たちは同じ道を辿っているらしい。

ときに言海というのは良いネーミングだと思う。言葉の海。私はかつてアルカをゼロから作りなおしたとき、ワープロソフトの真っ白な画面を見て途方にくれた。何から手を付けばいいのかも分からない。文字通り、取り付く島もない。本当に言葉の海に投げ出されたかのような気持ちだった。

この真っ白な画面に文字を打ち込み、本来なら何十人・何百人がかりでやるような辞書制作作業をたった独りでしなければならぬ。不安になった。投げ出したかった。でも、それが自分に与えられた使命だと心が知っていた。だから私は言葉の海を泳いだ。言海というネーミングに通ずる思いがある。

さて本書だが、念のため私は言語学関係の書籍を出している出版社に企画を持ち込んだ。だがまず聞かれるのは大学教材として採用の見込みがあるかということだった。まったく自分の予想通りの展開で、どこの会社も台所事情は同じなのだなど痛感した。

どこかの出版社が間違っ拾ってくれれば儲け物だという腹づもりで声をかけたが、採算の見通しすら立てられない無能な編集者はいなかった。大学教材にもならなければマーケット自体が小さく一般人の購入も見込めない書籍を刊行する蛮勇を持った版元はなかった。

だが私は諦めなかった。教材屋時代に痛いほど経験してきたからだ。良い本なのに、市場に合わずに出せない本が数多くあることを。

世にあるマニアックな本など、出版社の内情を知っている人間からすればまったくマニアックではない。刊行している時点で、刊行すらできなかった数多ある書籍より、よほどメジャーなのだから。

今は良い時代だ。インターネットがある。出版社を通さなくとも発言できる。そのせいで玉石混交になってしまっているものの、本当に良い作品はインターネットの情報や自費出版の中に存在する。一方、出版物は一定のクオリティを持った無難な代物だ。

情報のクオリティに序列を付けるならば、インターネットの情報や自費出版のほんの一握りが至高の存在で、その次に出版物という無難なものが来て、最後に9割方のインターネットの情報や自費出版が来る。

本当に良いものは大多数の一般人の最大公約数的な支持を得られないがために、世に出ることができないのだ。

しかし現代はそれができる。自費出版でもよいし、インターネット上で公開してもよい。

自費出版するメリットはISBNを付けて国会図書館に納本させ、自分が著作権者であることを国に保証させることしかない。持論を広めるという意味での機能はほとんどない。それぐらい自費出版は売れない。商業出版ですら売れない時代なのだから。

私が今回本書を出版したのは、言語学を物語仕立てで解説した初めての概説書を作ったのが自分であることを証明したかったがためだ。ユーザーを啓蒙するという本来の目的を考えれば電子版を無料で公開すればよく、インターネットだけで事足りる。

世の中は徐々に電子書籍に向けて動いていこう。出版社を通さずとも個人が気軽に出版できる時代が来て、今まで編集や営業に踏み潰されてきた隠れた名作が陽の目を見る機会に恵まれることだろう。

やがて目の疲れない非発光型のディスプレイが普及し、画面を折りたたんで携帯できるPCができ、バッテリーの寿命も長くなり、無線通信の速度が上がる未来が来る。

そのとき、紙の本と電子データ化された書籍の垣根はなくなる。PCの画面を紙のように扱えるのだ。むしろ紙と違ってかさばらないし検索もできる分、電子書籍のほうに軍配が上がるだろう。

紙の本はビデオテープやMDと違ってなくなりほしくないだろう。骨董品やアンティークのようなものとして細々と生き残ると思われる。

そうなれば金儲けが目的でなく啓蒙活動が目的な私のような人間にとっては良い時代となる。自費出版をせずとも紙の本の感触のまま世間の人に自著をばらまくことができるからだ。ISBNを取得したければ代行業者に頼めばよく、著作権者を明示することも容易だ。



そのような時代が早く来ることを祈っているが、かといってそうなるまで待つわけにもいかず、今回はこうして出版したわけだ。

本書を通じて言語学に興味を持ってもらえれば嬉しい。本文中に挙げた書籍のほか、参考文献に上がっている書籍も手にとっていただけるとありがたい。

人工言語界にいる人間を啓蒙することがもともとの目的だったが、それを越えて言語一般に興味のある人を言語学の世界に誘うことができれば幸いだ。

2012年5月。最愛のリディアへ捧ぐ。

<参考文献>

- seren arbazard(2011)『人工言語学・アルカ』V2-Solution
- Langacker, R. W.(1985) "Observations and Speculations on Subjectivity" Haiman (ed) "Iconicity in Syntax" John Benjamins Publishing Company
- (2008) "The relevance of Cognitive Grammar for language pedagogy" Sabine De Knop (ed) "Cognitive Approaches to Pedagogical Grammar: A Volume in Honour of Rene Dirven (Applications of Cognitive Linguistics)" Mouton De Gruyter
- Leonard Talmy(2003)"Toward a Cognitive Semantics - Volume 1: Concept Structuring Systems" A Bradford Book
- (2003b) "Toward a Cognitive Semantics- Volume 2: Typology and Process in Concept Structuring" A Bradford Book
- Benjamin Lee Whorf(1964)"Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf" John B. Carroll (ed) The MIT Press
- 安藤貞雄(1986)『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店
- (2000)『「日本語論」への招待』講談社
- (2004)「言語における〈主観性〉と〈客観性〉の言語的指標 (1)」『認知言語学論考』No.3 pp1-49 ひつじ書房
- (2005)「言語における〈主観性〉と〈客観性〉の言語的指標 (2)」『認知言語学論考』No.4 pp1-60 ひつじ書房
- (2006)『英語の感覚・日本語の感覚—“ことばの意味”のしくみ』日本放送出版協会
- (2007)『日本語と日本語論』筑摩書房
- 井上京子(1998)『もし「右」や「左」がなかったら』大修館書店
- 今井むつみ(2010)『ことばと思考』岩波書店
- アンリエット=ヴァルテール(2006)『西欧言語の歴史』藤原書店
- アンナ=ヴィエルジュピツカ(2009)『キーワードによる異文化理解』而立書房
- (2011)『アンナ先生の言語学入門』東京外国語大学出版会

- 梅棹忠夫監修(1995)『講談社カラー版日本語大辞典(第二版)』講談社
- F.ウンゲラー(1998)『認知言語学入門』大修館書店
- ウンベルト＝エーコ(1995)『完全言語の探求』平凡社
- 大堀寿夫(2002)『認知言語学』東京大学出版会
- 影山太郎 et al.(2001)『日英対照動詞の意味と構文』大修館書店
- (2009)『日英対照形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店
- (2011)『日英対照名詞の意味と構文』大修館書店
- 風間喜代三 et al.(2004)『言語学第2版』東京大学出版会
- 学研辞典編集部(2005)『13か国語でわかる新・ネーミング辞典』GAKKEN
- 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- (2007)『役割語研究の地平』くろしお出版
- 亀井孝 et al.(1995)『言語学大辞典第6巻術語編』三省堂
- 河上誓作(1996)『認知言語学の基礎』研究社出版
- 北原保雄編(2010)『明鏡国語辞典第二版』大修館書店
- 金両基(1984)『ハンゲルの世界』中央公論社
- 金田一春彦(1988)『日本語〈上〉』岩波書店
- (1998b)『日本語〈下〉』岩波書店
- 近藤健二(2006)『言語類型の起源と系譜』松柏社
- 佐久間淳一(2008)『言語学基本問題集』研究社
- 佐竹秀雄編(2009)『デイリーコンサイス国語辞典』三省堂
- エドワード＝サピア(1998)『言語—ことばの研究序説』岩波書店
- 小学館国語辞典編集部(2001)『日本国語大辞典第二版』小学館
- イブ＝スウィーツァー(2000)『認知意味論の展開—語源学から語用論まで』研究社出版
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波書店
- ジャレド＝ダイヤモンド(2000)『銃・病原菌・鉄〈上巻〉—1万3000年にわたる人類史の謎』草思社
- (2000b)『銃・病原菌・鉄〈下巻〉—1万3000年にわたる人類史の謎』草思社
- 田中春美 et al.(1982)『言語学演習』大修館書店
- 辻幸夫(2002)『認知言語学キーワード事典』研究社
- 中右実 et al.(1997)『語形成と概念構造 日英語比較選書(8)』研究社出版

- 中島平三(2009)『オックスフォード言語学辞典』朝倉書店
- 中村芳久(2004)「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」中村芳久(編)『認知文法論Ⅱ』pp3-51 大修館書店
- 新名美次(1994)『40 カ国語習得法』講談社
- 新村出編(2008)『広辞苑第六版』岩波書店
- ジェイムズ=ノウルソン(1993)『英仏普遍言語計画』工作舎
- スティーブン=ピンカー(1995)『言語を生みだす本能〈上〉』日本放送出版協会
- 松村明監修(1998)『大辞泉』小学館
- 松本克己(2006)『世界言語への視座—歴史言語学と言語類型論』三省堂
- (2007)『世界言語のなかの日本語—日本語系統論の新たな地平』三省堂
- (2010)『世界言語の人称代名詞とその系譜 人類言語史5万年の足跡』三省堂
- 靱山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』研究社
- (2010)『認知言語学入門』研究社
- マリナ=ヤグェーロ(1990)『言語の夢想者』工作舎
- 山田忠雄編(2011)『新明解国語辞典第七版』三省堂
- ジョージ=ユール(1987)『現代言語学20章—ことばの科学』大修館書店
- 横山悟(2010)『脳からの言語研究入門』ひつじ書房
- 吉村公宏(2004)『はじめての認知言語学』研究社
- ジョージ=レイコフ(1986)『レトリックと人生』大修館書店
- (1993)『認知意味論—言語から見た人間の心』紀伊國屋書店

<索引>

- |             |                    |                    |
|-------------|--------------------|--------------------|
| IC 分析 115   | 意味素性 128           | オーストロ=アジア 屈折語 75   |
| IPA 59      | 意味論 127            | 諸語 137             |
| アスペクト 97    | 印欧語族 38            | オーストロネシア語 芸術言語 181 |
| アナロジー 142   | 印欧祖語 38            | 族 137              |
| アフオーダンス 157 | イントネーション 開音節 64    | 形態素 86             |
| アプラウト 142   | 66                 | 形態論 89             |
| アプリオリ 183   | インド=ヨーロッパ 架空言語 181 | 下落 132             |
| アフリカ諸語 137  | 語族 38              | ゲルマン語派 39          |
| アポステリオリ 183 | 隠喩 132             | ゲルマン祖語 39          |
| アメリカ=インディ   | ワイトゲンシュタイ          | 言語運用 119           |
| アン諸語 137    | ン 19               | 言語学 34             |
| アメリカ構造主義    | ヴォイス 96            | 言語学者 25            |
| 117         | ウォーフ 161           | 言語獲得装置 150         |
| アリストテレス 36  | 美しい日本語 144         | 言語決定論 160          |
| アルカ 188     | ウムラウト 142          | 言語生得説 119          |
| アルタイ語族 136  | ウラル語族 136          | 言語相対論 160          |
| アントニム 135   | エスペラント 182         | 言語と方言 74           |
| イエフダー 183   | 音位転換 141           | 言語能力 119           |
| イェルムスレウ 37  | 音韻対応 39            | 言語の数 74            |
| 異音 63       | 音韻論 54             | 言語の起源 138          |
| 異化 140      | 音響音声学 58           | 言語の恣意性 49          |
| 意義素 127     | 音声 56              | 語彙 73              |
| 意義特徴 128    | 音声学 54             | 語彙素 127            |
| 異形態 87      | 音声素性 62            | 工学言語 181           |
| 異形同義文 123   | 音節 63              | 合成 89              |
| 一般化 130     | 音節構造 64            | 合成語 86             |
| イディオム 155   | 音素 55              | 構造主義 117           |
| 意味成分 127    | 音調 66              | 構造主義言語学 117        |
|             |                    | 構造体 116            |
|             |                    | 句構造文法 117          |
|             |                    | 完結相 97             |
|             |                    | 感嘆文 115            |
|             |                    | 換喩 133             |
|             |                    | 慣用句 155            |
|             |                    | 機械翻訳 152           |
|             |                    | 機能語 87             |
|             |                    | 規範文法 36            |
|             |                    | 疑問文 115            |
|             |                    | 逆形成 90             |
|             |                    | 逆成 90              |
|             |                    | 共時言語学 42           |
|             |                    | 強弱アクセント 65         |
|             |                    | 極性 95              |
|             |                    | 曲用 76              |
|             |                    | 句 115              |
|             |                    | 句構造文法 117          |

膠着語 75	シネクドキー 133	成句 155	タブララサ 148
高低アクセント 65	シノニム 135	生成意味論 129	多様性 122
肯定文 115	自由アクセント 66	生成文法 119	単語 86
公用語 72	重音脱落 141	声調 65	単純語 86
合理論 118	従属節 115	成分分析 127	男性名詞 100
国語学者 25	重文 115	世界一難しい言語	単文 115
国際音声字母 59	主格 91	139	談話 127
国際補助語 181	熟語 155	節 115	中間言語 152
語形成 89	主語 115	接辞 86	中性名詞 101
固定アクセント 66	主節 115	絶対的普遍性 122	長音 65
言葉と文化 159	主題 93	接中辞 86	調音声学 58
語法 155	述語 115	接頭辞 86	調音点 61
孤立語 75	循環定義 11	接尾辞 86	調音法 61
コロケーション 20	上昇 131	セム語族 136	聴覚音声学 58
混成 90	省略 89	セレン 187	超分節音素 66
コーカサス諸語 137	助数詞 101	線条性 50	直接構成素 116
最小対語 62	女性名詞 100	相 97	直接構成素分析 115
サピア 161	所有格 91	双数 95	直喩 133
サピア=ウォーフの	ジョーンズ 41	促音 65	チョムスキー 119
仮説 160	シラブル 63	祖言語 39	通時言語学 42
ザメンホフ 182	人工言語 178	祖語 38	定性 92
恣意性 49	人工言語学研究会	ソシユール 37	提喩 133
子音 61	187	属格 91	添加 141
刺激の貧困 149	深層構造 123	態 96	転換動詞 157
時制 96	親族名詞 129	対格 91	テンス 96
自動翻訳機 155	シーニュ 48	対事モダリティ 99	伝統的言語研究 36
シナ=チベット語族	ストア学派 36	対人モダリティ 99	伝統文法 36
136	ストロース 117	濁音 61	同音異義語 134
シニフィアン 48	性 100	正しい日本語 144	同化 140
シニフィエ 48	清音 61	脱落 141	同形異義文 123

統語論 114	パーニニ 36	文法性 121	ムード 98
同字異義語 135	鼻音 61	文法範疇 91	命令文 115
頭字語 89	比較言語学 37	フンボルト 75	メタファー 132
同綴異義語 135	非完結相 97	閉音節 64	メトニミー 133
動物の言語 51	非絶対的普遍性 122	閉鎖音 61	目的語 115
特殊化 131	否定文 115	平叙文 115	モダリティ 99
ドラヴィダ諸語 137	非文 121	ヘブライ語 183	モーラ 64
トールキン 184	比喩 132	弁別素性 62	ヤーコブソン 37
内容語 87	表意文字 134	ボアズ 161	有声音 61
二重分節性 50	表音文字 134	ボイス 96	有標 96
日本語の起源 41	表層構造 123	母音 61	容認性 121
人称 93	ピンカー 148	母音三角形 62	与格 91
認知意味論 129	品詞 36	母音調和 140	ラテン文法 36
認知言語学 148	不可算名詞 95	法 98	ら抜き言葉 144
認知文法 121	複合語 86	抱合語 75	ラネカー 148
拍 65	複文 115	補語 115	ラング 48
場所性 20	不定性 92	ポンティ 37	両唇音 61
派生 89	普遍性 122	摩擦音 61	類義語 135
派生語 86	普遍文法 151	南アジア諸語 137	類型論 77
撥音 65	プラトン 36	ミニマルペア 62	類推 142
バベルの塔 52	フレーム意味論 121	無アクセント 67	レイコフ 148
ハム語族 136	文法 114	娘言語 39	和語 86
パロール 48	文法化 87	無声音 61	
反義語 135	文法カテゴリー 91	無標 96	

## 言語学少女とバベルの塔

---

2012年7月19日 初版第1刷発行

著者 seren arbazard

発行者 谷村勇輔

発行所 ブイツーソリューション

〒466-0848 名古屋市昭和区長戸町4-40

電話 052-799-7391 Fax 052-799-7984

印刷所 ●●

ISBN 978-4-86476-035-5

©seren arbazard 2012 Printed in Japan

---

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替えいたします。  
ブイツーソリューション宛にお送りください。